

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第501集

成 塚 遺 跡 群

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

東日本高速道路株式会社
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

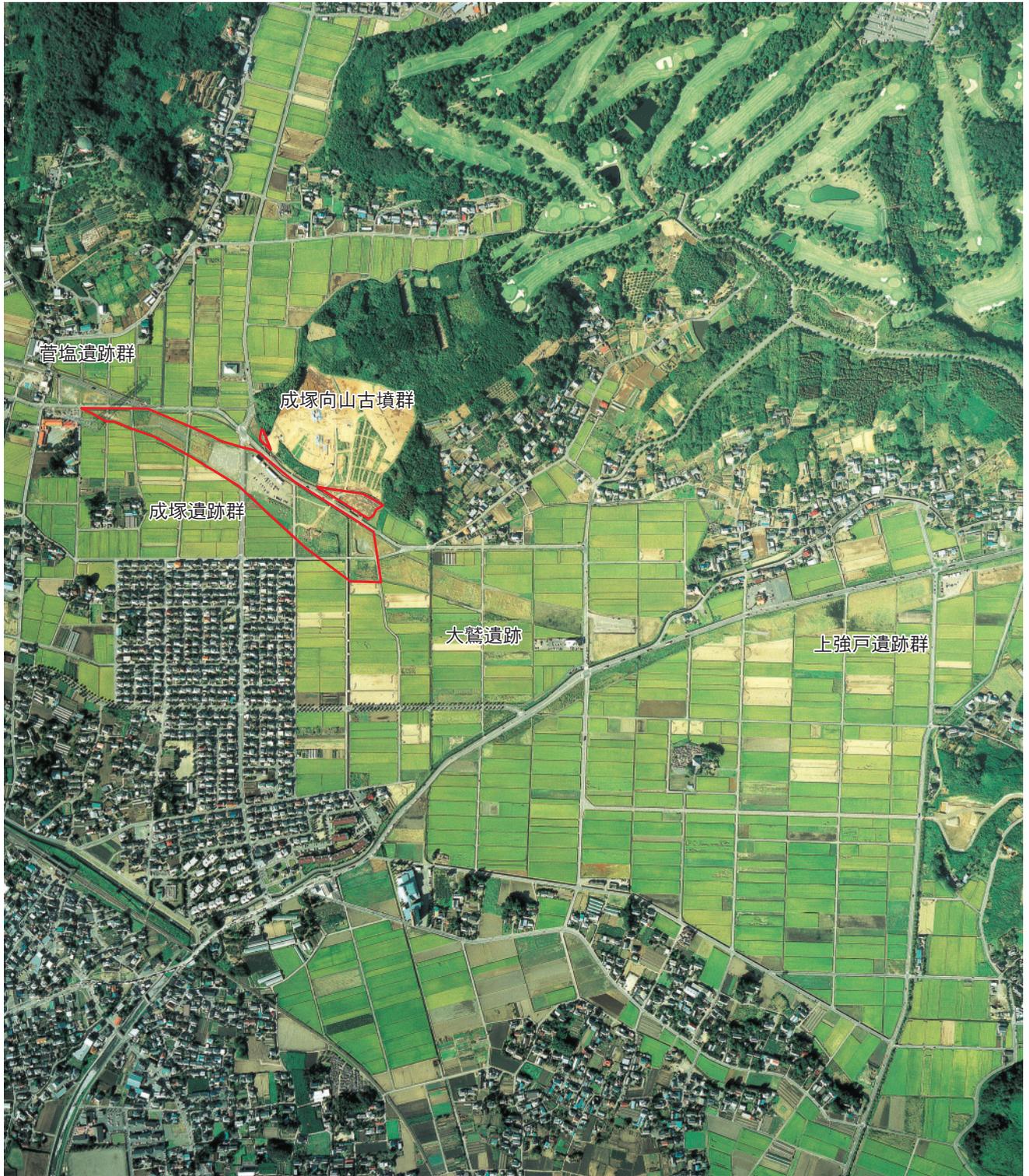
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第501集

成 塚 遺 跡 群

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

東日本高速道路株式会社
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



成塚遺跡群は太田市の北部、大間々扇状地南東端部と八王子丘陵南西端が接する部分に形成された沖積低地域に位置する。

発掘調査では平安時代の生産活動を示す水田とそれらに伴うと考えられる水路などが検出されている。

(右上が八王子丘陵、右下が金山丘陵。左下の整然と並んだ住宅地域には古墳時代の住居が数多く検出された成塚住宅団地遺跡がある。)

序

成塚遺跡群は、北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設工事に伴い、東日本高速道路株式会社の委託を受け、群馬県教育委員会の調整のもと、平成14年12月から平成17年3月にかけて、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した遺跡です。

今回報告する成塚遺跡群は大間々扇状地南東端と八王子丘陵南西端が接する部分に立地しています。調査の成果として、古くは4世紀代の古墳時代前期から新しい時代では近世までの多種にわたる遺構や遺物が検出されました。特に、平安時代末に浅間山の噴火に伴い降下した軽石で覆われた水田やそれらに伴う畦、水路、温め状施設などは当時の水田経営を知る上で貴重な資料となりました。

本報告書は、北関東自動車道建設に伴い発掘調査された他の遺跡とともに、当時の太田市域における歴史についての様相を明らかにするための資料となることでしょうか。また、報告書に掲載した出土品や記録類は、消滅した埋蔵文化財の保存記録として、今後活用されることを期待しています。

今回の報告書に至るまでには、東日本高速道路株式会社、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、ならびに地元関係者の皆様に多大なるご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げるとともに、本書が基本的な歴史資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成22年9月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

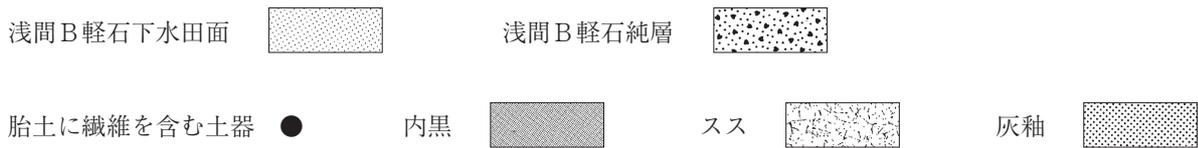
理事長 須田 栄 一

例 言

1. 本書は、北関東自動車道路（伊勢崎～県境）建設に伴い発掘調査された成塚遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 成塚遺跡群は太田市成塚町514, 524, 525, 621, 622, 623番地他に所在する。
3. 事業主体 東日本高速道路株式会社関東支社（旧日本道路公団）
4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 平成14年12月1日から平成15年1月31日
平成15年4月14日から平成15年12月31日
平成16年4月1日から平成17年3月31日
6. 発掘調査体制は次の通りである。
平成14年度
調査担当者：坂井隆（主幹専門員）、齊藤和之（専門員）、伊平敬（専門員）、根岸仁（専門員）
委託：地上測量 株式会社シン技術コンサル
平成15年度
調査担当者：柿沼弘之（専門員）、高島英之（専門員）
遺跡掘削請負工事：株式会社シン技術コンサル
委託：地上測量 株式会社測設
航空測量・空中写真撮影 株式会社シン技術コンサル
平成16年度
調査担当者：坂井隆（主幹専門員）、須田正久（専門員）、深澤敦仁（主任調査研究員）、
齋田智彦（主任調査研究員）、山田精一（主任調査研究員）、長澤典子（調査研究員）
遺跡掘削請負工事：山下工業株式会社
委託：地上測量 株式会社測設
航空測量・空中写真撮影 株式会社シン技術コンサル
7. 整理期間 平成22年4月1日から平成22年9月30日
8. 整理体制は次の通りである。
平成22年度 整理担当：須田正久（主任調査研究員）、保存処理 関邦一（補佐）、遺物撮影 佐藤元彦（補佐）
遺物観察 石器・石造物 岩崎泰一（主席専門員）、縄文土器 橋本淳（主任調査研究員）、土師器・須恵器 神谷佳明（上席専門員）、陶磁器・鉄製品・古銭 大西雅広（主席専門員）
9. 本書作成の担当者は次の通りである。
編集：須田正久
10. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力いただいた。記して感謝の意を表します。
（敬省略、順不同）
東日本高速道路株式会社、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会
11. 発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

凡 例

1. 本書の遺構図中にある+印とそれに付記される数値は、国家座標値X・Y値を表す。なお、遺構図中に標記したグリッド名称は、国家座標値の下3桁のみを用いて表記した。
2. 遺構図中で使用した北方位は座標北を示す。(真北方向角偏差 $-13' 12''$)
3. 遺構の方位は、座標北を基準として主軸角度等の傾きを計測した。
4. 遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。
遺跡全体図 1:200 1:600 1:2000 水田全体図 1:600 竪穴状遺構 1:40 1:60
土坑 集石 ピット 1:40 井戸1:60 柵列1:240 杭列 1:160 溝 1:60 1:100 1:200
遺物図の縮尺は下記のとおりである。
石鏃・古銭 1:1 1:2
鉄製品 1:2
縄文時代土器・土師器・陶磁器 1:3
木製品・石造物 1:4 1:6
5. 遺物写真は、遺構図とほぼ同じ縮尺で掲載してある。
6. 遺物の計測値は、欠損品の数値には()を付して完形品と区別した。
7. 遺構図・土器実測図におけるスクリーントーンは下記の通りである。



8. 本書で使用したテフラの名称及び降下年代は以下の通りである。
浅間A軽石・As-A(1783) 浅間B軽石・As-B (1108)
榛名二ツ岳火山灰・Hr-FA (6世紀初頭) 浅間C軽石・As-C (4世紀初頭)
9. 水田区画面積は、畦下端で求め、プランニメーターで3回計測し、その平均値を採用した。
10. 遺物観察表(土器)の色調は、農林水産省農林水産技術会議 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』を参考に色名を使用した。
11. 遺構番号の呼称は、調査区ごとに付番してある。
12. 調査区は1区から10区まで、現代の地割りや道路を境とし区割りを行った。調査は1区から行い、区番号順を基本とした。1区から9区については1面調査とし、10区については2面調査をおこなった。なお、2区、8区については試掘トレンチの結果、遺構面の確認が認められなかったため、トレンチ範囲及び、断面の撮影、測量を行い調査を終了した。
13. 本書で使用した地形図は下記の通りである。
国土地理院 地形図 1:25,000「桐生・上野境」
地勢図 1:200,000「宇都宮」

目 次

口絵

序

例言

凡例

本文目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	2
第3節 基本層序	3

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要	10
第2節 古墳時代の遺構と遺物	11
第1項 土坑	11
第2項 溝	12
第3節 平安時代の遺構と遺物	13
第1項 水田・溝・温め状遺構	13
第2項 溝	20
第3項 集石	21

第4節 中近世の遺構と遺物

第1項 竪穴状遺構	22
第2項 土坑	24
第3項 井戸	24
第4項 柵列	26
第5項 杭列	26
第6項 ピット	32
第7項 溝	33
第8項 流路	35

第4章 遺構外出土遺物

第1節 遺構外出土遺物の概要	36
----------------	----

第5章 まとめ

.....	43
-------	----

写真図版・報告書抄録

挿図目次・表目次・写真図版

挿図目次

第1図	遺跡位置図
第2図	基本土層
第3図	成塚遺跡群周辺の地形分類図
第4図	周辺遺跡の位置図
第5図	遺跡全体図（1区から7区）
第6図	遺跡全体図（9・10区）
第7図	10区 4・5・6号土坑・出土遺物
第8図	10区 2・6・7号溝・出土遺物
第9図	水田概念図
第10図	3区 水田
第11図	4区 水田・溝
第12図	5区 水田・溝
第13図	4区 1溝、5区 1号溝・1号温め状遺構
第14図	6区 水田
第15図	7区 水田
第16図	9区 1・2・4・6号溝
第17図	9区 1・2号溝セクション図・出土遺物
第18図	10区 1号集石・出土遺物
第19図	10区 1号竪穴状遺構
第20図	10区 2号竪穴状遺構・1・2号溝
第21図	10区 1・2号土坑
第22図	10区 1号井戸・出土遺物
第23図	10区 1号柵列
第24図	10区 1号杭列
第25図	10区 1号杭列出土遺物（1）
第26図	10区 1号杭列出土遺物（2）
第27図	10区 2号杭列出土遺物（1）
第28図	10区 2号杭列出土遺物（2）
第29図	10区 1号～6号ピット
第30図	1区 1・2号溝、9区 3・5・7号溝
第31図	10区 3・4号溝
第32図	10区 1号流路
第33図	3区・10区遺物分布図
第34図	遺構外出土遺物（1）
第35図	遺構外出土遺物（2）
第36図	遺構外出土遺物（3）
第37図	遺構外出土遺物（4）

第38図 水田概念図

第39図 周辺遺跡の水田

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表
第2表	10区4号土坑出土遺物観察表
第3表	10区2号溝出土遺物観察表
第4表	9区1・2号溝出土遺物観察表
第5表	10区1号集石出土遺物観察表
第6表	10区1号井戸出土遺物観察表
第7表	10区1号杭列木器観察表
第8表	10区2号杭列木器観察表
第9表	遺構外出土遺物観察表
第10表	遺構外出土遺物観察表（石器・石製品）
第11表	遺構外出土遺物観察表（鉄製品・古銭）

写真図版

PL. 1	10区 丘陵裾部 全景（西から）
	10区 丘陵裾部 全景（東から）
PL. 2	10区 4号土坑遺物出土状況（西から）
	10区 5号土坑全景（北から）
	10区 5号土坑セクション（北東から）
	10区 6号土坑全景（南東から）
	10区 6号土坑セクション（東から）
PL. 3	10区 2号溝全景（東から）
	10区 2号溝セクションA-A'（西から）
	10区 2号溝遺物出土状況（北から）
	10区 6号溝全景（東から）
	10区 7号溝全景（北西）
	10区 7号溝セクションA-A'（南から）
PL. 4	3区 A s - B下水田全景（東から）
	3区 畦・水口近接（北から）
	3区 北側畦全景（西から）
	3区 西側畦全景（北西から）
	3区 作業風景（北西から）
PL. 5	4区 A s - B下水田全景（南から）
	4区 南側畦近接（南から）
	4区 西側大畦近接（南から）
	4区 1号溝セクションA-A'（南から）
	4区 1号溝全景（南から）

PL. 6	5区 A s - B 下水田全景 (南西から)	10区 1号柵列全景 (南から)
	5区 1号溝・1号温め状遺構全景 (西から)	10区 2号杭列全景 (東から)
	5区 1号温め状遺構全景 (北から)	10区 2号杭列埋設状況 (南から)
	5区 1号溝縁畦畦全景 (南から)	PL. 13 10区 1～4号ピット全景 (西から)
	5区 1号溝・1号温め状遺構全景 (西から)	10区 5号ピットセクションA-A' (南から)
PL. 7	6区 A s - B 下水田全景 (東から)	10区 6号ピットセクションA-A' (南から)
	6区 西側畦全景 (南から)	1区 1・2号溝全景 (東から)
	6区 北側畦全景 (南西から)	1区 1・2号溝セクションA-A' (西から)
	6区 東側畦近接 (南から)	9区 3号溝全景 (北から)
	6区 水口近接 (西から)	9区 3号溝セクションA-A' (西から)
PL. 8	7区 A s - B 下水田全景 (南から)	PL. 14 9区 5・7号溝全景 (東から)
	7区 A s - B 下水田全景 (東から)	10区 3・4・5号溝全景 (南から)
	7区 北側畦全景 (東から)	PL. 15 10区 3号溝全景 (南から)
	7区 南東に走る畦近接 (南から)	10区 4号溝全景 (南西から)
	7区 A s - B 下水田面検出作業 (南から)	10区 5号溝全景 (東から)
PL. 9	9区 1・2・4号溝全景 (南東から)	10区 1号流路全景 (北西から)
	9区 1号溝遺物出土状況 (北東から)	10区 5号溝セクションA-A' (東から)
	9区 1号溝木製品出土状況 (北東から)	10区 1号流路セクションA-A' (南東から)
	9区 2号溝遺物出土状況	PL. 16 3区 土器集中部全景 (東から)
	9区 1・2号溝セクションA-A' (東から)	3区 土器集中部遺物出土状況 (南から)
PL. 10	10区 1号集石全景 (北から)	10区 土器集中部遺物出土状況 (西から)
	10区 1号集石セクションA-A' (東から)	10区 土器集中部遺物出土状況 (北から)
	10区 1号集石遺物出土状況 (南から)	10区 土器集中部遺物出土状況 (北から)
	10区 1号集石全景 (北から)	10区 土器集中部遺物出土状況 (北から)
	10区 1号竪穴状遺構全景 (北から)	10区 土器集中部遺物出土状況 (西から)
	10区 1号竪穴状遺構セクションA-A' (南から)	10区 土器集中部遺物出土状況 (北から)
	10区 1号竪穴状遺構木器出土状況 (南から)	PL. 17 10区 遺構外遺物出土状況 (西から)
	10区 1号竪穴状遺構セクションB-B' (西から)	10区 遺構外遺物出土状況 (北から)
PL. 11	10区 2号竪穴状遺構全景 (南から)	1区 北壁セクション (南から)
	10区 2号竪穴状遺構セクションA-A' (西から)	2区 西壁セクション (東から)
	10区 1・2号竪穴状遺構全景 (西から)	3区 北壁セクション (南から)
	10区 2号竪穴状遺構・1号溝セクションA-A' (西から)	5区 北壁セクション (南から)
	10区 1号土坑全景 (南から)	6区 東壁セクション (西から)
	10区 1号土坑全景セクションA-A' (北から)	9区 北壁セクション (南から)
	10区 2号土坑全景 (西から)	PL. 18 9区 1・2号溝・10区4号土坑、2号溝、1号井戸、1号集石 1号杭列 出土遺物
	10区 2号土坑セクションA-A' (南から)	PL. 19 10区 1号杭列 出土遺物
PL. 12	10区 1号井戸全景 (西から)	PL. 20 遺構外出土遺物1
	10区 1号井戸近接 (南から)	PL. 21 遺構外出土遺物2
	10区 1号柵列全景 (北東から)	
	10区 1号杭列全景 (北東から)	

第1章 調査の経過と方法

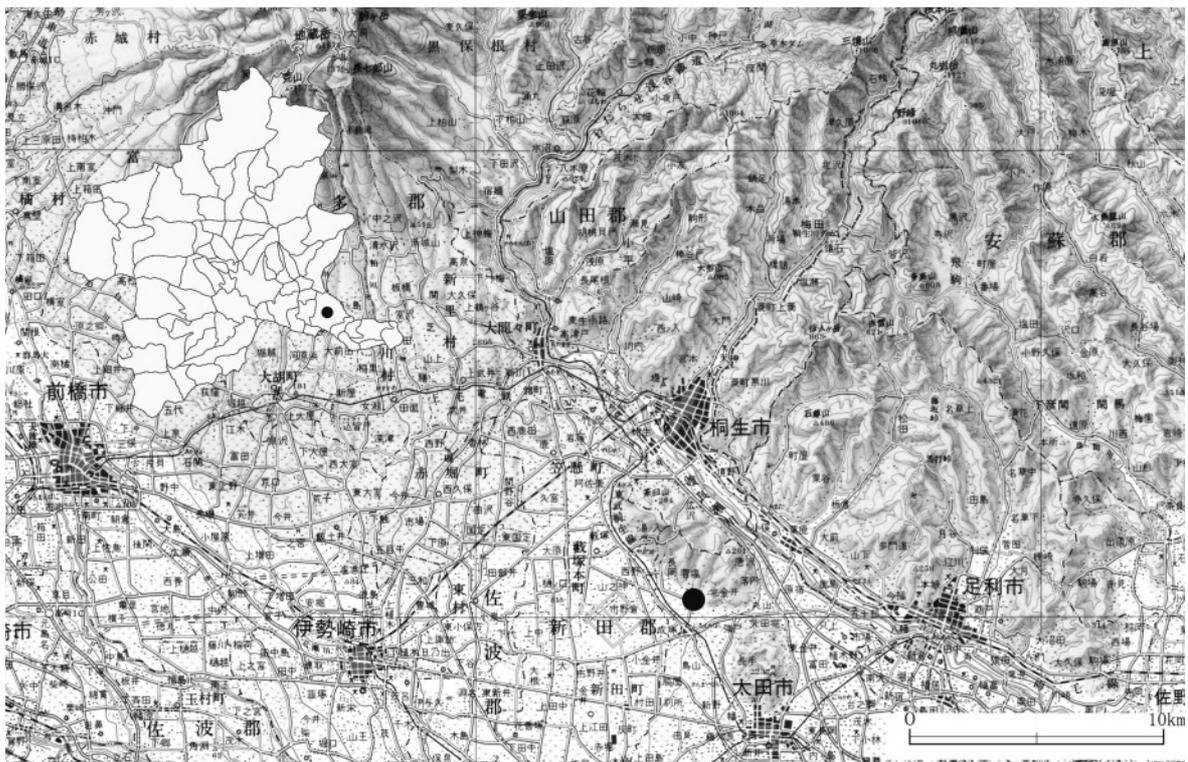
第1節 調査に至る経過

北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設工事に伴う勢伊崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmの発掘調査が開始されたのは平成12年度である。平成12年6月、日本道路公団（現 東日本高速道路株式会社）、群馬県土木部、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者による協議が行われた。この時、道路公団からは、橋梁下部工事等の工事優先区間の一部について、平成12年8月から発掘調査を実施すべく要請があった。これを受けて当事業団は、建設用地の解決状況、発掘調査において生ずる残土置き場の確保、側道部と本線部の調査区分の検討等、調査実施への準備を進めた。

平成12年8月1日、日本道路公団、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の3者による「北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結した。また、協定書に基づき公団と事業団による平成12年度発掘調査の委託契約が結ばれ、発掘調査は伊勢崎市書上遺跡から着手することとなった。

成塚遺跡は太田市西部、成塚町に位置する。発掘調査

区域は北関東自動車道本線建設予定地内、延長約650mの区間及び、市道強戸・西長岡1号線を挟んだ本線北側に計画された太田パーキングエリア計画地の一部3,478㎡である。調査区は現代の耕作面を区画する道などを区境とし、1区から10区に区分けし、北関東自動車道本線部分である西側調査区（1区）から調査を行った。試掘結果を踏まえ浅間B軽石層直下の水田面を調査第1面とした。水田土壌下層部は、礫を多量に含む泥流層ないし砂礫層が堆積しており、遺構・遺物を含む文化層は認められないと判断して調査は1面のみ行った。なお、2区及び8区については試掘調査の結果、遺構は確認されなかったため、全面的な本調査は行わなかった。また、平成16年度に調査を実施した10区においては1面下層より、土坑や溝、流路等が確認されたため第2面の調査も実施した。調査期間は平成14年12月より平成15年1月31日まで1区、15年の4月1日より12月31日まで3区から7区までの調査を行った。当初予定されていた太田パーキングエリア計画地にあたる9区、10区については、本遺跡北側の隣接調査地である成塚向山古墳群の残土置き場として使用していたため、あらためて平成16年度に成塚向山遺跡群とあわせて発掘調査を行うこととなった。



第1図 遺跡位置図

第1章 調査の経過と方法

発掘調査日誌抄録

平成14年度 (2003)

- 2003年 12. 6 調査事務所設置 発掘機材等搬
16 1区トレンチ調査
17 2・3区トレンチ調査
18 3区下遺構範囲確認精査 安全柵設置
24 年内作業終了

- 2004年 1. 6 調査開始 1～3区トレンチ内精査
8 1区重機による表土掘削 遺構検出作業
15 2区重機による表土掘削
16 2区遺構検出作業 5・6区安全柵設置
17 5・6区遺構範囲確認トレンチ
21 1区As-B混土下調査 2区調査終了
22 1区調査終了 2区埋め戻し
24 2区埋め戻し 7・8区トレンチ
30 3区西側遺構確認調査
31 1・2区調査終了

平成15年度 (2004)

- 2004年 4. 17 3区重機による掘削開始
23 調査区南側遺構確認 (As-B直上)
5. 2 5区重機による表土掘削
20 3区As-B下水田検出作業
26 5区As-B下水田検出作業
30 3区航空写真撮影・測量 調査終了
6. 23 6区表土掘削開始
7. 3 8区トレンチ調査
15 8区遺構なし調査終了
16 5区航空写真撮影・測量 調査終了
29 7区重機による表土掘削
8. 7 6区As-B下水田検出作業
10. 1 6区航空写真撮影・測量 調査終了
3 7区As-B下水田検出作業
20 4区重機による表土掘削
27 7区航空写真撮影・測量 調査終了
11. 7 4区As-B下水田検出作業
12. 12 4区航空写真撮影・測量 調査終了
12. 25 現場最終日 3区から8区すべて終了

平成16年度 (2005)

- 2005年 4. 6 10区遺構検出作業

4. 27 10区遺構2・3号溝検出作業
7. 28 10区東側遺構確認
8. 4 10区ハイライザーによる全景写真
8. 5 10区2面調査開始 流路検出作業
8. 10 10区2面全景
10. 15 9区1・2号溝全景写真
12. 8 9区全景写真
12. 20 現場最終日

第2節 調査の方法

調査にあたってのグリッド設定は、国家座標IX系を用い、10mを基準とした。各グリッドの名称は、X軸・Y軸ともに座標値の下3桁のみを表記している。調査区の名称は、アラビア数字の1区から10区を使用し、設定を行った。遺構番号は、それぞれの区ごとに1から付番を行った。調査区は道路本線部分を1区から8区に設定し、太田パーキングエリア建設予定部分を9区、10区とした。

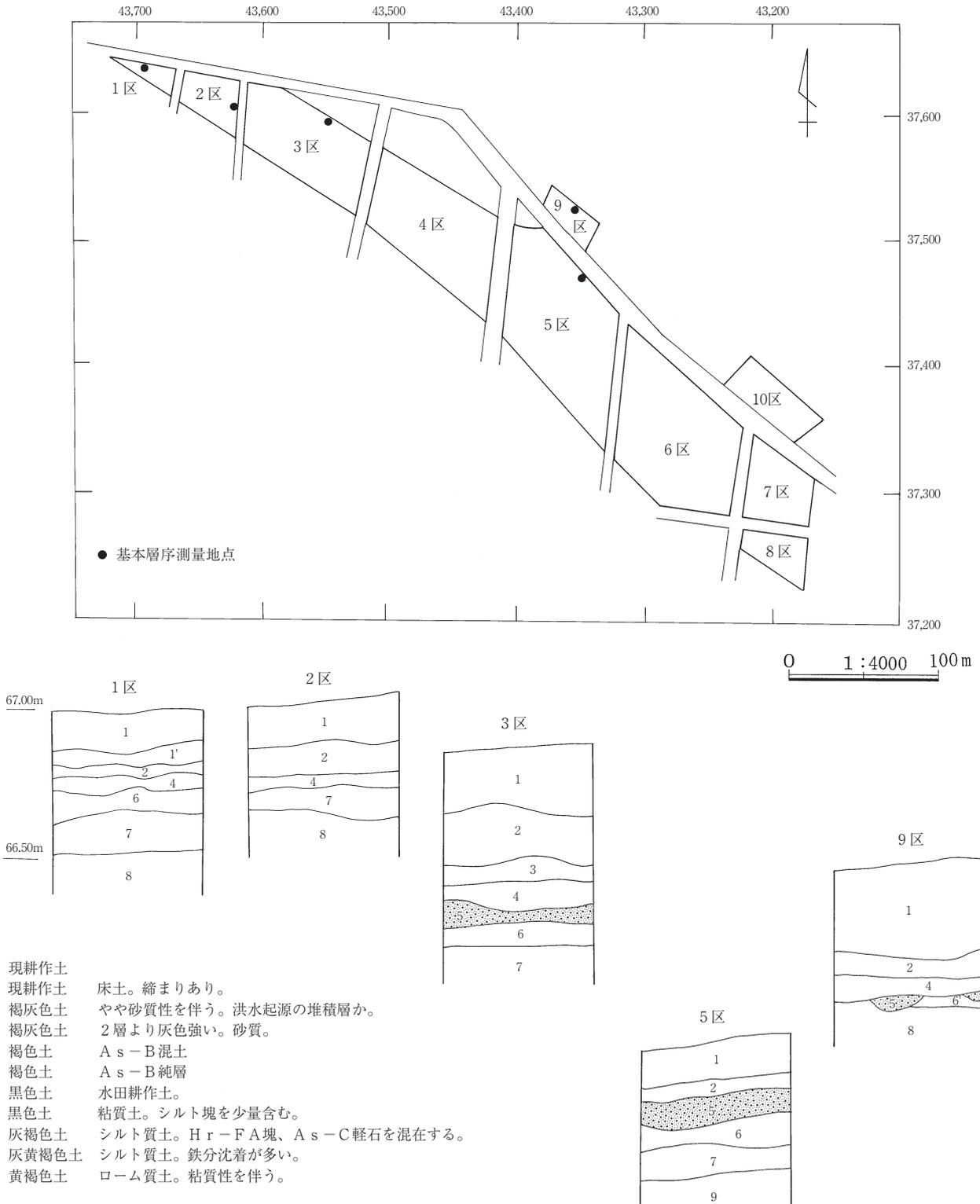
調査は西側1区から開始し、4区については調査事務所及び作業員休憩所の設置場所があるため、本線部分最後の8区終了後に行うこととした。また、9区、10区については成塚向山古墳群の残土置き場として使用していたため、本線調査終了後、平成16年度の高墳群調査と平行して行うこととなった。

発掘調査はバックホーによる表土掘削を行い、作業員による鋤簾、移植ゴテ等での遺構検出、精査作業という手順で調査を進めた。表土を除去し、As-B直上面を平安時代面とし遺構確認調査を行った。1区から8区については調査前のトレンチ遺構確認調査で平安時代以前の遺構が存在しないことが確認されていたため、すべ1面のみ調査を行い終了とした。10区については平安時代以前の土坑や流路が確認されたため、一部2面調査を行った。遺構記録測量は、原則として断面、平面測量において1/20、1/40、1/60、1/100を遺構ごとに選択して行った。記録写真撮影は6×7及び35mm一眼レフカメラで白黒、カラースライドフィルムを使用した。水田面は全景写真撮影は委託業者によるラジコンヘリコプターでの撮影を行った。

第3節 基本層序

本遺跡の基本層序として、水田が検出されなかった1区、2区と浅間B軽層下の水田が検出された3区、5区、八王子丘陵麓の9区の調査区内断面5箇所を選び下記に示した。本遺跡は、圃場整備事業に伴う削平及び、客土

による影響を大きく受け旧地形は不明瞭である。3区から7区においては、浅間B軽石の純層が堆積している。水田土壌下層部は、榛名-二ツ岳火山灰塊や浅間C軽石を混在させる部分もあるが、ほとんどの土層は泥炭のシルト質土や礫を多量に含む泥流層ないし砂礫層で遺構・遺物を含む文化層は認められない。



第2図 基本土層

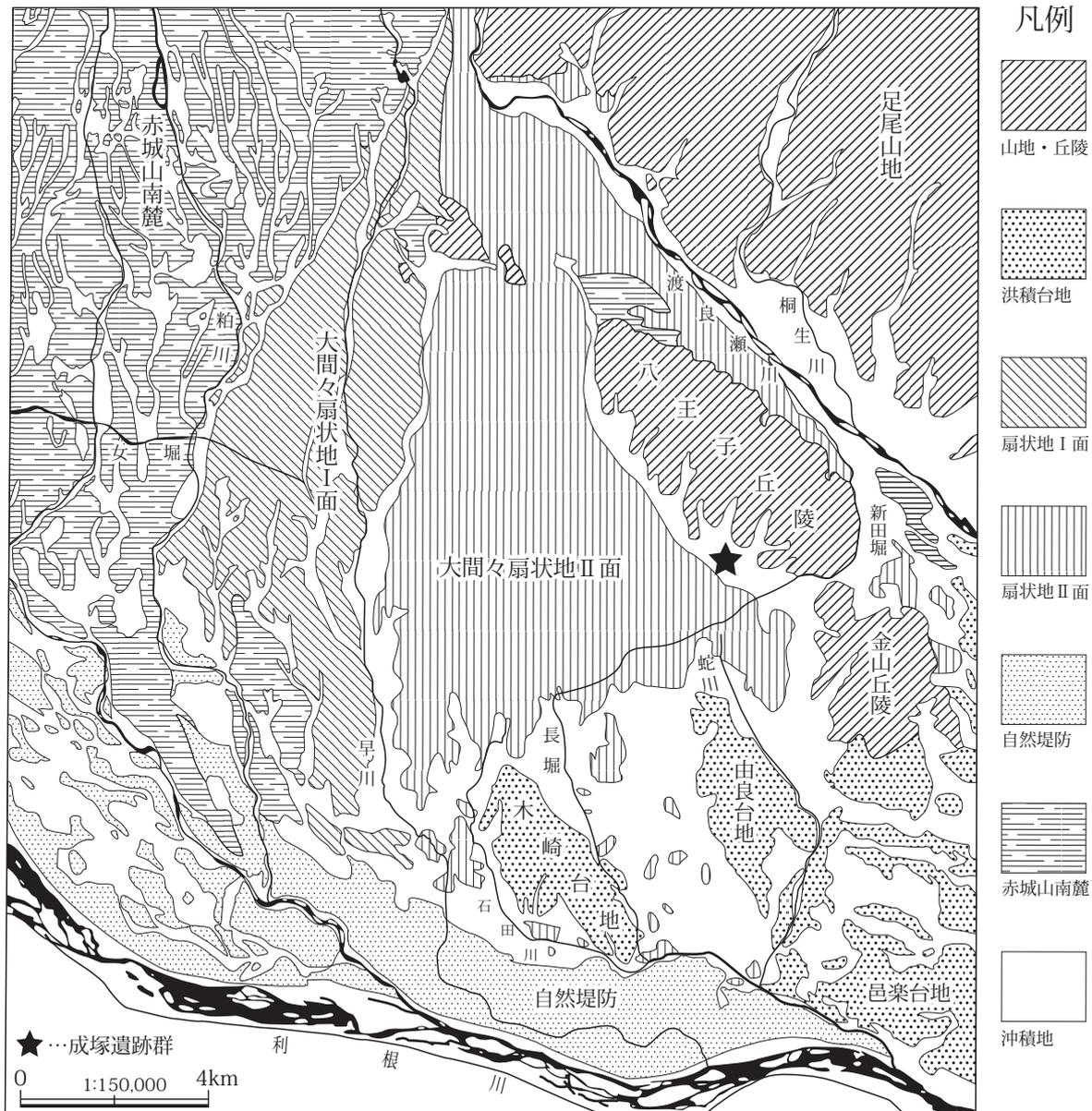
第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

遺跡が立地する群馬県太田市の地形は、金山丘陵（標高約236m）と八王子丘陵（標高約294m）および、その周辺の台地・低地で構成される。遺跡はこの太田市北西部に位置する。この一帯は渡良瀬川が更新世に形成した「大間々扇状地（Ⅱ面）」相当する。大間々扇状地は、渡良瀬川が足尾山地を流れ出る谷口にあたる大間々町（標高約200m）を扇頂とし、西は赤城火山南東斜面、東は八王子丘陵・金山丘陵を限りとする東西約14km、南北約16kmに及ぶ関東地方で三番目に大きな扇状地である。

この扇状地は、早川を境として形成時期を異にする新旧二つの地形面からなり、その様相も大きく異なる。早川の西、赤城山南東山麓地域である桐原原は約5万年前に、早川の東側から八王子丘陵までの藪塚面は約2万年前に形成された。成塚遺跡群はこの藪塚面の扇頂部付近、標高50m～60m地帯で、八王子丘陵、金山丘陵の縁辺や丘陵浸食谷による沖積低地をその立地環境とする。

遺跡の位置する成塚町周辺は、大間々扇状地南東端部と八王子丘陵南西端が接する部分に位置し、遺跡周辺は水田地帯が広がっている。



第3図 成塚遺跡群周辺の地形分類図

第2節 歴史的環境

旧石器時代 金山丘陵の山麓部や八王子丘陵などに発達した低丘陵地域に旧石器時代の遺跡が発見されるようになり、利根川左岸に連なる高林地区のローム層台地や、沖積層平野に取り残された小規模なローム層台地などからもこの時代の遺跡が発見されるようになった。八王子丘陵や金山丘陵には、峯山遺跡・村上遺跡・強戸口峯山遺跡・大鳥口遺跡などが分布しており、槍先形尖頭器・搔器・彫刻刀形石器・ナイフ形石器などが出土している。

縄文時代 草創期・早期の遺跡は八王子丘陵・金山丘陵周辺の沖積低台地に分布する。下宿遺跡からは草創期の爪形文土器が出土している。

早期の遺跡には、金山南東部に張り出す舌状台地状の焼山丘陵に広がる焼山遺跡から撚糸文系の土器や押型文系の土器が出土している。また、早期後半の貝殻条痕文系の土器出土している遺跡としては焼山遺跡、上遺跡、雷遺跡、間之原遺跡、大道東遺跡、堂原遺跡などある。

中期は大間々扇状地末端の成塚団地遺跡、烏山下烏山遺跡や低台地縁辺の堂原遺跡、金山東麓など台地縁辺やこれに続く微高地地帯に占拠する遺跡が知られる。成塚住宅団地からは14件の住居跡が検出されている。

後期の遺跡は竜舞台地や大泉台地、由良台地、大間々扇状地末端台地などに充実したものが認められる。小野田遺跡や上遺跡からは、称名寺式期の住居跡や土坑から検出されている。

弥生時代 市域の弥生時代の遺跡は限られた地域であり、八王子丘陵や金山丘陵の沖積地を間近に望む縁辺部や周辺沖積地の低台地に散見される。成塚向山古墳群は八王子丘陵の南東部で沖積低地に張り出す尾根上にあり、弥生中期の土器が出土している。独立丘陵に立地する小丸山遺跡には後期の土器片の散布が認められる。

古墳時代 古墳時代になると、市域全体に遺跡が濃密な広がりを見せる。古墳時代前期に東海地方土器式を受容した石田川遺跡が著名である。成塚団地遺跡では前期の住居跡90余軒をはじめ方形・円形周溝墓が検出されている。八王子丘陵上の成塚向山古墳群では前期の古墳とともに集落跡が見つかった。また、前期古墳の寺山古墳は上強戸遺跡群を南東から俯瞰する丘陵先端部にあ

り、全長60mの前方後円墳である。

古墳中期の遺跡はその立地条件を前代からほぼ踏襲して主に低台地上に展開する。市域には、太田天神山古墳をはじめ東日本有数の大型古墳が出現する。本遺跡周辺では、全長95mの前方後円墳の鶴山古墳、径35mの円墳または帆立形とも考えられた亀山古墳、全長66mの前方後円墳の鳥崇神社古墳等、県内古墳中期を代表する様な古墳が多くみられる。生産遺跡では金山丘陵を中心に東日本最大級窯業地帯を展開する。6世紀後半頃には丘陵の東縁を主に窯跡の分布があり、操業の最盛期であったと考えられる。金山丘陵窯跡産須恵器製品の流通範囲は関東一円に及んでいる。埴輪窯跡には八王子丘陵に駒形神社埴輪跡が、沖積低台地では成塚団地遺跡がある。

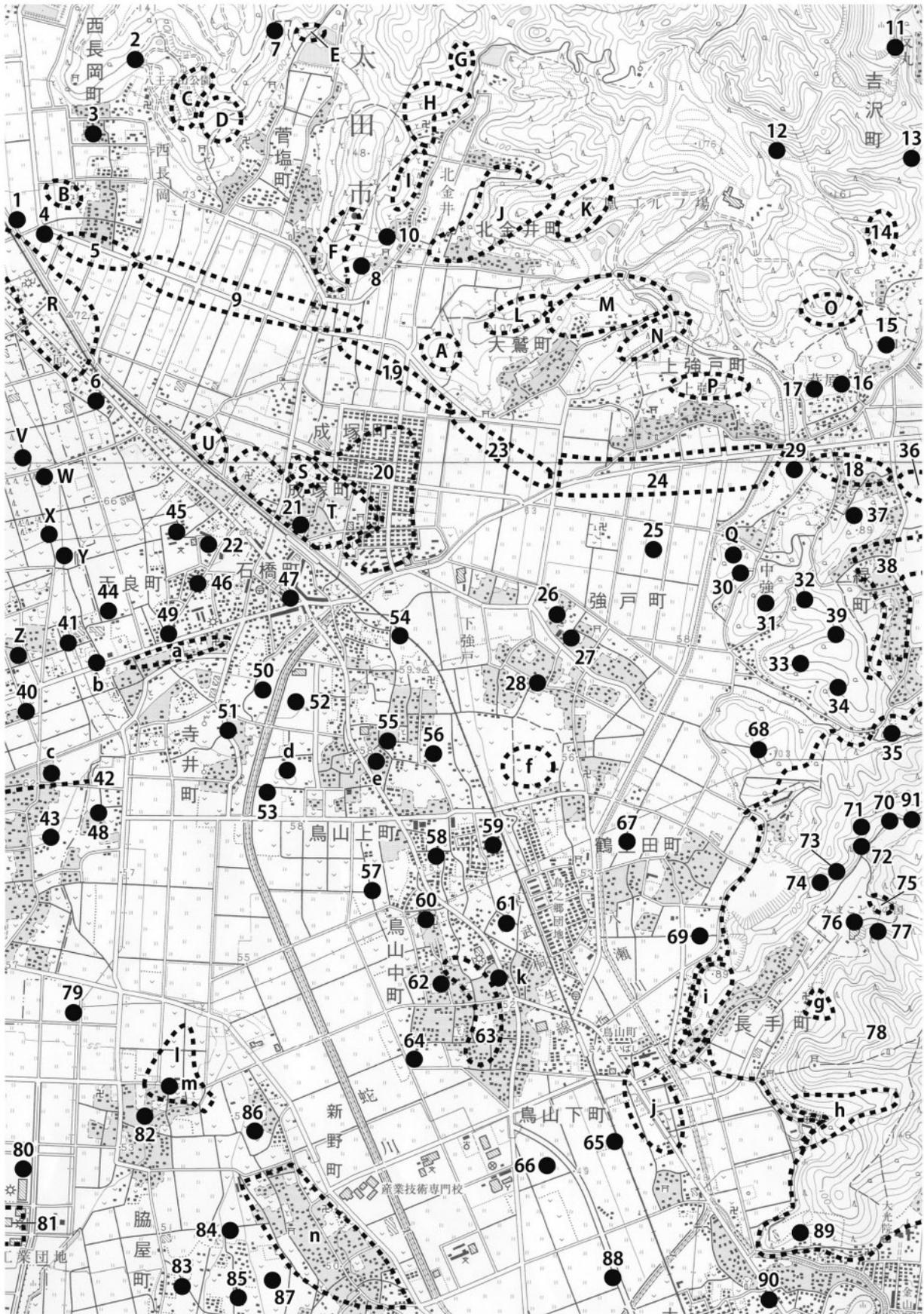
歴史時代 本遺跡東に立地する二の宮遺跡からは奈良・平安時代の堅穴住居が53軒検出されている。この二の宮遺跡の西に隣接する古水条里制水田跡からは条里制水田が検出されている。この条里制水田と同時期と考えられる本遺跡をはじめ菅塩遺跡や大鷲遺跡から検出された水田の経営主体は、この二の宮遺跡の集落と関係が深いものと考えられる。また、この時期の集落として二の宮遺跡から更に東に続く台地上に立地する八ヶ入遺跡をはじめ大道西遺跡、大道東遺跡からは大集落跡が検出されている。

本遺跡南には県内初期寺院の一つで7世紀後半の創建とされる寺井廃寺、新田郡衙に推定されている天良七堂遺跡など古代新田郡の中枢部を形成する諸遺跡が集中する。7世紀末から8世紀にかけては新しい産業として製鉄の生産がはじまり、西野原遺跡や峯山遺跡からは製鉄炉が検出されている。また、同時期には金山丘陵の須恵器窯跡群は丘陵西縁部に生産の拠点を移動し、高太郎Ⅰ遺跡や山去窯跡群で操業を開始する。八王子丘陵にある萩原遺跡などでは瓦生産が須恵器生産とともに行われるようになった。

中世 金山山頂を中心に城郭を形成する金山城跡は県内屈指の中世山城である。萩原館跡、大鳥館跡、大鳥城跡、由良城跡、台源氏館跡、烏山城跡など周辺には金山城跡関連の城館が点在する。

参考文献

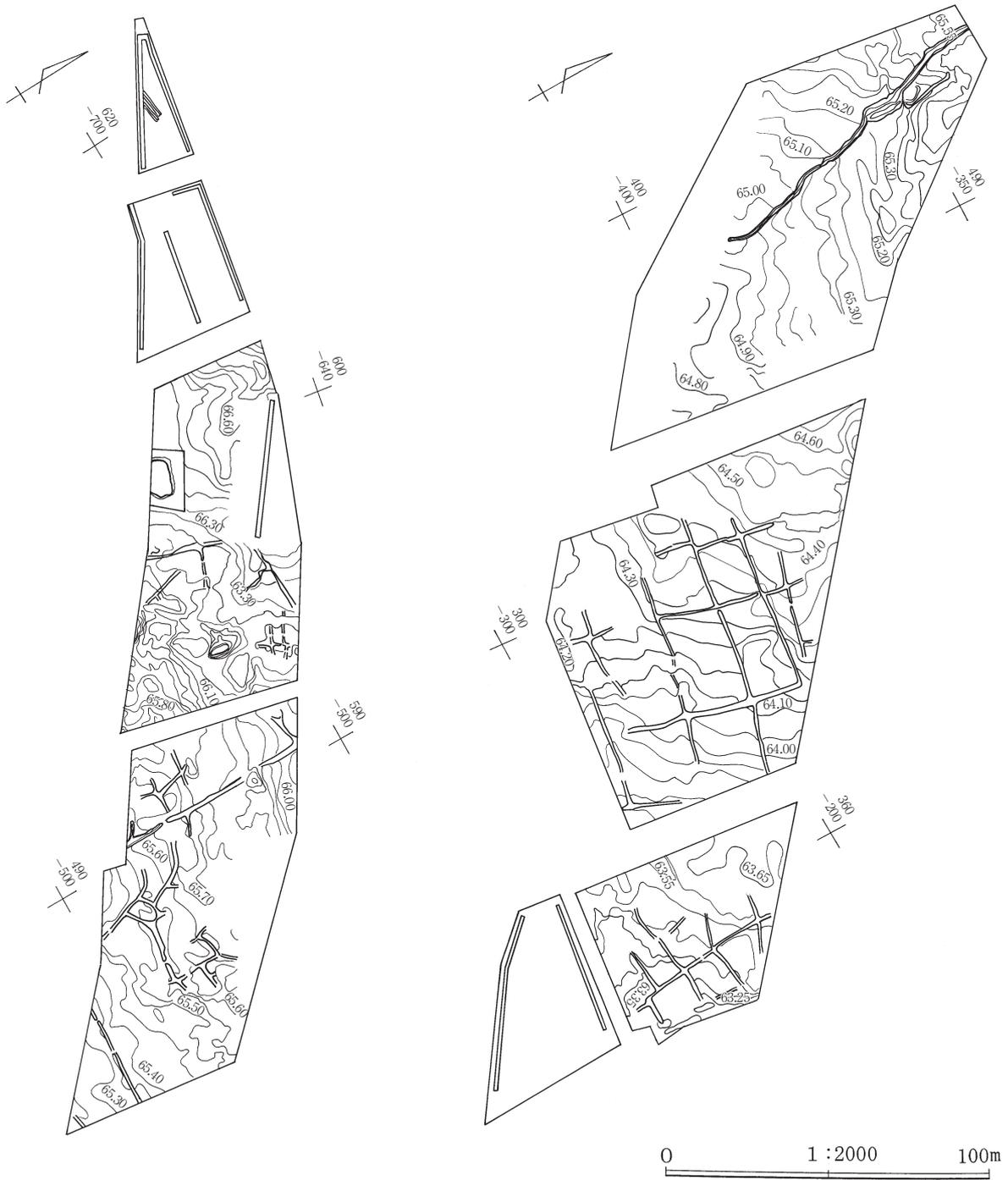
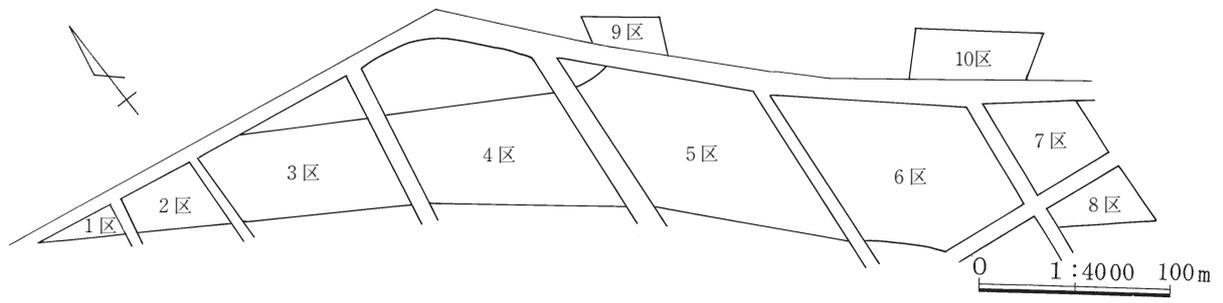
- ・太田市史「通史・原始古代」1996
- ・成塚向山古墳群 群埋文 2008
- ・上強戸遺跡群 群埋文 2009



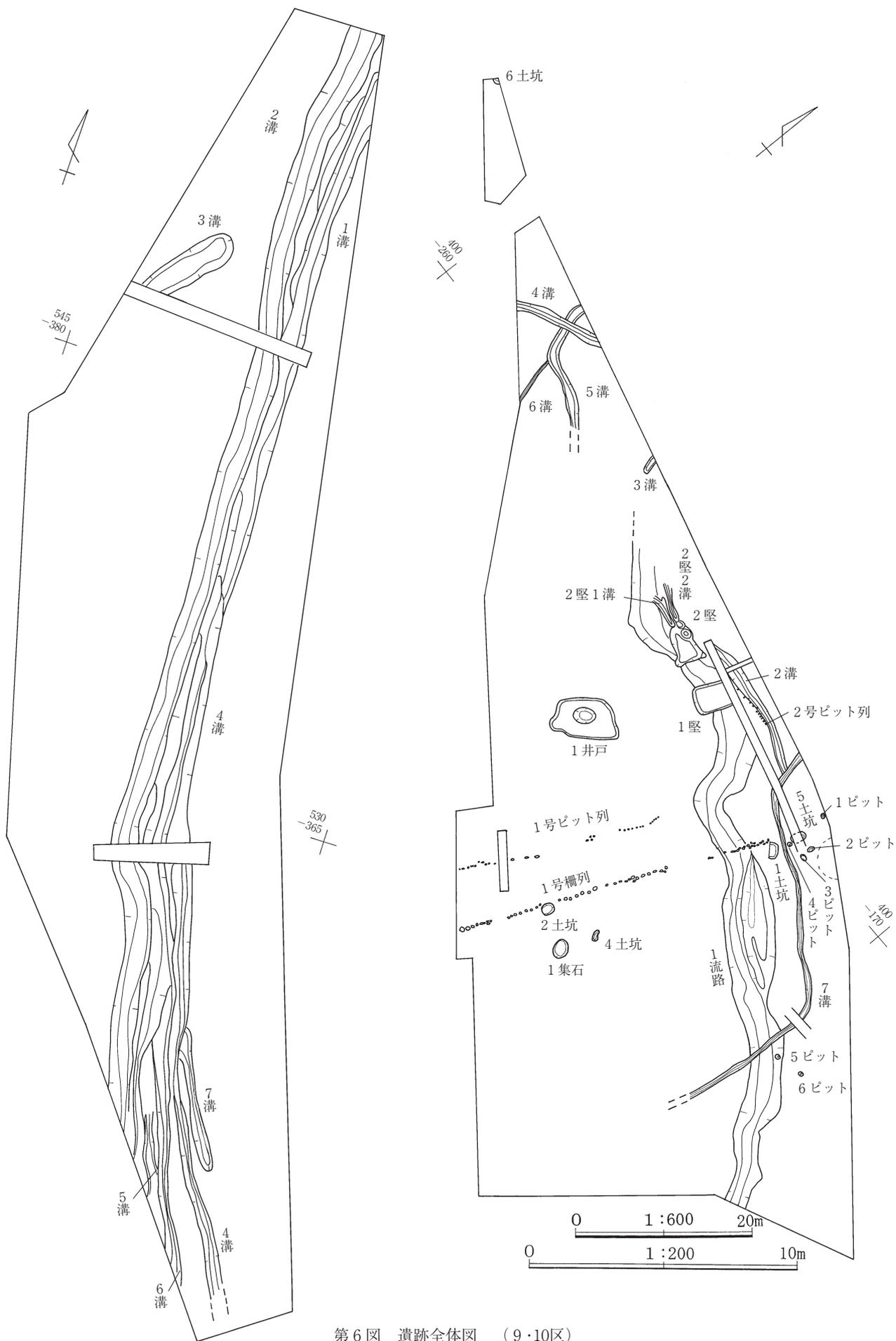
第4図 周辺遺跡の位置図

遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥 ～ 平安	中近世
A	成塚向山古墳群	○	○	○	○	○	○
B	西長岡宿古墳群				○		
C	西長岡東山古墳群			○	○	○	
D	菅塩西山古墳群				○		
E	菅塩祝入古墳群				○		
F	菅塩山崎古墳群				○		
G	西高坪古墳群				○		
H	北金井西山古墳群				○		
I	北金井川西古墳群				○		
J	北金井御嶽山古墳群				○		
K	北金井東浦古墳群				○		
L	大鷲梅穴古墳群				○		
M	大鷲大平古墳群				○		
N	大鷲向山古墳群				○		
O	吉沢古墳群				○		
P	上強戸古墳群				○		
Q	寺山古墳				○		
R	西長岡横塚古墳群	○	○			○	○
S	業平塚古墳群			○	○	○	
T	成塚古墳群				○		
U	成塚街道北古墳群				○		
V	二ツ山古墳 1号墳				○		
W	二ツ山古墳 2号墳				○		
X	天良蛇塚古墳				○		
Y	新生割古墳				○		
Z	堀廻古墳				○		
a	寺井古墳群				○		
b	寺井境古墳				○		
c	松尾神社古墳				○		
d	鶴山古墳				○		
e	亀山古墳				○		
f	鶴生田・下強戸古墳群				○		
g	式反田古墳群				○		
h	貧乏塚古墳群				○		
i	長手口古墳群				○		
j	三枚橋南古墳群				○		
k	鳥崇神社古墳				○		○
l	脇屋古墳群				○		
m	オクマン山古墳				○		
n	新野古墳群				○		
1	西野原遺跡		○	○	○	○	○
2	愛宕山遺跡				○	○	
3	長岡城跡						○
4	鳥谷戸遺跡		○		○	○	○
5	西長岡宿遺跡		○		○	○	○
6	愛大塚遺跡				○		
7	菅塩祝入窯跡					○	
8	菅塩田谷遺跡		○				
9	菅塩遺跡群		○		○	○	○
10	駒形神社埴輪窯跡				○		
11	岩神遺跡	○	○				
12	落内沢窯跡					○	
13	落内遺跡				○	○	
14	吉沢窯跡群					○	
15	村上遺跡	○					
16	萩原館跡						○
17	萩原窯跡	○				○	
18	萩原遺跡	○	○		○	○	
19	成塚遺跡群		○		○	○	○
20	成塚住宅団地遺跡群	○	○		○	○	
21	成塚石橋遺跡				○		
22	寺井庵寺東遺跡				○	○	
23	大鷲遺跡群				○	○	○
24	上強戸遺跡群				○	○	○
25	寺の東遺跡		○				
26	強戸の寄居						○

遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥 ～ 平安	中近世
27	強戸宮西遺跡		○		○		
28	畑中遺跡				○		
29	峯山遺跡	○	○		○	○	○
30	鶴巻西遺跡				○		
31	強戸口峯山遺跡	○			○	○	
32	鶴巻遺跡		○		○		
33	越々山遺跡	○	○		○		
34	笹ヶ入北遺跡		○		○		
35	笹ヶ入窯跡						○
36	古氷条里制水田址						○
37	雷電山遺跡		○		○	○	
38	古氷郡衙跡						○
39	堂ノ北西遺跡				○	○	
40	笠松遺跡				○	○	
41	天良七堂遺跡				○	○	○
42	推定東山道駅路 新田地区						○
43	七堂遺跡						○
44	上根遺跡		○		○		
45	寺井庵寺北遺跡				○	○	
46	寺井庵寺跡						○
47	石橋地藏久保遺跡				○	○	
48	寺井本郷遺跡				○	○	
49	新田遺跡				○	○	
50	鷲ノ宮遺跡						○
51	久保畑遺跡				○	○	
52	久保遺跡						○
53	八幡遺跡				○		
54	寺裏遺跡				○	○	
55	上遺跡				○		
56	鳥山寺中遺跡				○		
57	大光寺跡						○
58	上泉開戸遺跡				○		
59	中道遺跡				○		
60	鳥山宿屋敷遺跡		○				
61	鍛冶遺跡				○		
62	鳥ヶ谷戸遺跡				○		
63	鳥山環濠遺構群						○
64	鳥山下遺跡				○		
65	三枚橋南遺跡		○				
66	前沖遺跡		○		○	○	○
67	中妻遺跡				○		
68	鶴生田口遺跡		○		○		
69	間々下遺跡		○		○		
70	カニガ沢遺跡					○	○
71	高太郎Ⅲ遺跡				○		
72	高太郎Ⅰ遺跡				○	○	
73	鍛冶ヶ谷戸遺跡				○	○	
74	高太郎Ⅱ遺跡						○
75	山去窯跡群					○	
76	山去・十八曲遺跡		○		○		○
77	長手口砦跡						○
78	金山城跡						○
79	脇屋深町遺跡				○		
80	唐桶田遺跡				○		
81	新田東部遺跡群				○		
82	堂原遺跡	○	○	○	○	○	○
83	岡原遺跡				○		
84	脇屋中原遺跡						○
85	観音免遺跡（脇屋義助館跡）						○
86	釣堂遺跡				○	○	
87	下原遺跡				○		
88	年保遺跡		○		○		
89	大島口遺跡	○	○		○		
90	大島館跡						○
91	堤入遺跡				○		
他	石之塔遺跡（旧藪塚町）		○				



第5図 遺跡全体図（1区から7区）



第6図 遺跡全体図 (9・10区)

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

本遺跡は太田市北部の成塚町に所在し、群馬県桐生市から太田市にかけての、渡良瀬川右岸に沿って連なる八王子丘陵から金山丘陵の南に接する位置にある。

調査区は圃場整備事業による土地改良の削平の影響や、北側に接する八王子丘陵から南流する小河川等の浸食作用などの影響を大きく受けている。このため、調査範囲内においての遺構残存状態は良好とはいえない。調査は試掘結果を踏まえ浅間B軽石層直下面を調査第1面とし、概ね平安時代以降から中近世の遺構確認面とした。10区においては、平安時代以前の遺構も第1面調査時で確認されたため、上下2面調査をおこない平安時代以前の遺構を検出した。なお、2区については八王子丘陵から南流する小河川等の自然河道がほぼ全域で認められ、遺構の検出には至らず、8区においても土地改良による削平の影響を著しく受けおり遺構は確認できなかった。1区から7区の北関東自動車道本線部分から検出された遺構は、1区で検出された近世の溝を除けば、すべてが浅間B軽石層で覆われた水田やこれに伴う畦、溝、温め状遺構など、当時の水田経営に関わる一連の遺構群であるといえる。また、八王子丘陵の麓部分である9区、10区については様相が異なり、浅間B軽石の堆積は確認されたが水田面は検出されず、9区からは、時期差はあるが南北方向に走行する溝が5条検出された。また、10区においては、竪穴状遺構や土坑、溝、杭列、ピット列など遺構の性格や時期が異なるものが数多く検出された。成塚遺跡群で検出された遺構を時期別で下記に記述する。

縄文～弥生時代 3区の一部微高地部分から縄文時代中期の土器片が集中して出土した。しかし、土器出土周辺部を精査したが、これらの土器に伴う遺構は検出されなかった。10区を西から東へ走行する旧河道が検出された。この河道覆土層上には古墳時代前期の遺構があることから古墳時代より古い段階で埋没した河道と考えられるが、出土遺物がないため時期は明確にできない。

古墳時代 本遺跡から検出された古墳時代の遺構は土坑3基、溝3条であり、そのすべては10区から検出されている。4号土坑からは古墳時代前期の壺の胴部が出土し、2号溝からは同時期の土師器高杯脚部が出土している。

他の遺構からは遺物は出土していないが、遺構覆土中に浅間C軽石が混在する状況や4号土坑や2号溝などの覆土と類似することから古墳時代に帰属するものと判断した。また、本遺跡全体からは埴輪片が数多く出土している。これは本遺跡北側に隣接する成塚向山古墳群から検出された古墳に関係が深い遺物であり、本遺跡からはこれらが樹立されたであろう古墳は検出されていない。これらの埴輪片は摩滅が著しく形状も不明瞭なものが多いため、本文では数量のみを記載した。10区の丘陵裾周辺から古墳時代前期の遺物が集中して出土した。祭祀の可能性も考えられたが、北側が調査区外のため全容が不明であり、周辺調査からも遺構となりうる明確な確証がなかったため遺構外出土の土器として取り扱った。

平安時代 この時期の遺構は、3区から7区で検出された浅間B軽石層に覆われた水田面とそれに伴う溝や温め状遺構、9区から検出された溝や10区の灰釉陶器片などが出土した集石がある。水田は調査区の東西約500m、南北約70mの範囲で確認されている。中でも6区、7区から検出された水田は畦で囲まれた長方形の区画形状をしたものが検出された。また、4区で検出された幅2mほどの大畦や、5区で検出された溝や、溝の両縁辺に平行しながら走行する畦、溝の中央部に設けられた水を温めるための貯水施設である温め状遺構等は、この地域一帯の水田造成の一端を窺い知ることのできる貴重な資料である。9区から検出された同時期の溝もこの水田経営に重要な水の供給に欠かせない幹線水路であつた可能性が高い。しかし、当時は条里制の基、整然と区画された水田によって水田経営が行われていた様相が今までの発掘調査などで明らかになっている。しかし、本遺跡や周辺遺跡からは条里区画と思われる水田区画は検出されていない。6区の水田のように整然と区画されているものもあるが、畦は条里区画における軸には乗らず、多くの区画は地形に沿って造られた不整形なものである。

中近世 この時期の遺構は竪穴状遺構2基、土坑2基、井戸1基、ピット列1、杭列2、ピット6基、溝7条が検出されている。これらの遺構からは明確な時期を決定づける出土遺物が少ないため、時期認定については他の遺構との重複関係や浅間A軽石、浅間B軽石を混入する覆土等から判断した。

第2節 古墳時代の遺構と遺物

本遺跡周辺には成塚団地遺跡や成塚向山古墳群など古墳時代を中心とした遺跡が立地する。しかし、本遺跡をはじめ、東西それぞれに隣接する菅塩遺跡群、大鷲遺跡からは古墳時代の遺構はそれほど多くは検出されていない。

第1項 土坑

検出された古墳時代に帰属すると考えられる土坑は3基である。共伴遺物がないものについては、明確な帰属時期決定は困難であったが、覆土中に浅間C軽石が混在する状況や、共伴遺物出土の遺構覆土の様相と類似するものをこの時期のものとして判断し掲載した。

10区4号土坑（第7図、PL2）

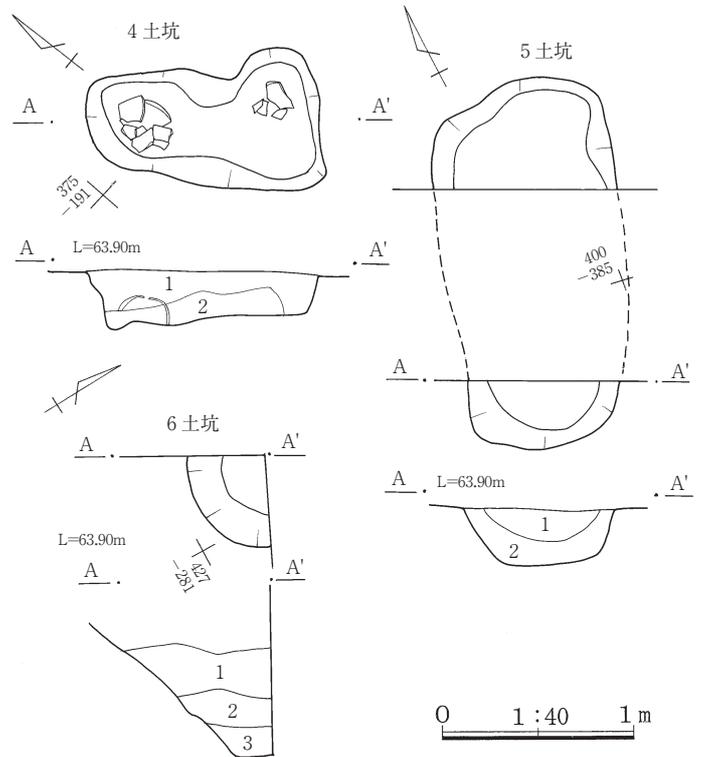
東調査区376-189グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも北側中央部がやや内側に挟り込む不整形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.6m、深0.3mを測り、長軸方向はN-56°-Wを示す。覆土は浅間C軽石を混在させる粘質土を主体とする。出土した土師器甕は倒置された状態で出土したため墓坑としての可能性も否めないが、埋没状況から自然埋没と考えられ、土坑として掲載した。

10区5号土坑（第7図、PL2）

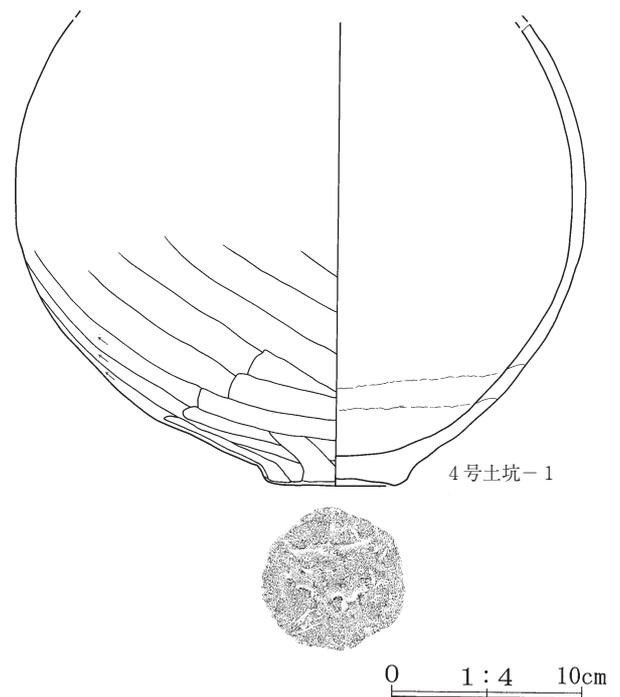
東調査区399-185グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。遺構中央部をトレンチに削られ、全容は明確にはできない。規模は長軸2.0m・短軸（1.0）m・深0.3mを測り、長軸方向はN-60°-Wを示す。覆土は浅間C軽石を僅かに含む、締まりの強い粘質土を主体とする。遺物は検出されなかった。

10区6号土坑（第7図、PL2）

西調査区427-269グリッドに位置する。調査区西端の境界隅で検出されたため、全容は明確にはできない。平面形状は確認状況から上面、下面ともほぼ円形を呈するものと考えられる。規模は確認範囲で長軸（2.0）m・短軸（1.0）m・深0.3mを測り、長軸方向はN-70°-Wを示す。覆土は浅間C軽石を僅かに含む、締まりの強い粘質土を主体とする。遺物は検出されなかった。



- 1 黒褐色土 As-C軽石を少量含む。鉄分沈着細粒子を含み、締まり強い。
- 2 褐灰色土 鉄分沈着細粒子を含む。粘質性強い。
- 3 黒色土 粘質性強く、混入物なし。締まり強い。



第2表 10区4号土坑 出土遺物観察表

挿図番号 PL番号	No.	種器 種類	出土位置 残存率	口径	底径	器高	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
7図 PL 18	1	土師器 甕	底面 底部～胴部 上位片		7.4	30.0	細砂粒・褐色粒/良好/ にぶい橙	底部はヘラナデ、胴部は下半がヘラ 削り、上半はヘラナデ。内面はヘラ ナデ。	古墳時代

第7図 10区 4・5・6号土坑・出土遺物

第2項 溝

古墳時代に帰属すると考えられる溝は3条検出されている。土坑同様、すべてが調査区の10区の北側丘陵部で検出されている。遺跡境となる現代側溝を挟んで、北側の成塚向山古墳群の裾部でも平安時代の溝が6条検出されている。時期は異なるが9区でも多くの溝が裾部周辺から検出されている。扇状地の先端である本遺跡豊富に流れ出る水を有効に利用していた様相が窺える。

10区2号溝 (第8図、PL3)

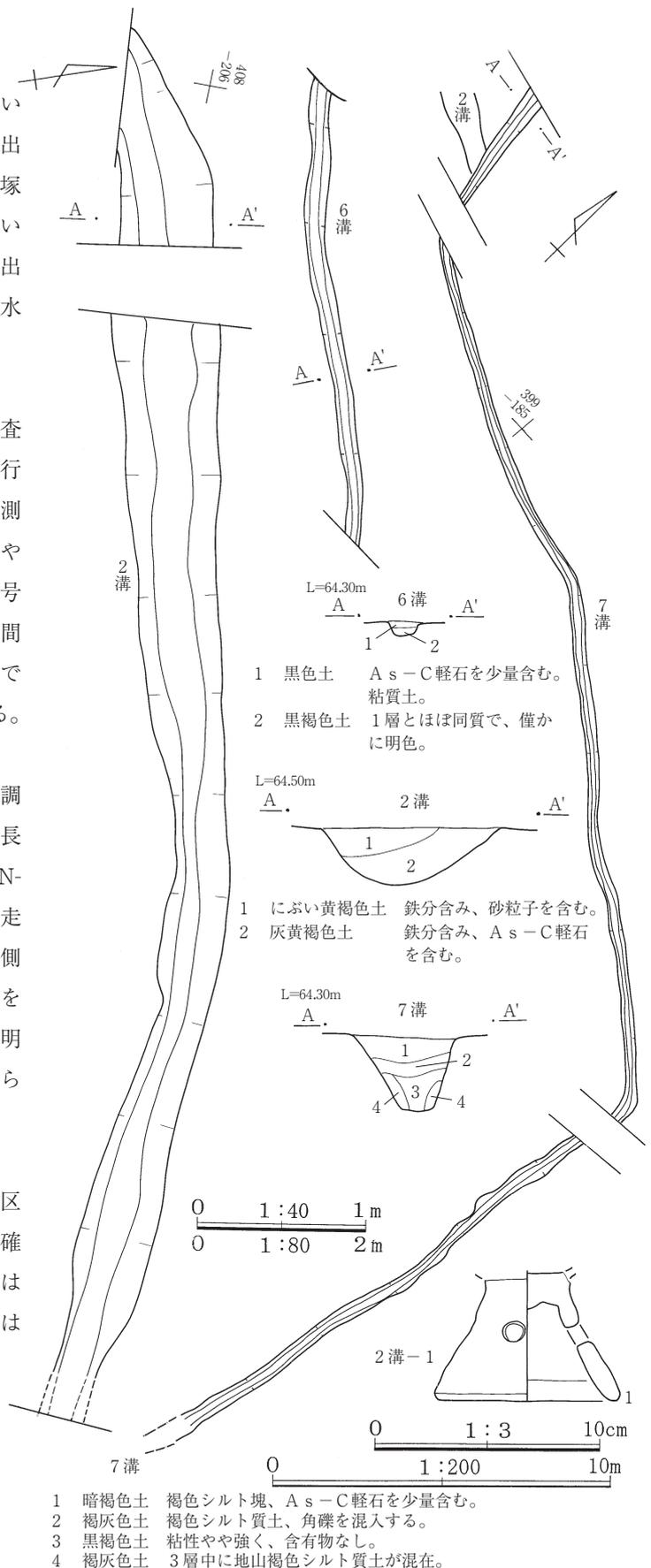
東調査区398-209~400-199グリッドに位置する。東側調査区の北側で、丘陵の地形に沿うように西から東方向に走行する。規模は長さ18m・幅1.0~1.4m・深0.2から0.4mを測り、長軸方向はN-70° -Wを示す。比高差は15cmを測り、緩やかに西から東に下り傾斜をしながら走行する。東側で7号溝と重複し、これより古い。覆土は酸化鉄分が沈着し、浅間C軽石を含む。恒常的な水流痕は見られず、性格は不明である。遺物は古墳時代前期の土師器高杯脚部が出土している。

10区6号溝 (第8図、PL3)

東調査区411-245~408-240グリッドに位置する。西側調査区の南側で、調査区中央から南側に走行する。規模は長さ5.5m、幅0.2m~0.15m、深0.2mを測り、長軸方向はN-70° -Wを示す。比高差は22cmを測り、北から南へ走行する。全容が明確でないため性格等は不明である。北側で5号溝と重複し、これより古い。覆土は、浅間C軽石を含む粘質土を主体とする。出土遺物がないため、時期は明確にはできないが覆土等から古墳時代に帰属すると考えられる。

10区7号溝 (第8図、PL3)

東調査区406-190~370-170グリッドに位置する。調査区北側から緩やかに蛇行しながら南側へ走行する。規模は確認範囲長さ41.5m・幅0.35~6.0m・深0.5mを測る。北側は調査区外に延びるため、全容は不明である。長軸方向はN-70° -Wを示す。検出された溝の中で最も長く、比高差は2cm程度で、水流痕も見られないことから、区画的な性格を持つ可能性がある。北側で2号溝と重複し、これより新しい。遺物は古墳時代前期の土師器小片が数点出土している。



第3表 10区2号溝 出土遺物観察表

挿図番号 PL番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径	底径	器高	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
8図 PL 18	1	土師器 器台	覆土 脚部片			8.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 浅黄橙	器面摩擦のため整形不鮮明、内面は ヘラナダ。脚部中位に3カ所の円形 透孔。	古墳時代

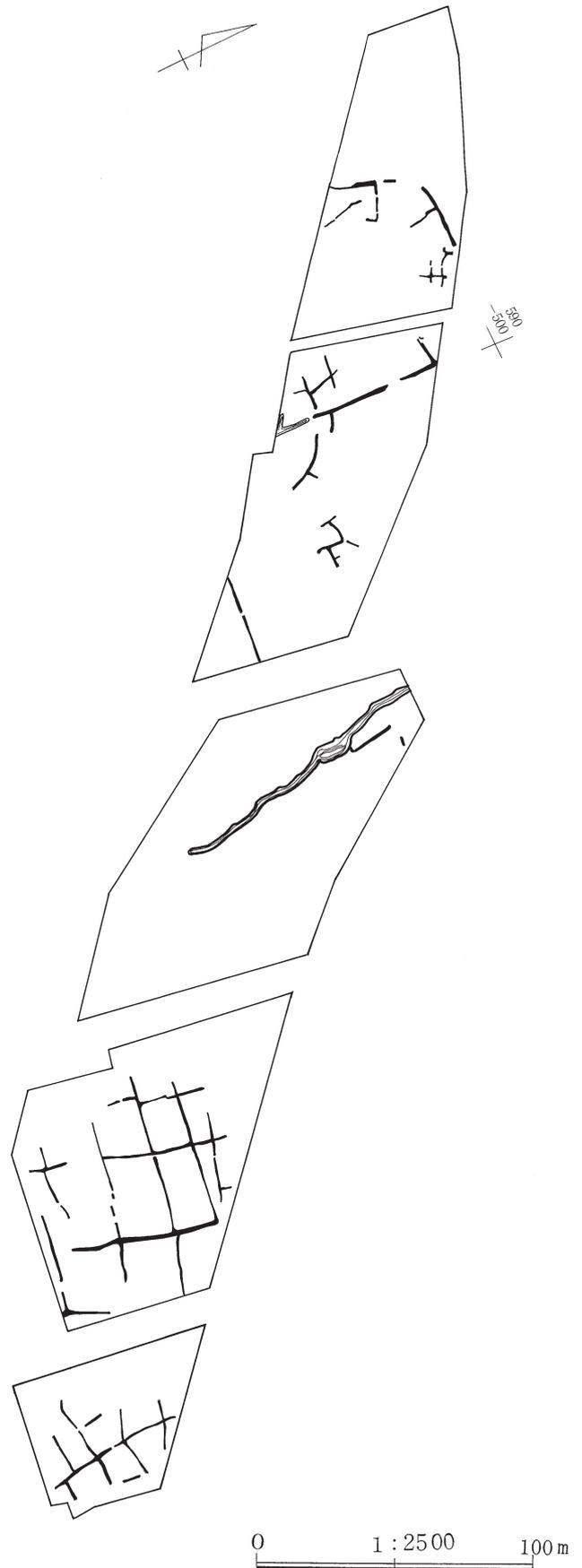
第8図 10区 2・6・7号溝・出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物

成塚遺跡群における平安時代の遺構は、浅間B軽石層の堆積状況が良好であった3区から7区において水田やそれに関連する畦や溝、温め状遺構などが検出されている。また、水田の痕跡が検出されなかったものの9区からは水田経営に関係すると思われる溝が4条検出されている。これらの溝からは水田と同様、覆土中に浅間B軽石層の堆積が認められる。

第1項 水田・溝・温め状遺構

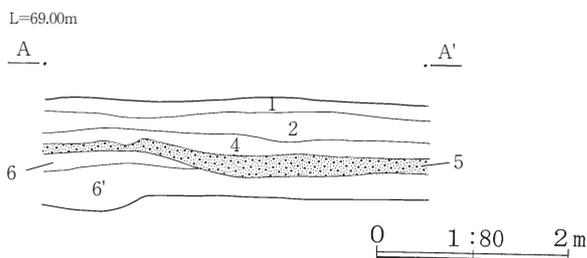
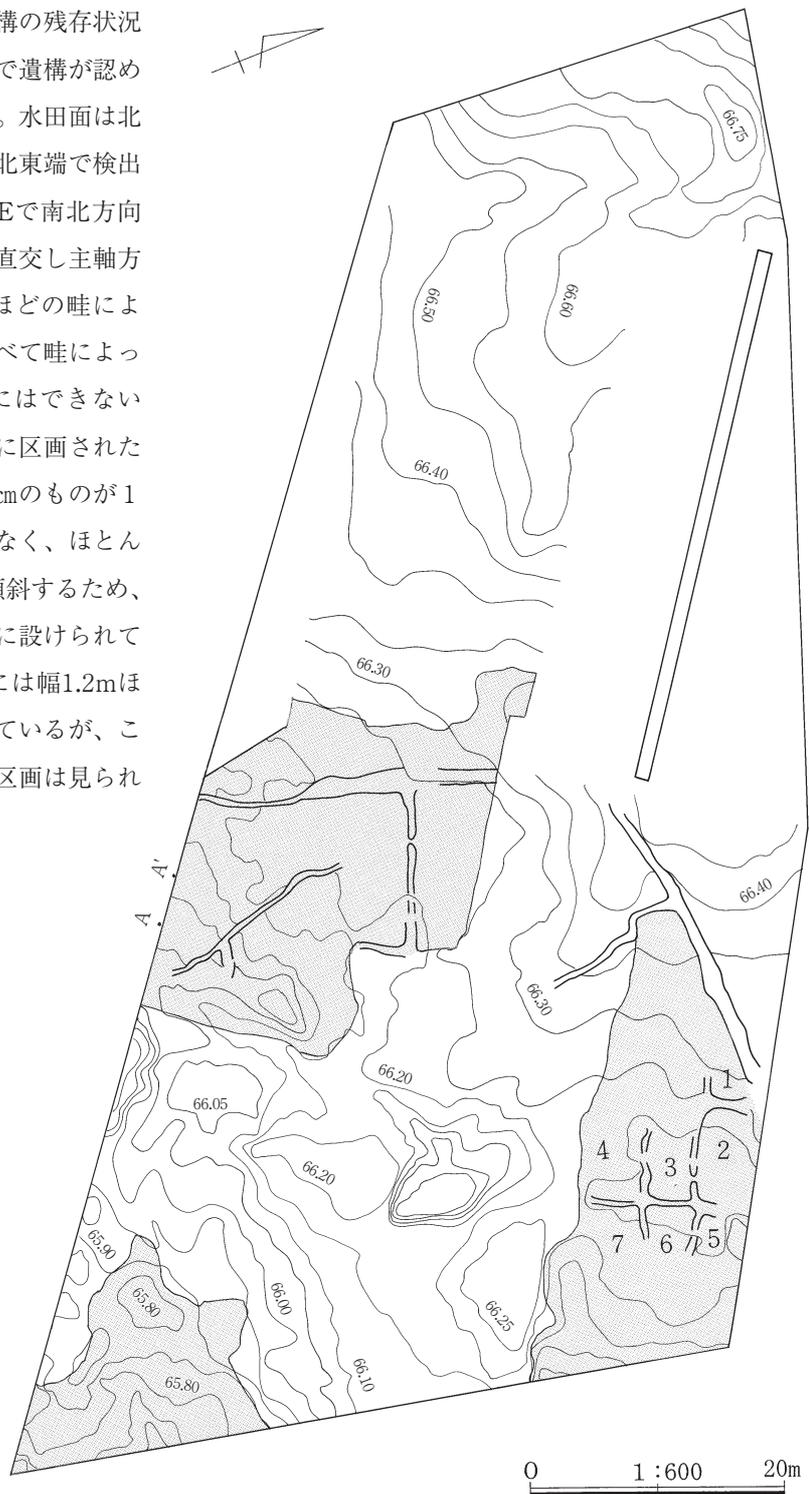
水田は調査区の3区から7区、東西約500m、南北約70mの範囲に展開している。南東方向に緩やかに下り傾斜する地形である。畦や水田面の遺存状況は、現代の圃場整備事業により大きな影響を受け、決して良好とはいえない。畦は基本的に東西に振れた南北畦と、僅か北に振れる東西畦で構成されているが、地形に沿うように形成された不整形なものも存在する。幅は4区の大畦と考えられるもので2.0mを測るが、他はおおよそ50cmから80cm前後である。高さは良好なもので6cmから8cm程度であるが、多くの畦は遺存状況が良好でないため水田面より僅かな高まりしかないものが大半を占める。区画は3区、6区、7区から検出された水田区画から見ると、長軸方向はやや南北に振れるが、基本的には東西方向に長軸をとる長方形をした区画を呈すると考えられる。水口は東西方向に軸をとる畦に設けられているものが5ヶ所、南北方向の畦にあるものが1ヶ所検出された。僅か6ヶ所だけであるがこれらの水口の開口方向から考えると、水の配水は八王子丘陵の北から南方向へ行われていた可能性が高い。このことは、5区で検出されている同時期の1号溝の走行方向からも考えられる。この溝は調査区を縦断する長さ99m、幅3.5mの大きなもので、溝の両縁辺に平行して畦が作られている。また、溝の中央部には長軸15m、幅5m、深さ0.3mの水を温めるための施設と考えられる温め状遺構も検出されている。これらの遺構は、当時の水田経営にとって重要な役割を担っていたものと考えられる。水田の標高は3区北西端の最高位で66.44m、7区南東端で最低値63.35mを測り、比高差は3.0mを有し、地形が北西から南東に大きく傾斜していることがわかる。このことから地形を効率的に利用しながら水田区画を施し、生産活動を行っていた当時の水田経営の様相の一端を窺い知ることができる。



第9図 水田概念図

3区 水田 (第10図、PL4)

3区は上面からの削平を大きく受け、遺構の残存状況は良好ではない。西側半分は試掘トレンチで遺構が認められなかったため、調査は東半分を行った。水田面は北側と南西端の限られた範囲で検出された。北東端で検出された水田は7区画で、主軸方位N-25°-Eで南北方向に軸をとる幅50cmから60cmの畦と、これと直交し主軸方位N-68°-Eで東西方向に軸をとる幅50cmほどの畦によって区画されている。区画形状は四方をすべて畦によって区画された状態でないため面積は明確にはできないが、遺存状態から長軸を東西にとる長方形に区画された水田であることは明瞭である。水口は幅60cmのものが1ヶ所検出されている。各区画間の比高差はなく、ほとんど平坦であるが、全体の地形は南東方向に傾斜するため、水口は2区画から3区画へ配水されるように設けられていると考えられる。この水田区画の西側には幅1.2mほどの畦とそれに直交する60cm畦が検出されているが、これらは不整形のものであり、周辺には水田区画は見られない。南西部には残存状況は良好ではないが、南北方向にN-21°-Eで主軸をとる畦と東西方向にN-70°-E軸をとるがあり、これらは直交し、水田を区画する様相を呈す。また、東西方向の畦には約30cm幅で開口する水口がある。しかし、これらの畦で区画されたと考えられる水田区画は検出されなかった。畦の主軸方位は北東隅で検出された7区画の水田の畦と南北・東西方向の主軸方位がほぼ同じである。



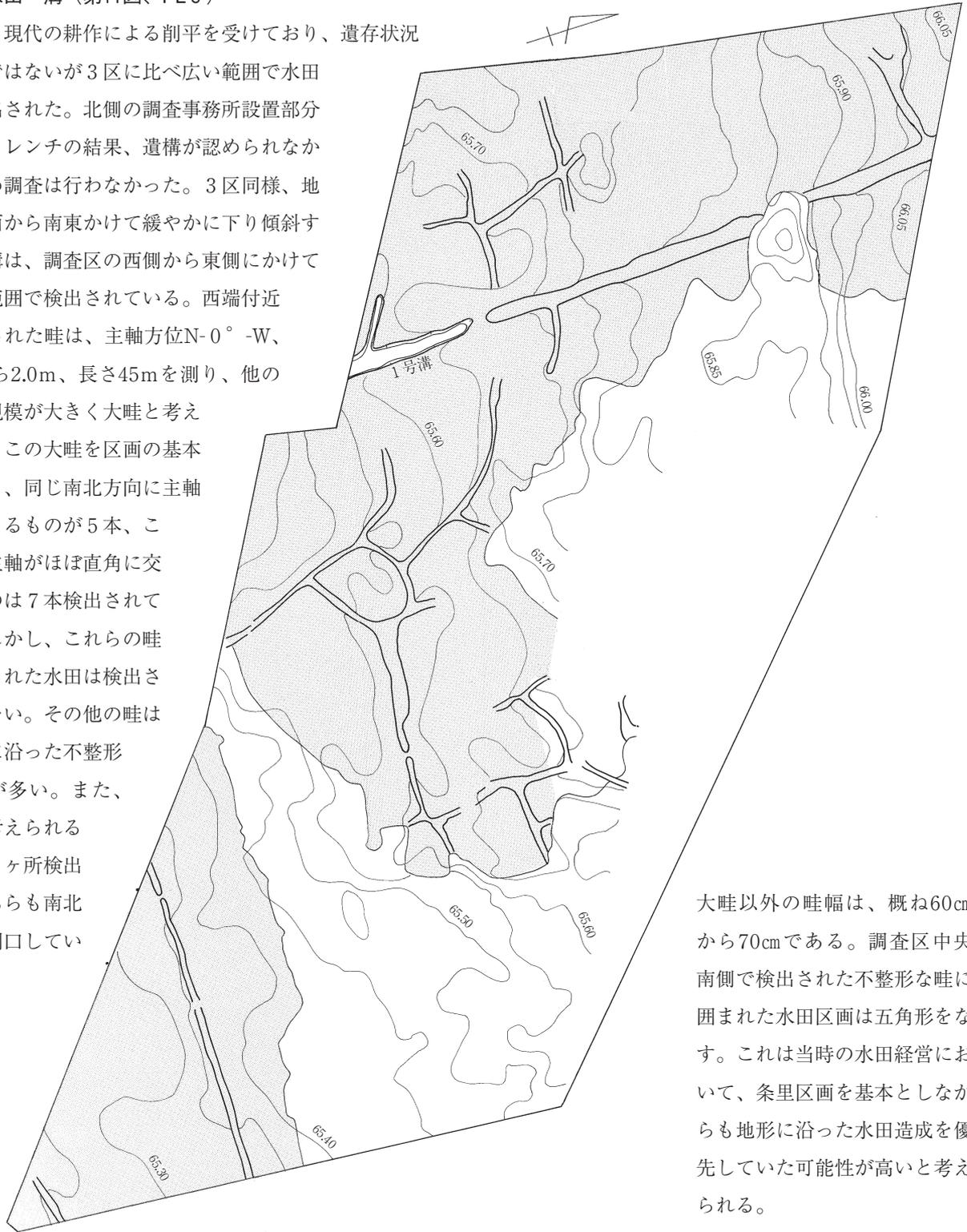
3区南壁土層断面

- 1 現耕作土
- 2 褐灰色土 やや砂質性を伴う。洪水起源の堆積層か。
- 4 褐色土 A s - B 混土
- 5 褐色土 A s - B 純層
- 6 黒色土 水田耕作土。
- 6' 黒色土 粘質土。シルト塊を少量含む。

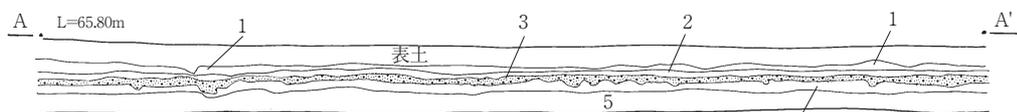
第10図 3区 水田

4区 水田・溝 (第11図、PL5)

4区も現代の耕作による削平を受けており、遺存状況は良好ではないが3区に比べ広い範囲で水田面が検出された。北側の調査事務所設置部分は試掘トレンチの結果、遺構が認められなかったため調査は行わなかった。3区同様、地形は北西から南東かけて緩やかに下り傾斜する。遺構は、調査区の西側から東側にかけての南側範囲で検出されている。西端付近で検出された畦は、主軸方位N-0°-W、幅1.5から2.0m、長さ45mを測り、他の畦より規模が大きく大畦と考えられる。この大畦を区画の基本とすると、同じ南北方向に主軸方位をとるものが5本、これらと主軸がほぼ直角に交わるものは7本検出されている。しかし、これらの畦で区画された水田は検出されていない。その他の畦は地形等に沿った不整形なものが多い。また、水口と考えられる施設が2ヶ所検出されどちらも南北方向に開口している。



大畦以外の畦幅は、概ね60cmから70cmである。調査区中央南側で検出された不整形な畦に囲まれた水田区画は五角形をなす。これは当時の水田経営において、条里区画を基本としながらも地形に沿った水田造成を優先していた可能性が高いと考えられる。



4区南壁土層断面

- | | | |
|---|--------|-----------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | As-B粒子を含む、色がくすんでいる、粘性しまり強 |
| 2 | 暗褐色土 | As-B粒子を多量に含み、鉄分の沈着が多い。締まりあり。 |
| 3 | 暗褐色土 | As-B層。 |
| 4 | 黒色粘質土 | As-B層下水田の耕作土、粘性しまり非常に強い。 |
| 5 | 褐灰色粘質土 | As-B層下水田の耕作土、水性体積の粘質土、粘性しまり非常に強い。 |

第11図 4区 水田・溝

5区 水田 (第12図、PL 6)

5区では、調査区の3/4以上で水田面を確認することができた。南西部の一部の範囲においては事前試掘トレンチにより遺構が確認されなかったため調査は行わなかった。調査区畦は北西端で、東西方向に軸をとる幅80cmから1.0mのものや、南北方向に軸をとる幅1.0mほどの不整形なものも数本検出されただけで、水田区画の痕跡がわかるような畦は検出されなかった。しかし、調査区の西側からは北西から南東方向へ傾斜に沿って走行する大きな溝が検出された。この溝の縁辺には幅40cmから1m程の平行して走る畦がり、溝の中央やや北側には水を一時的に貯水するための施設と考えられる温め状遺構が検出されている。この溝は4区で検出された大畦から東へ約110m離れて作られており、遺跡周辺の水田経営において重要な役割を担っていたものと考えられる。



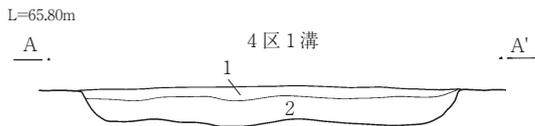
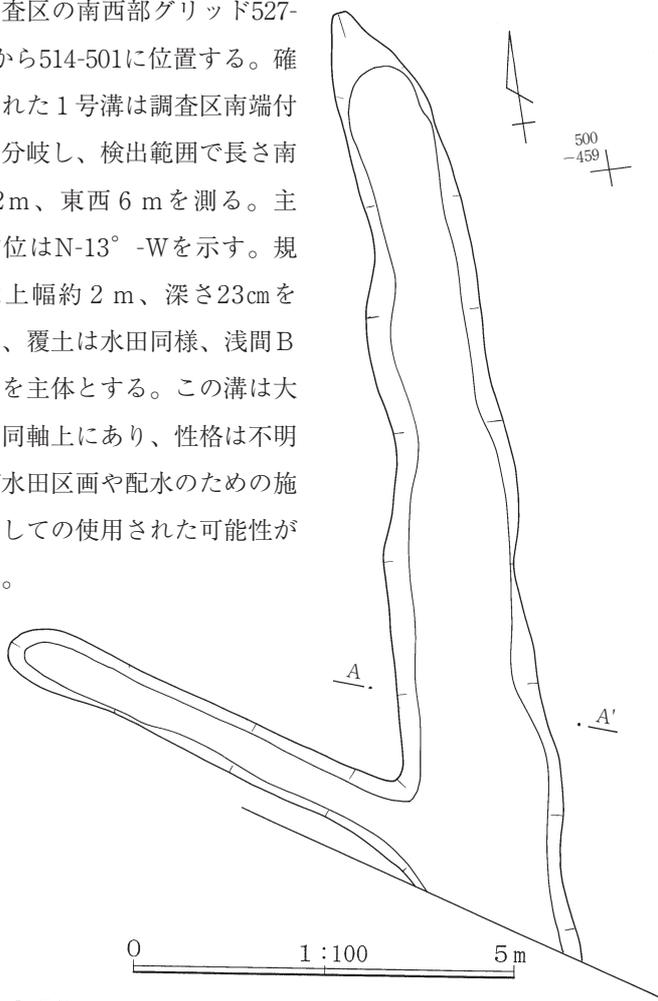
5区 1号溝 (第12図、PL 6)

調査区の中央やや西よりの位置を南北方向に走行し、主軸方位N-17°-Wを示す。規模は長さ99m、幅3.5m、深さ0.6mを測る。溝は南方向に向かうほど幅を狭め浅くなり、やがて立ち上がる。両脇には溝を挟んで平行に走る畦がある。また、溝北側部では貯水施設と考えられる温め状遺構も検出されている。覆土は水田と同じ浅間B軽石により埋没しているため、周辺の水田経営に伴った施設と考えられる。

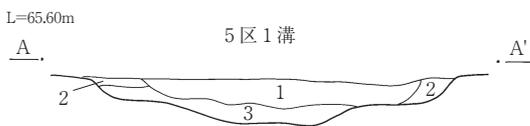
第12図 5区 水田・溝

4区 1号溝 (第13図、PL 5)

調査区の南西部グリッド527-504から514-501に位置する。確認された1号溝は調査区南端付近で分岐し、検出範囲で長さ南北12m、東西6mを測る。主軸方位はN-13° -Wを示す。規模は上幅約2m、深さ23cmを測り、覆土は水田同様、浅間B軽石を主体とする。この溝は大畦と同軸上にあり、性格は不明だが水田区画や配水のための施設としての使用された可能性がある。



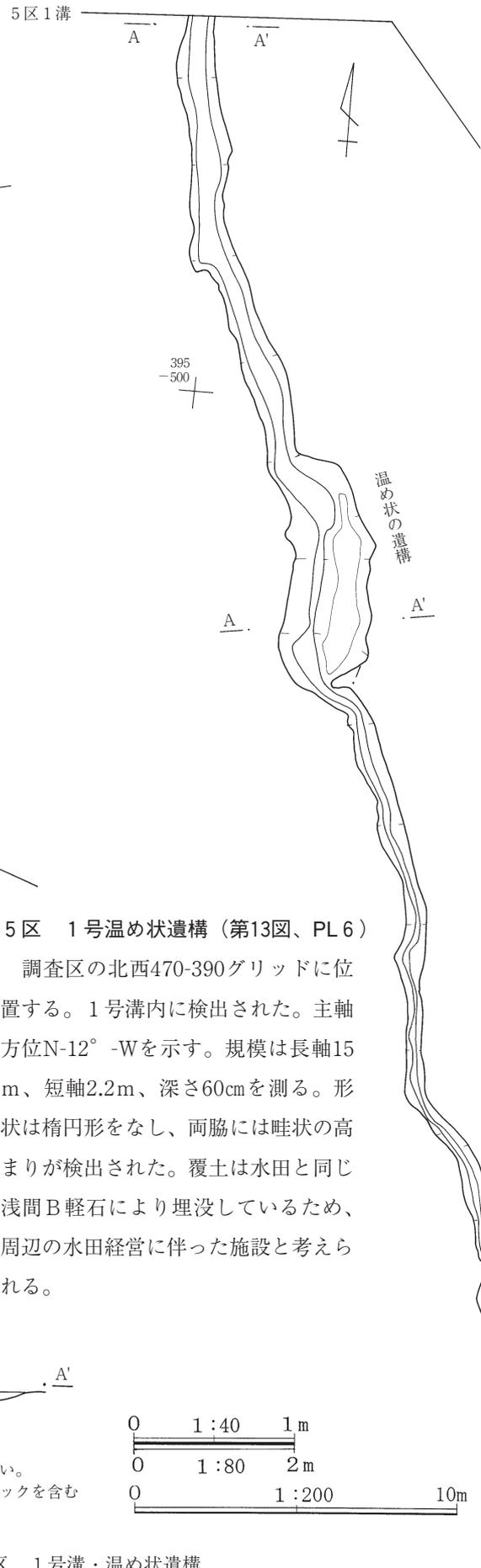
- 1 暗褐色土 A s-B粒子を多量に含み、鉄分の沈着が多い。
- 2 褐灰色土 砂質堆積土、河原砂とA s-B粒子を少量含む。



- 1 暗褐色土 A s-B層。
- 2 暗褐色土 A s-B粒を多量に含む、粘質性強い。
- 3 褐灰色土 砂堆積土、河原砂とA s-B粒子を多量に含む。砂質土。



- 1 暗色土 A s-B層。
- 2 暗褐色土 A s-B粒を多量に含み、鉄分の沈着が多い。粘性しまりが強い。
- 3 灰色砂質土、砂堆積土、河原砂とA s-B粒子を含む、暗黒色粘質土ブロックを含む



5区 1号温め状遺構 (第13図、PL 6)

調査区の北西470-390グリッドに位置する。1号溝内に検出された。主軸方位N-12° -Wを示す。規模は長軸15m、短軸2.2m、深さ60cmを測る。形状は楕円形をなし、両脇には畦状の高まりが検出された。覆土は水田と同じ浅間B軽石により埋没しているため、周辺の水田経営に伴った施設と考えられる。

第13図 4区 1号溝、5区 1号溝・温め状遺構

6区 水田 (第14図、PL7)

6区は、最も畦が良好な状態で検出された調査区ある。水田面は調査区の2/3以上で検出され、水田面が確認された全範囲で畦が検出された。また、殆どの水田区画は東西方向に長軸をとる長方形を呈す。調査区の東側には主軸方位N-13°-E、幅2.0m、長さ55mの大畦が検出された。他の畦はこの大畦に対して、南北方向に

走行するものは平行に走り、東西方向に走行するものは直交する。7区の水田はこの大畦を中心に整然と区画されている。畦から推定できる区

画数は約21区画である。以下では、ほぼ4面が畦に囲まれた水田区画について規模を記載する。5区画、南北間8m・東西間19m・面積176m²。6区画、南北間5mから8m・東西間26m、面積186m²。8区画、南北間14m・東西間29m・面積303m²。9区画、南北間15m・東西間20m・面積502m²。12区画、南北間18m・東西間20m・面積399m²。13区画、南北間19m・東西間31m・面積644m²である。各区画内の比高差は5cmから10cmが2区画、3区画、4区画、5区画、10区画、11区画、12区画17区画、20区画、10cmから15cmは1区画、9区画、15cm20cmは1区画、7区画、8区画、13区画、14区画、15区画、16区画、19区、20cm以上は6区画である。18、19区画は半分以上が調査区外のため比高差明確にできない。大畦を挟んだ区画は比高差が大きい、区画内に畦

があるような痕跡は見られない。水口と考えられる施設は4ヶ所確認されている。東西方向に開口するものは3区画、5区画と4区画境と8区画と9区画境にあ



第14図 6区 水田

0 1:600 20m

り、南北方向に開口するものは2区画、6区画の境と8区画と13区画境にそれぞれ20cmから80cmに開口している。比高差から見れば、配水は北西の水田から南東の水田へ向かうと考えられる。水田区画は、それぞれ長軸方向を東西にとる長方形の形状をなしており、東西に長軸をとる水田区画を基準にした水田経営の様相が窺える。

7区 水田 (第15図、PL 8)

7区も6区同様、比較的良好な畦が検出され、水田面も調査区のおよそ2/3程度で検出されている。調査区中央部に検出された南北方向を走る畦は、主軸方位N-15°-W、幅2.0m、長さ50mを測り、他の畦より大きい。この畦を中心に西方向及び東方向に水田を区画する畦がそれぞれ4本ある。これらの畦から推定できる水田の区画数は、およそ11区画である。しかし、4方向を畦で囲まれた水田区画は検出されなかったため、水田区画の規模については明確にはできない。各区画内の比高差は5cmから10cmが1区画、2区画、3区画、7区画、8区画、10区画、11区画、10cmから15cmが4区画、6区画、9区画、15cmから20cmは5区画である。6区の水田同様に東西方向に長軸をとる長方形をなすものと考えられる。水口等の施設は検出されなかった。南北方向に走る畦は、地形の制約により不整形があり、水田区画はやや歪んでいる部分も見うけられ、6区ほど畦が整然と区画されているわけではない。しかし、調査区中央を南北に走る畦を軸に、東西方向に畦によって長方形の水田区画の存在が考えられる。



第15図 7区 水田

第2項 溝

平安時代に帰属すると考えられる溝は、9区から4条検出されている。これらの溝は浅間B軽石で埋没し、僅かであるが水流の痕跡が認められる。比高差は10cmから15cmで、これらの溝はすべて南方向に走行しており、南側低地部に広がる水田経営において必要不可欠な水の供給を担った可能性がある。

9区1号溝 (第16図、PL 9)

グリッド560-370から510-360に位置し、調査区の中央を南北に走行する。規模は長さ42.6m、幅1.1m、深さ27cmを測り、主軸方位N-3°-Wを示す。比高差は15cmを測る。中央部で4、6号溝と南端部で5号溝と重複する。新旧関係は4号溝より新しく、5、6号溝より古い。4、5号溝とは覆土から明らかに時期差が見られるが、6号溝とはほぼ同時期であると考えられる。底面には砂質土が堆積しており、水流の痕跡が窺える。南側に展開する水田の水路の可能性が高い。遺物は土師器小片が数点出土しており、出土遺物から10世紀代のものと考えられる。

9区2号溝 (第16図、PL 9)

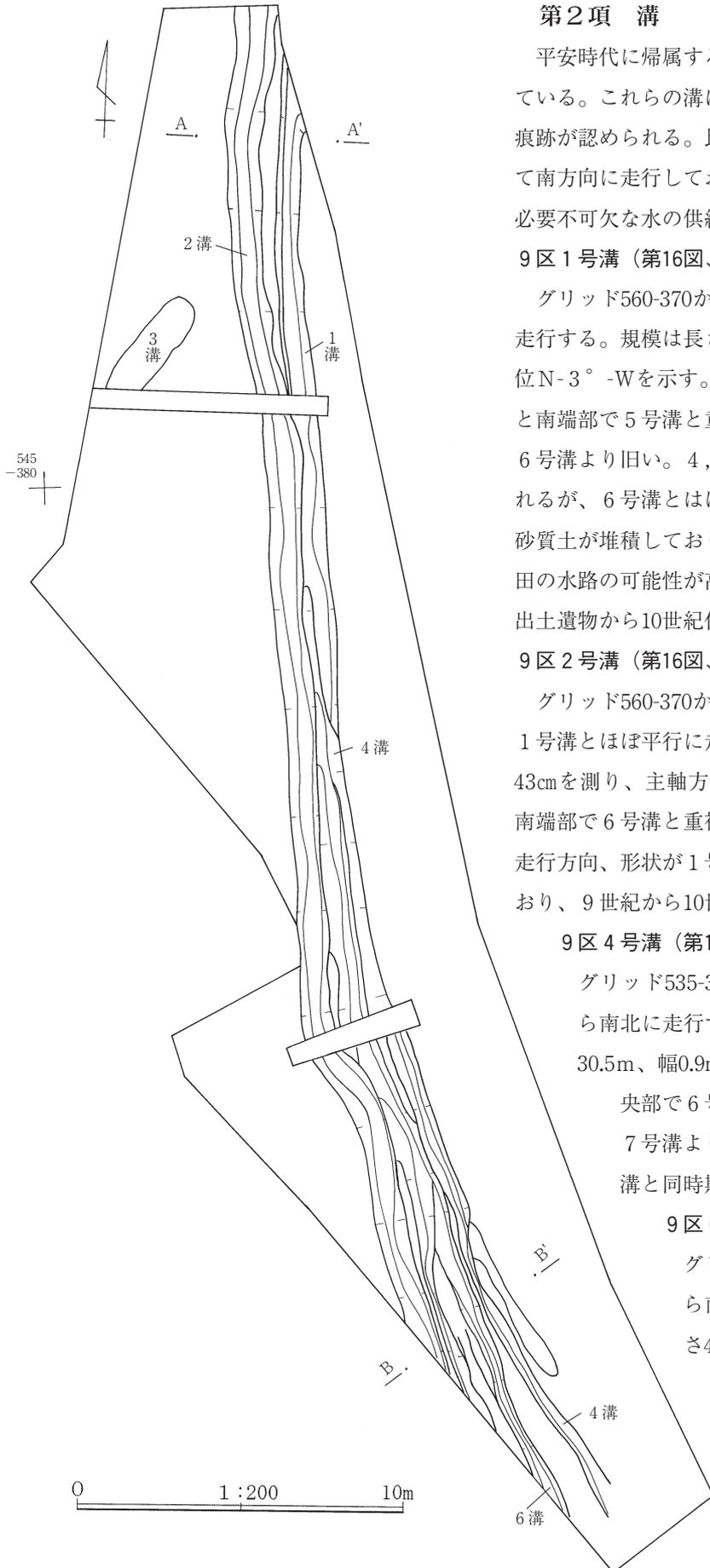
グリッド560-370から510-360に位置し、調査区の中央を南北に1号溝とほぼ平行に走行する。規模は長さ56.0m、幅1.4m、深さ43cmを測り、主軸方位N-3°-Wを示す。比高差は12cmを測る。南端部で6号溝と重複し、本溝が古い。水流の痕跡が窺え、覆土、走行方向、形状が1号溝と類似する。遺物は内黒土器が出土しており、9世紀から10世紀代のものと考えられる。

9区4号溝 (第16図、PL 9)

グリッド535-3070から515-365に位置し調査区の中央部から南北に走行する。主軸方位N-3°-Wを示す。規模は長さ30.5m、幅0.9m、深さ18cmを測る。比高差は10cmを測る。中央部で6号溝と南端部で7号溝と重複する。本溝が6、7号溝より古い。覆土が2号溝と類似するため、2号溝と同時期のものと考えられる。

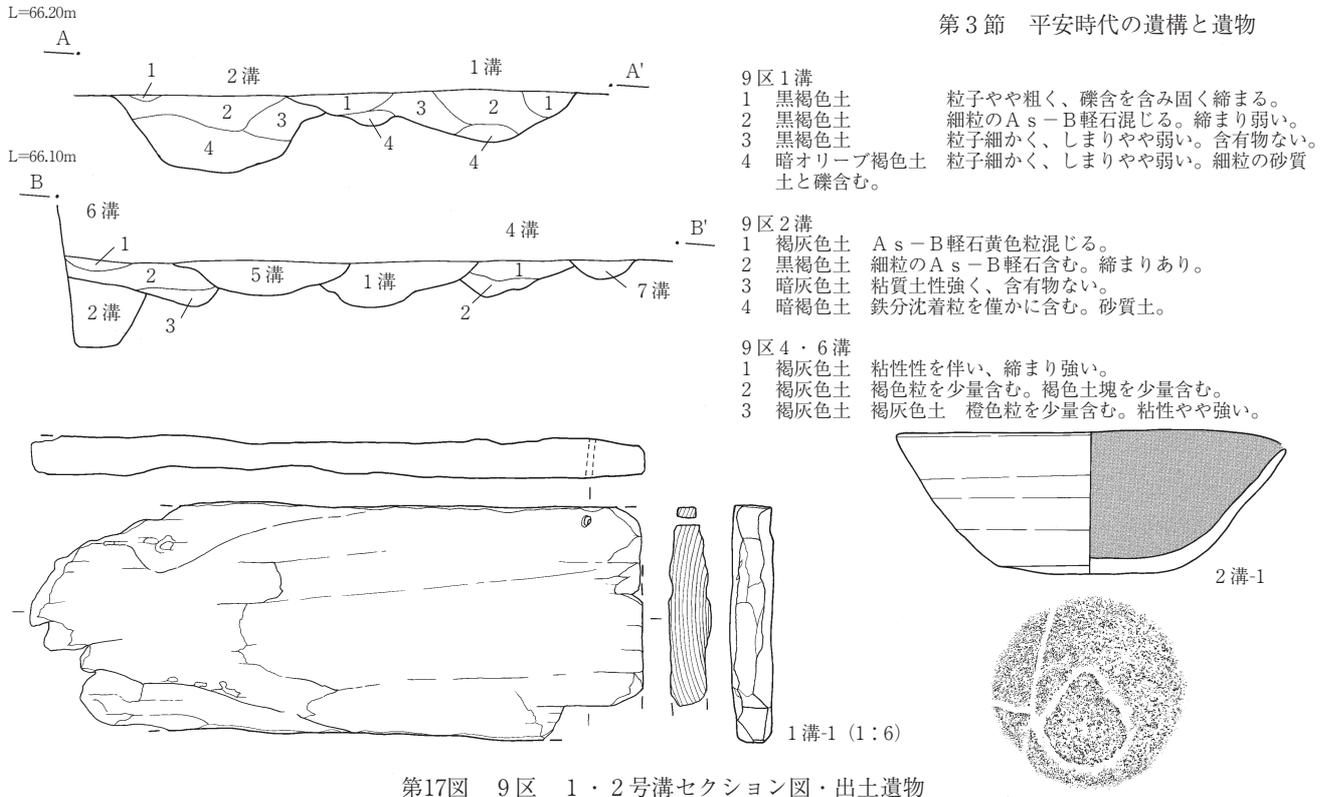
9区6号溝 (第16図)

グリッド510-365に位置し、調査区の中央部から南北に走行する。主軸方位N-20°-Wで長さ4.7m、幅1.0m、深さ23cmを測る。中央部で2、4、6号溝と重複し、南端部で5号溝と重複する。2、4、6号溝より新しく、5号溝より古い。他の溝との重複が激しく、性格等は明確にできない。埋出土遺物から10世紀代のものと考えられる。



第16図 9区 1・2・4・6号溝

第3節 平安時代の遺構と遺物



第17図 9区 1・2号溝セクション図・出土遺物

第4表 9区1・2号溝 出土遺物観察表

挿図番号 P L 番号	No.	種器 種類	出土位置 残存率	長さ	幅	高さ	樹種	成形・整形の特徴	備考
17図 P L 18	1	板材	覆土	48.8	19	3.4	アカマツ	穿孔あり	
挿図番号 P L 番号	No.	種器 種類	出土位置 残存率	口径	底径	器高	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
17図 P L 18	1	黒色土器 椀	一部欠損	15.2	7.4	5.8	細砂粒/酸化焰/にぶい 橙	内面黒色処理。処理ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転へら削り。	器面の摩滅が激しい。奈良・平安

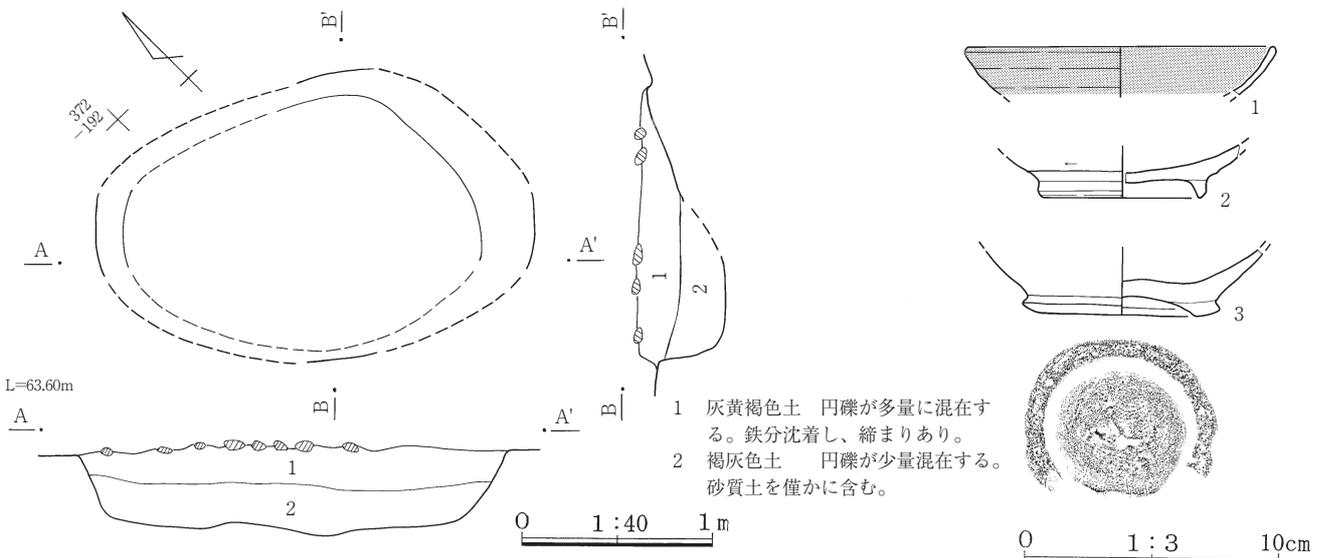
第3項 集石

集石は1基検出されている。上面には人為的に集められたと思われる円礫が集中している。

10区1号集石 (第18図、PL10)

東側調査区の中央部南側、371-192グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。長軸方

向はN-50° -Wを示す。規模は長軸2.7m、短軸1.4m、深50cmである。1層中に集中する円礫は、低地部に散在する強戸礫層堆積物と同様である。断面状から明確な掘り込みが確認でき、上層部に礫が集中することから人為的なものと考えられる。出土遺物は礫層中から灰釉陶器片が数点出土しており、10世紀代のものと考えられる。



第18図 10区 1号集石・出土遺物

第5表 10区1号集石 出土遺物観察表

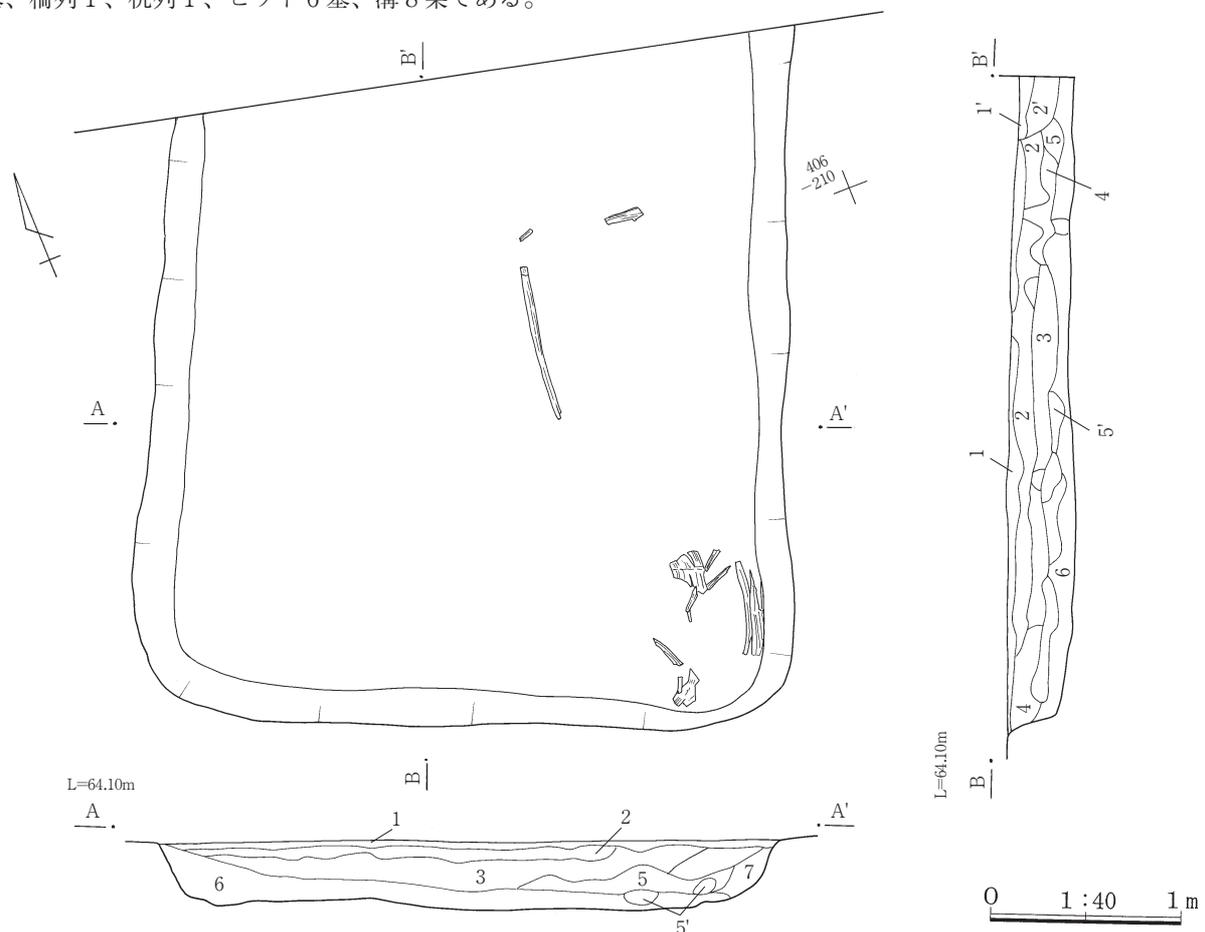
挿図番号 P L 番号	No.	種器 種類	出土位置 残存率	口径	底径	器高	胎土 / 焼成 / 色調	成形・整形の特徴	備考
18図 P L 18	1	須恵器 椀	底部～体部 片		7.3		細砂粒 / 酸化焰 / 橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、 底部は回転糸切り。	10C. 初頭
18図 P L 18	2	灰釉陶器 椀	底部～体部 片		6.6		細砂粒 / 還元焰 / 灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、 底部は回転ヘラナデ。	大原 2号窯式期
18図 P L 18	3	灰釉陶器 小椀	口縁部片	12.0			緻密 / 還元焰 / 灰黄	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方 法は漬け掛けか。	東濃 10C. 代

第4節 中近世の遺構と遺物

成塚遺跡群における中近世以降の遺構については、前述したように後世の削平の影響を大きく受けていることや、時期を決定づける共伴遺物が稀薄なため、ここで記載するものについては、浅間B軽石の堆積を基準とし、堆積後と思われる覆土等や僅かな共伴遺物をもとに時期を確定した。また、これらの多くは9区、10区に集中しているため、ここでは時期ごとではなく遺構ごとに掲載した。この時期の遺構は堅穴状遺構2基、土坑4基、井戸1基、柵列1、杭列1、ピット6基、溝8条である。

第1項 堅穴状遺構

10区から堅穴状遺構が2基検出された。特に1号堅穴は形状も長方形で、壁面もほぼ垂直に立ち上がり床面も平坦で堅穴住居の可能性も考えられた。しかし、竈などの施設は検出されず、出土遺物も皆無であったため堅穴状遺構とした。2号堅穴状遺構は2条の溝を付設している。時期は覆土中に浅間A軽石が混在することから近世期に帰属するものと考えられる。



- | | | | |
|---------|----------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 浅黄橙色土 | 黄色軽石、白色軽石を全体に含む。 | 4 褐灰色土 | 3層よりやや暗い土色。黄色軽石を多量に混入する。 |
| 1' 浅黄色土 | 1層より軽石の混入が少なくやや暗い。 | 5 灰白色土 | 黄色軽石を多量に混入する。 |
| 2 褐灰色土 | 上層部に白色軽石を少量混入する。下層部は粘性が強い。 | 5' 灰白色土 | 5層より粘質性が強く、黄色軽石の混入が少ない。 |
| 2' 褐灰色土 | 土質は2層に類似するが橙色土を斑状に混入する。 | 6 褐灰色土 | 黄色軽石を少量混入する。粘質性が非常に強い。 |
| 3 褐灰色土 | 黒褐色土、黄褐色土を斑状に少量混入する。粘質土。 | 7 黒色土 | 混入物はないが粘質性に乏しくふかふかしている。しまり弱い。 |

第19図 10区 1号堅穴状遺構

10区 1号竪穴状遺構 (第19図、PL11)

調査区北側400-202グリッドに位置する。長軸方位N-22° -Wを示す。長軸4.85m、短軸3.25m、深30cmを測り、平面形状は長方形を呈す。北側一部は削平されているため、全容は明確ではない。覆土は全体に浅間A軽石を混入する土を主体とする。出土遺物は木片が数点出土している。床上面付近まで浅間A軽石が確認できることから18世紀中頃の施設と考えられる。

10区 2号竪穴状遺構 (第20図、PL11)

調査区北側412-208グリッドに位置する。長軸方位N-81° -Wを示す。長軸4.22m、短軸2.32m、深45cmを測り、平面形状はやや不整形な長方形を呈す。西側からは溝が2条があり、これらの溝との切り合いは見られない。覆土も浅間A軽石が混在し、竪穴状遺構と同質の覆土であ

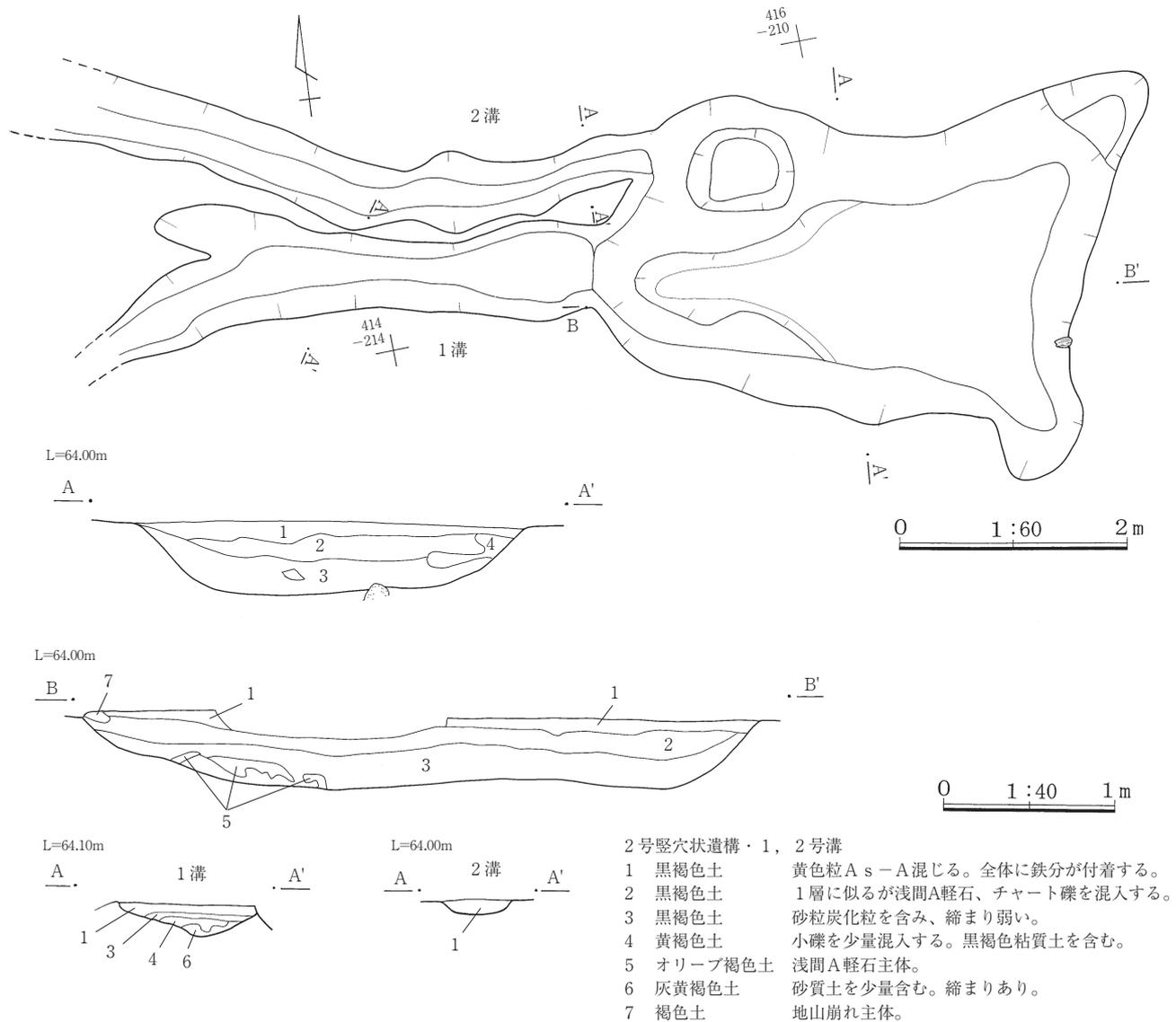
る。これらは一連の施設であると考えられ、竪穴状遺構がそれぞれの溝から流れ込む水流を受ける施設であった可能性がある。しかし、明確な性格は不明である。時期は1号竪穴状遺構と同時期と考えられる。

10区 2号竪穴状遺構 1号溝 (第20図、PL11)

調査区北側416-215グリッドに位置する。長軸方位N-83° -Wを示す。規模は長さ(4.2)m、幅0.7m、深20cmを測る。2号竪穴状遺構西壁から東西方向へ走行する。覆土から竪穴状遺構と一連の施設と考えられる。

10区 2号竪穴状遺構 2号溝 (第20図、PL11)

調査区北側416-213グリッドに位置する。長軸方位N-73° -Wを示す。規模は長さ(5.4)m、幅0.5m、深18cmを測る。2号竪穴状遺構西壁から東西方向へ走行する。覆土から竪穴状遺構と一連の施設と考えられる。



第20図 10区 2号竪穴状遺構・1・2号溝

第2項 土坑

中近世時に帰属すると考えられる土坑は2基検出されている。2基とも出土遺物がなく帰属時期は明確にはできないが、2号土坑は1号柵列と重複し、1号柵列より古い段階のものであることは明確である。しかし、覆土から古代に帰属するものとは考え難くいため、中近世期の遺構であると判断した。また、1号土坑の覆土も2号土坑とほぼ同じであることから、同時期のものと考えられる。

10区1号土坑 (第21図、PL11)

東側調査区の北側396-193グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.85m、短軸(1.0)m、深23cmである。長軸方向はN-50° -Wを示す。覆土は人為的に埋没された様相を呈す。細粒白色軽石及び、シルト塊を斑状に混入する粘質土である。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる。

10区2号土坑 (第21図、PL11)

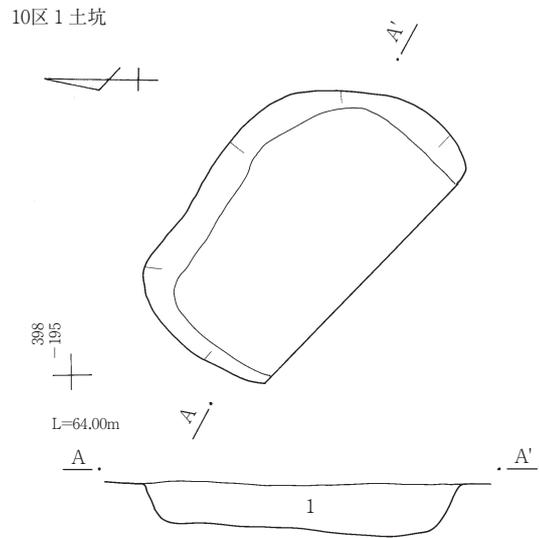
東側調査区の北側、371-196グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸1.1m、深27cmである。長軸方向はN-23° -Wを示す。覆土は人為的に埋没された様相を呈す。細粒白色軽石及び、シルト塊を斑状に混入する粘質土である。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる。

第3項 井戸

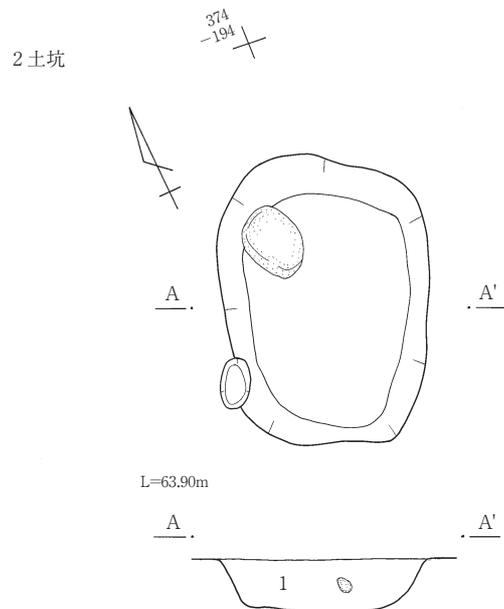
当初、掘り込みの浅い土坑と考え調査をしたが、中央部の落ち込みは、地山の礫層を貫通しており底部からは湧水も認められた。このことから井戸として取り扱った。遺物は17世から19世にかけての陶器などが出土しているため、埋没まである程度の期間が費やされた可能性がある。

10区1号井戸 (第22図、PL12)

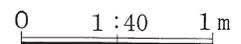
調査区の中央部やや西側、387-214グリッドに位置する。外縁方形部の長軸方向はN-45° -Wを示す。規模は長軸6.45m、短軸4.56m、深1.58mである。外縁方形部の平面形状は不整長方形で、底面は平坦をなし中央部の井戸は楕円形の深い掘り込みを持つ。壁面は略垂直に落ち込む。井部の長軸方向はN-45° -Wを示す。規模は長



10区1号土坑
1 黒褐色土 細粒白色軽石を含み、地山褐色シルト質土塊を斑状に混入する。

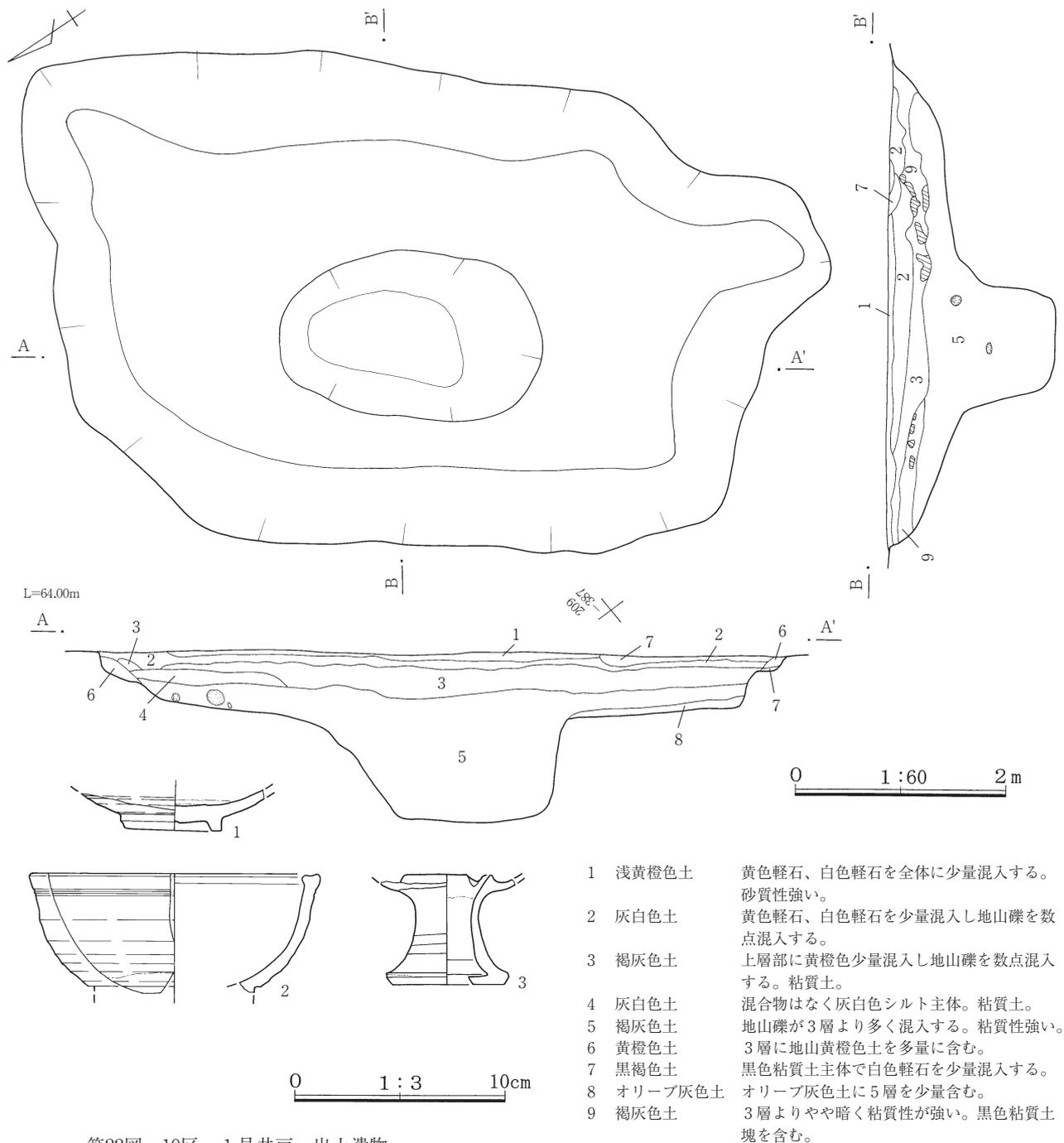


10区2号土坑
1 にぶい黄褐色土 黒色粘質土塊を斑状に含む。



第21図 10区 1・2号土坑

軸6.45m、短軸4.56m、深1.58mである。覆土は黒色粘質土塊や拳大の地山礫が多量に混入するため、人為的に埋没された様相を呈す。出土遺物は陶器皿や鉢、灯火受台などが出土している。出土遺物から近世期に帰属するものと考えられる。



第22図 10区 1号井戸・出土遺物

第6表 10区1号井戸 出土遺物観察表

挿図番号 P L 番号	No.	種器 種類	出土位置 残存率	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
22図	1	肥前陶器 皿	覆土・底部	4.6	—	—	浅黄橙	見込み蛇の目釉剥ぎ。内面青緑釉、口縁部外面から体部外面透明釉。体部外面以下無釉。内野山。1/2のみ高台外面下部削る。釉剥ぎ部と高台端部、部分的に鉄泥かかる。	17世紀
22図	2	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	覆土・1/8	(13.6)	—	—	灰白	口縁部肥厚し、内面に突き出す。口縁部外面2条の沈線。内面から高台脇鉛釉。	18世紀後半から 19世紀前半
22図 P L 18	3	製作地不詳 陶器 灯火受台	覆土・口縁 部欠	5.3	—	—	灰白	口縁部欠損。脚部中央焼成後、丁寧に穿孔。転用後の用途不明。受部内面から脚部外面灰釉。細かい貫入入る。信楽系か。	19世紀

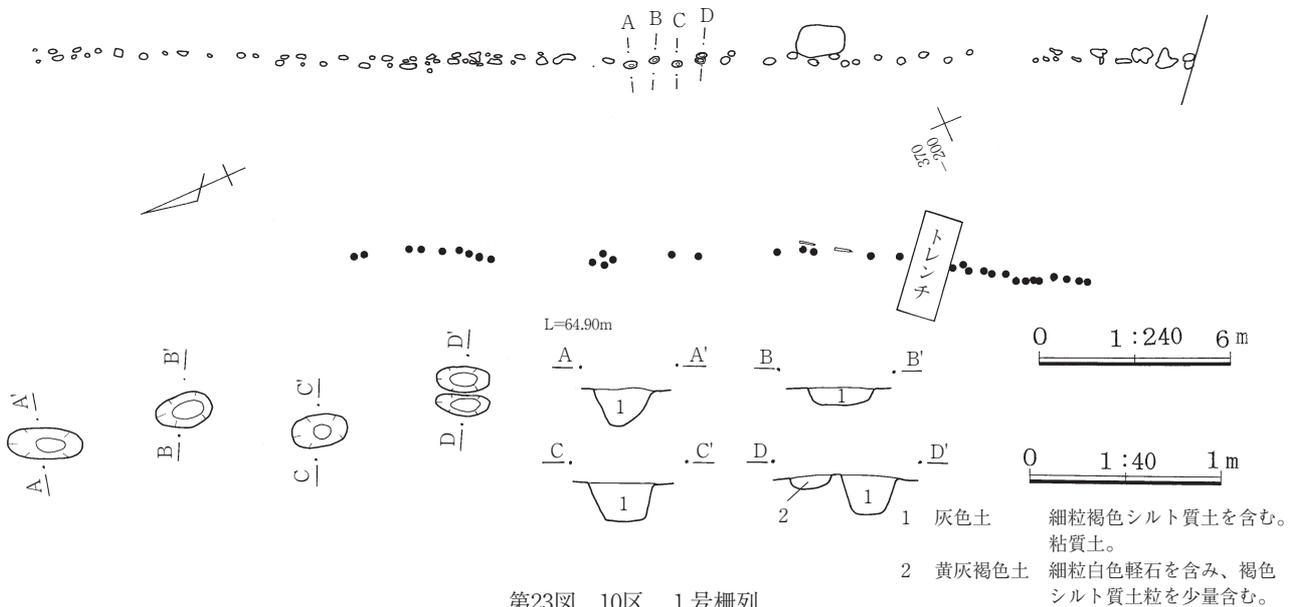
第4項 柵列

径20cmから30cm、深さ10cmから15cmのピットが南北方向に数多く検出された。一部の小穴からは杭片と思われるものも底面に刺さった状態で出土した。東側で検出された杭列とともに、地割り区画を行う施設と考えられる。

10区1号柵列（第24図、PL12）

調査区東側、402-185～360-200グリッドに位置する。調査区を縦断するように南北に約70基ほどのピットが南北方向に密接して並ぶ。南東部分は調査区外のため列全体の長さは不明である。柵列の主軸方位はN-30° -Eを

示す。柵列長さは検出範囲で38mを測る。ピット個々の規模は径20cmから30cm、深さ10cmから15cmのものが主である。ピットは掘り込みが浅く、覆土は灰褐色粘質土によって埋没している。詳細な性格は不明であるが、いくつかのピット内からは、木杭先端部と思われる木片が出土しており、東側で本柵列として検出した。平行して出土している1号杭列と関係があるものと考えられ、地割り区画のための施設と思われる。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる



第23図 10区 1号柵列

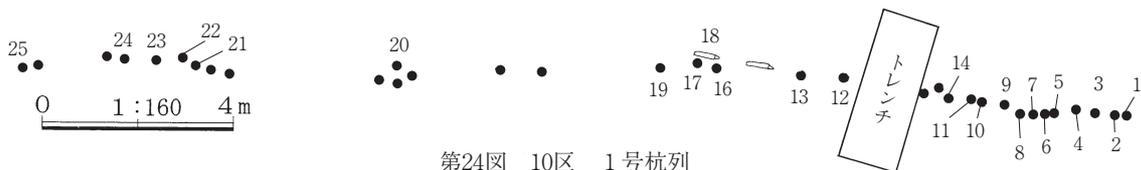
第5項 杭列

残存長約30cmから50cmのアカマツ丸木材を使った杭列が2ヶ所から検出された。1号杭列は柵列とほぼ10mの間隔で、南北方向に平行する。2号杭列はこれらの遺構より北側で東西方向に杭が打たれた状態で検出された。1, 2号杭列で出土した杭は、先端部の形状や木の材質がほぼ同じである。このことから、両杭列は一連の施設だと考えられる。

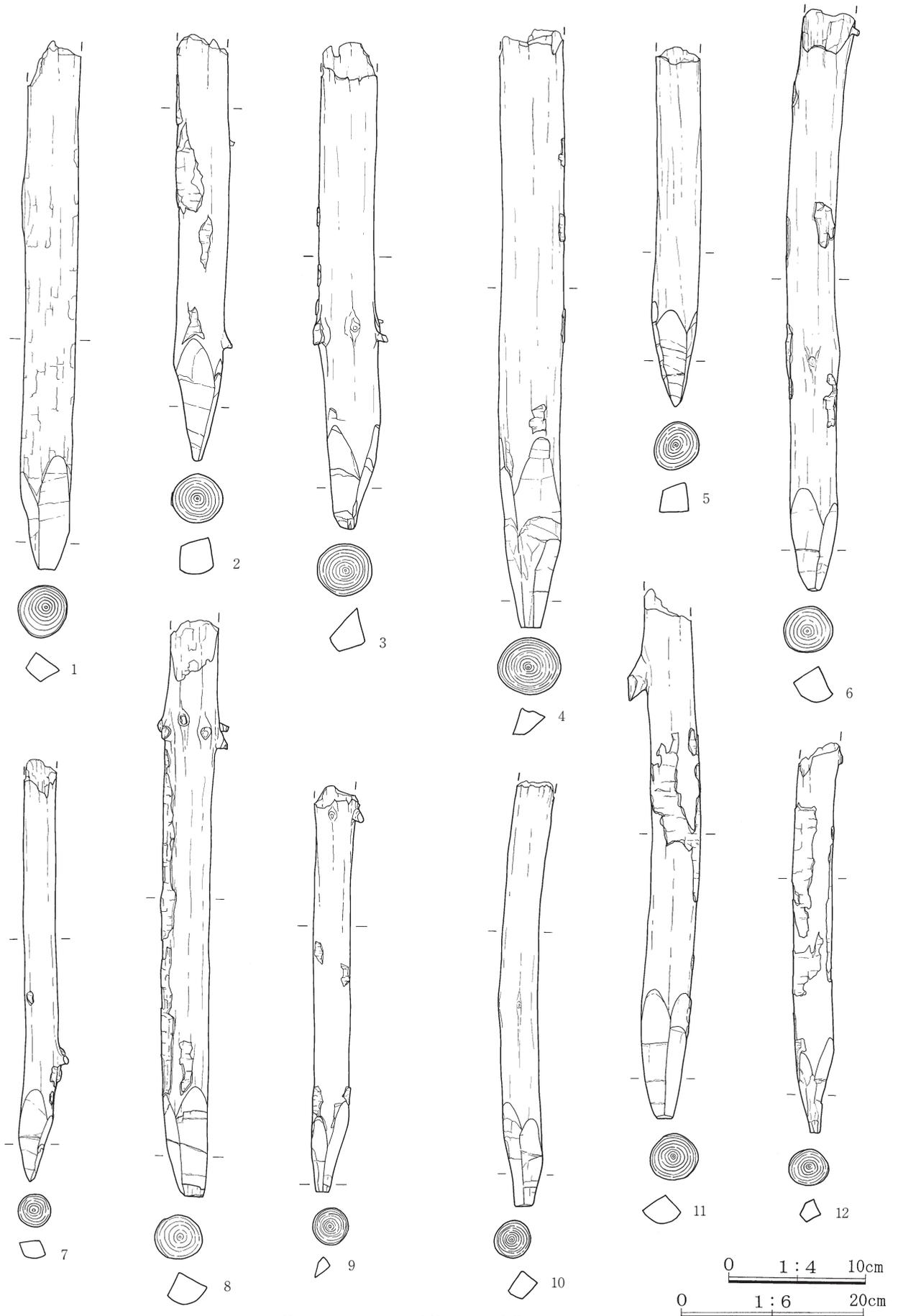
10区1号杭列（第24図、PL12）

東側調査区の中央部、385-188～365-205グリッドに位置する。調査区を縦断するように南北に33本の杭が検出された。杭列主軸方位はN-25° -Eを示す。杭の長さは

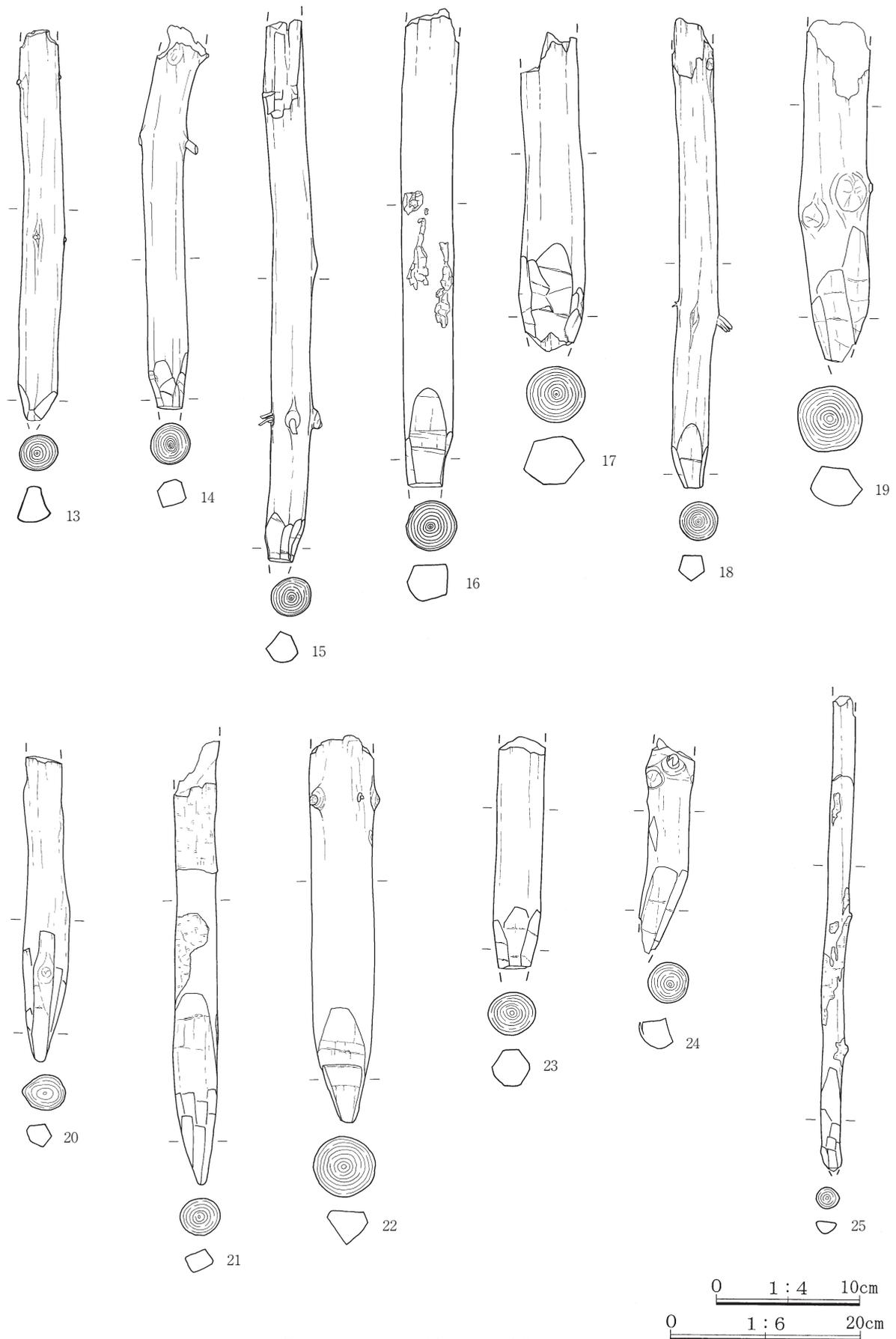
約30cmから50cmのもので、材は丸木材でアカマツが大半である。すべての杭の先端は少ないもので1面を多いものは6面を鋭角に削られ調整されている。これらの杭は現状で半分から2/3が土中に打ち込まれている状態で検出された。また、一列に打たれていることから、地割り区画のために使用された可能性が高い。杭の周りには明確な掘り込みがなく、平坦面に直接打ち込んだものと思われる。東側で検出され、本遺構と平行する1号柵列と同時期に使用されていた可能性が高い。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、検出状況や覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる



第24図 10区 1号杭列



第25図 10区 1号杭列出土遺物 (1)



第26図 10区 1号杭列出土遺物 (2)

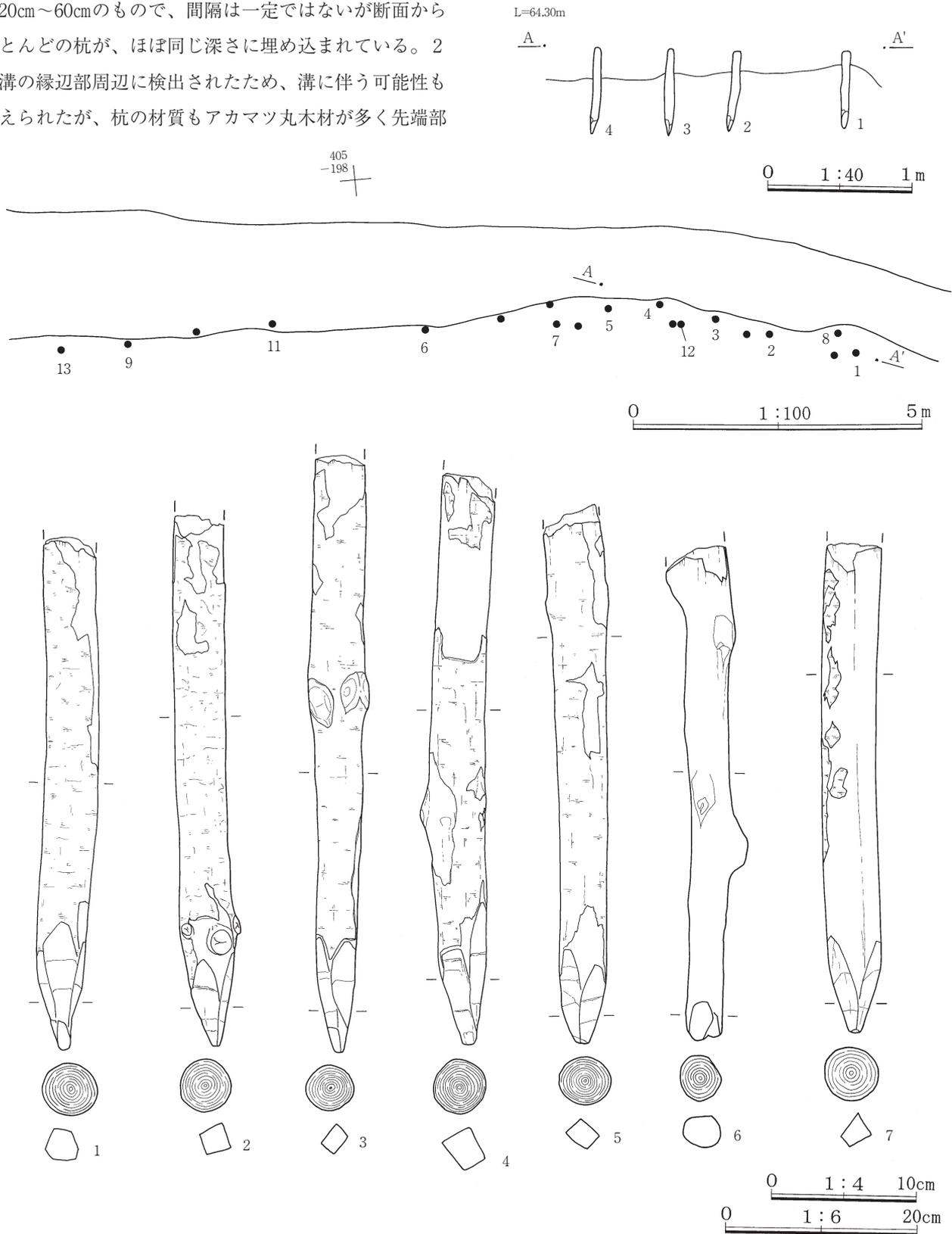
第7表 1号杭列 木器 観察表

図版番号 PL番号	遺物 番号	種別器形	長さ (cm)	経 (cm)	樹種	形・成調整等
25図 PL18	1	杭	39	4.2	アカマツ	4面
25図 PL18	2	杭	31.4	4.3	アカマツ	3面 他1面自然面
25図 PL18	3	杭	35.8	4.3	アカマツ	3面 他1面自然面
25図 PL18	4	杭	44	4.8	アカマツ	4面
25図 PL18	5	杭	26.5	3.8	アカマツ	4面
25図 PL18	6	杭	42.8	4	アカマツ	3面 他1面自然面
25図 PL18	7	杭	47.2	5.2	アカマツ	3面 他1面自然面
25図 PL18	8	杭	42.5	3.6	アカマツ	2面 他1面自然面
25図 PL18	9	杭	45.4	4	アカマツ	3面
25図 PL18	10	杭	47.4	4.2	アカマツ	3面 他1面自然面
25図 PL18	11	杭	43.2	4.4	アカマツ	5面
25図 PL18	12	杭	39	4.1	アカマツ	2面 他面自然面
26図 PL18	13	杭	27.7	2.9	アカマツ	2面 他2面自然面
26図 PL18	14	杭	41	5.2	アカマツ	5面
26図 PL18	15	杭	57.6	4.3	アカマツ	3面 他1面自然面
26図 PL18	16	杭	33.7	3.8	アカマツ	5面
26図 PL18	17	杭	22.5	4.6	アカマツ	5面
26図 PL18	18	杭	50	3.9	アカマツ	5面
26図 PL19	19	杭	24.2	5.2	アカマツ	4面 他1面自然面
26図 PL19	20	杭	21.4	3.2	ブナ科スダジイ	5面
26図 PL19	21	杭	31.2	3.2	ブナ科スダジイ	4面
26図 PL19	22	杭	27.3	4.5	アカマツ	4面
26図 PL19	23	杭	16.4	3.3	ニレ科ケヤキ	6面
26図 PL19	24	杭	15.2	3	ブナ科コナラ節	2面 他自然面
26図 PL19	25	杭	33.2	1.8	カバノキ科ハンノキ	1面 他自然面

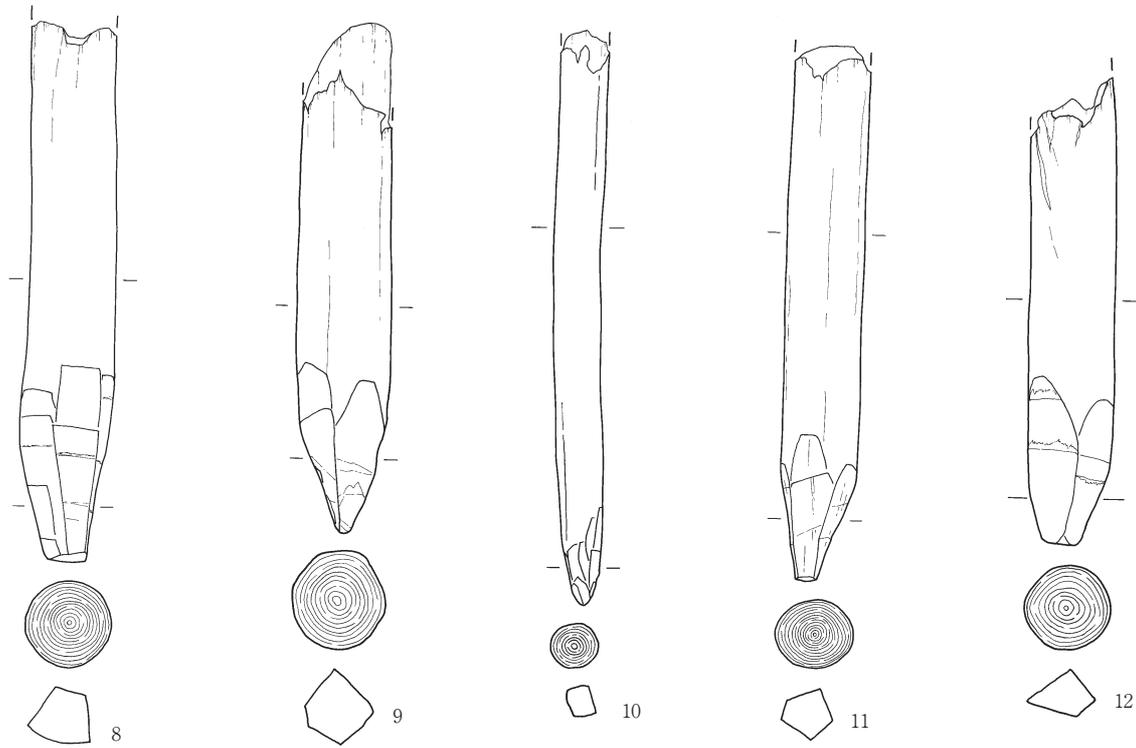
10区 2号杭列 (第27図、PL12)

東調査区406-209~403-119グリッドに位置する。東西長さ約8m間に、木杭が20本出土した。残存する長さは約20cm~60cmのもので、間隔は一定ではないが断面からほとんどの杭が、ほぼ同じ深さに埋め込まれている。2号溝の縁辺部周辺に検出されたため、溝に伴う可能性も考えられたが、杭の材質もアカマツ丸木材が多く先端部の調整面数や形状も1号杭列の杭と非常に相似する。このことから、1号杭列と関連するか、同列である可能性も考えられる。

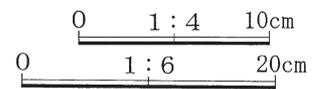
の調整面数や形状も1号杭列の杭と非常に相似する。このことから、1号杭列と関連するか、同列である可能性も考えられる。



第27図 10区 2号杭列出土遺物 (1)



第28図 10区 2号杭列出土遺物 (2)



第8表 2号杭列 木器 観察表

図版番号 PL番号	遺物 番号	種別器形	長さ (cm)	経 (cm)	樹種	形・成調整等
27図 PL19	1	杭	53.9	5.7	アカマツ	6面
27図 PL19	2	杭	56.4	6.5	アカマツ	4面
27図 PL19	3	杭	62.8	6.8	アカマツ	4面面
27図 PL19	4	杭	60	6.8	アカマツ	4面
27図 PL19	5	杭	57.2	6.9	アカマツ?	4面
27図 PL19	6	杭	34.5	3	カバノキ科ハンノキ	1面 他自然面
27図 PL19	7	杭	34.3	3.8	アカマツ	4面
28図 PL19	8	杭	28.6	4.9	アカマツ	3面 他1面自然面
28図 PL19	9	杭	27	5	アカマツ	5面
28図 PL19	10	杭	30.4	2.5	ブナ科コナラ節	4面
28図 PL19	11	杭	40.8	5.4	アカマツ	2面
28図 PL19	12	杭	24.8	4.6	アカマツ	4面

第6項 ピット

10区からピットが6基検出されている。覆土から中近世時に帰属するものと考えられる。1号から4号ピットまでは近接して出土しているが、形状も一定ではなく、規則的な配列も認められないため、同一企図のもとに掘られた可能性はないと考えられる。5号、6号ピットは、これらより少し離れた東側で検出された。この2基からは木杭先端部片が出土している。杭列との関係も考えられるが、周辺には同様なピットは検出されておらず、詳細は不明である。

10区1号ピット (第29図、PL13)

東側調査区の北側403-184グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。長軸方向はN-58°-Wを示す。規模は長軸45cm、短軸33cm、深18cmである。覆土は細粒白色軽石を含む粘質土を主体とする。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる。

10区2号ピット (第29図、PL13)

東側調査区の北側400-183グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。長軸方向はN-12°-Wを示す。規模は長軸75cm、短軸50cm、深18cmである。覆土は細粒白色軽石を含む粘質土を主体とする。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる。

10区3号ピット (第29図、PL13)

東側調査区の北側399-183グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸80cm、短軸70cm、深10cmである。長軸方向はN-85°-Wを示す。覆土は細粒白色軽石を含む粘質土を主体とする。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる。

10区4号ピット (第29図、PL13)

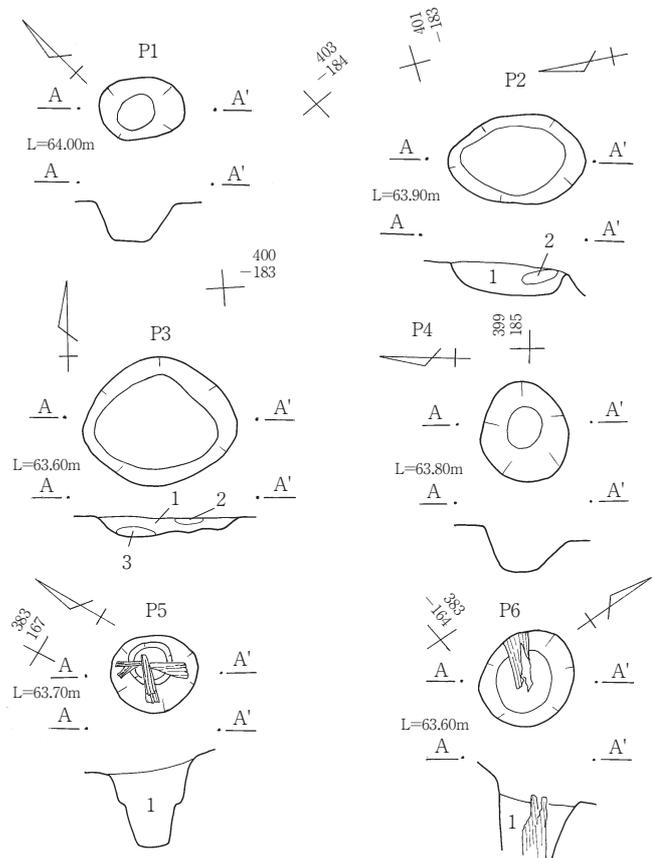
東側調査区の北側399-185グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸50cm、短軸48cm、深10cmである。長軸方向はN-90°-Wを示す。覆土は細粒白色軽石を含む粘質土を主体とする。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる。

10区5号ピット (第29図、PL13)

東側調査区の北側382-166グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸50cm、短軸40cm、深33cmである。長軸方向はN-85°-Wを示す。覆土は西側に出土した1号～4号ピットと類似するが、形状は中心部が深く掘られ、杭等を打ち込むために掘り込んだ様相を呈す。ピット内から木片数点が出土している。覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる。

10区6号ピット (第29図、PL13)

東側調査区の北側383-163グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸50cm、短軸50cm、深(30)cmである。長軸方向はN-30°-Wを示す。覆土は5号ピットと同質である。5号ピット同様、中心部が深く掘られ、杭等を打ち込むために掘り込んだ様相を呈す。中央からは木片が出土している。覆土等から中近世期に帰属するものと考えられる。

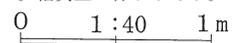


10区2・3号ピット

- 1 黒色土 微砂粒を含み、締まり弱い。
- 2 黒褐色土 微砂粒を含み、締まり弱い。粘質土。
- 3 灰白色土 微砂粒を含み、鉄分が付着する。

10区5・6号ピット

- 1 褐灰色土 細粒白色軽石を含む。粘質土で締まりあり。



第29図 10区 1号～6号ピット

第7項 溝

中近世期と考えられる溝は、1区から2条、9区から2条、10区から3条の計7条の溝が検出されている。出土遺物が稀薄で時期判断は困難であったが、覆土に混入する軽石や、その他の同時期の遺構覆土等と比較し判断した。

1区1号溝 (第30図、PL13)

東側調査区中央部639-701から638-709グリッドに位置する。主軸方位N-80°-Wを示す。確認範囲長さ9m、幅1.1m、深さ23cmを測る。やや微高地状の範囲から検出された。南端部は調査区外のため、全容は明確にはできない。覆土は浅間A軽石を全体に混入する粘質土を主体とする。土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土から中近世期に帰属するものと考えられる。

1区2号溝 (第30図、PL13)

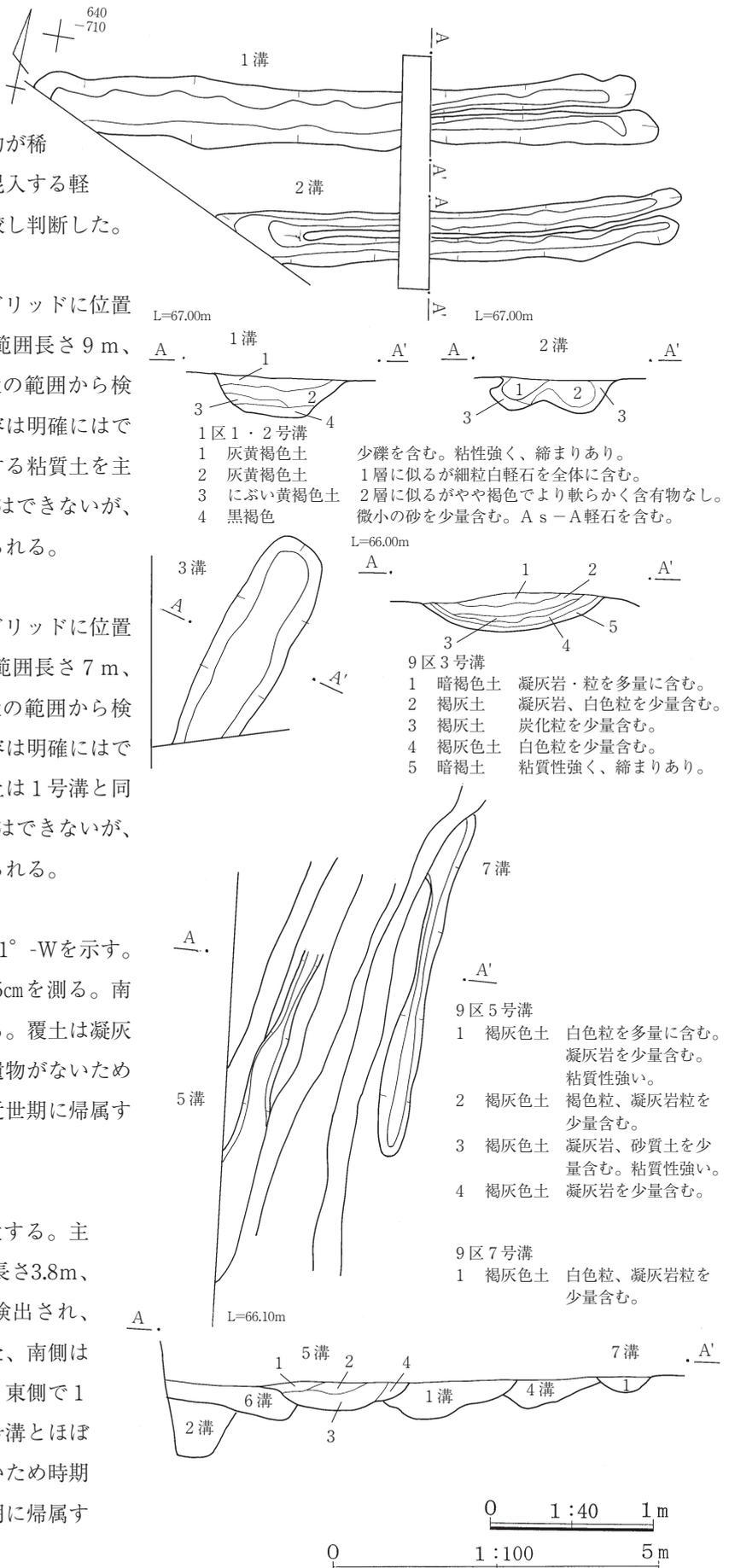
東側調査区中央部639-701から638-709グリッドに位置する。主軸方位N-80°-Wを示す。確認範囲長さ7m、幅0.4m、深さ40cmを測る。やや微高地状の範囲から検出された。南端部は調査区外のため、全容は明確にはできない。1号溝と平行して走行する。覆土は1号溝と同質である。土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土から中近世期に帰属するものと考えられる。

9区3号溝 (第30図、PL13)

調査区の北側に位置する。主軸方位N-41°-Wを示す。確認範囲規模は長さ3.7m、幅0.5m、深15cmを測る。南西隅部はトレンチによって削平されている。覆土は凝灰岩塊や細粒白色軽石を主体とする。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土から中近世期に帰属するものと考えられる。

9区5号溝 (第30図、PL14)

東側調査区南端520-370グリッドに位置する。主軸方位N-20°-Wを示す。確認範囲規模は長さ3.8m、幅0.5m、深さ18cmを測る。南端隅部で検出され、北側は上面からの削平の影響を受け、また、南側は調査区外のため全容は明確にはできない。東側で1号溝と重複しこれより新しい。覆土は3号溝とほぼ同質の土で埋没している。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土から中近世期に帰属するものと考えられる。



第30図 1区 1・2号溝、9区 3・5・7号溝

9区7号溝 (第30図、PL14)

調査区の南端520-360グリッドに位置する。主軸方位N-20° -Wを示す。確認範囲長さ5.5m、幅0.6m、深12cmを測る。南端隅部で検出され、北側は上面からの削平の影響を受け、明確にはできない。北側で4号溝と重複しこれより新しい。覆土は5号溝とほぼ同質の土で埋没している。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土から中近世期に帰属するものと考えられる。

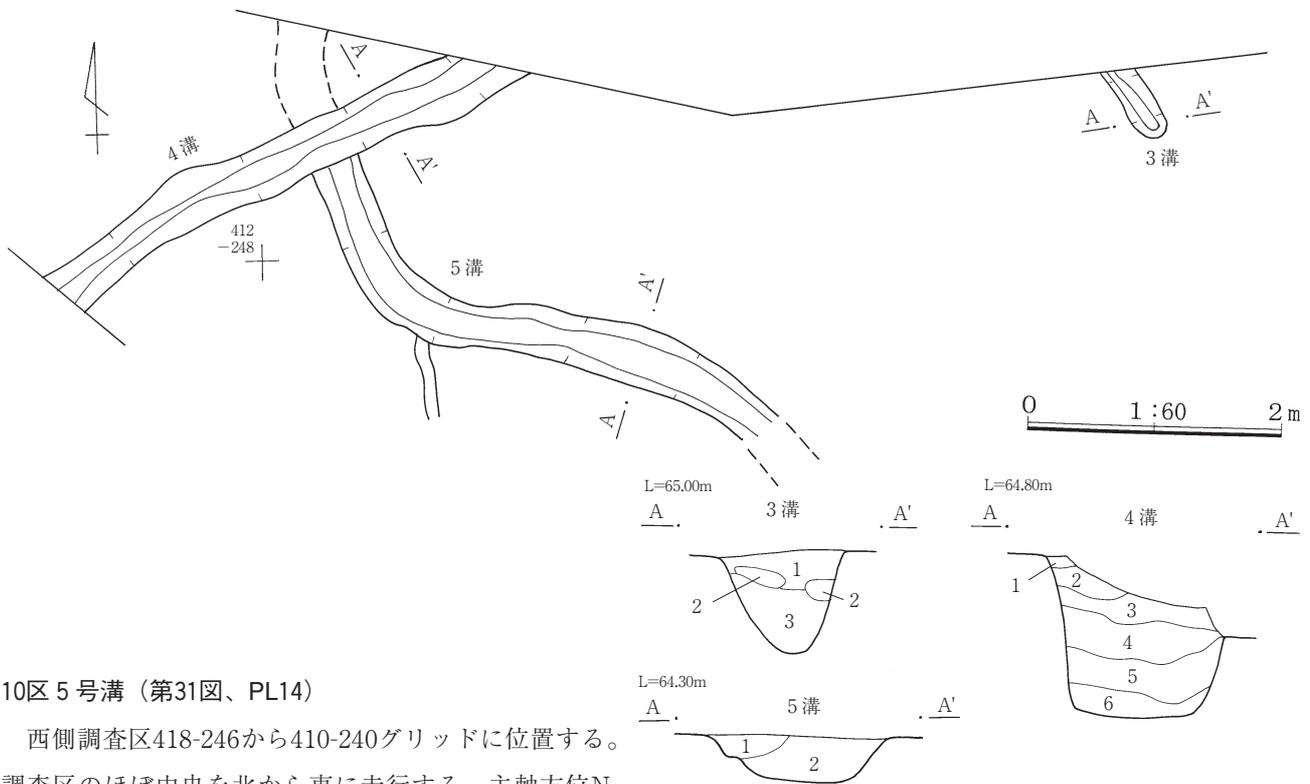
10区3号溝 (第31図、PL14)

西側調査区の南端413-227グリッドに位置する。確認範囲で主軸方位N-20° -Wを示す。長さ1.4m、幅0.7m、深さmを20cm測る。南端隅部で検出されたため、全容は明確にはできない。覆土は褐色細粒軽石を全体に混入す

る粘質土を主体とする。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土から中近世期に帰属するものと考えられる。

10区4号溝 (第31図、PL14)

西側調査区418-242から412-250グリッドに位置する。主軸方位N-63° -Wを示す。長さ9.5m、幅1.4m、深48cmを測る。調査区を南北に縦断して走行するため、南側、北側はそれぞれの調査区外であるため全容は明確にはできない。中央部付近で5号溝と重複し、本溝がこれより新しい。覆土は比較的締まりの良い褐色細粒軽石を、全体に混入する粘質土を主体とする。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土から中近世期に帰属するものと考えられる。



10区5号溝 (第31図、PL14)

西側調査区418-246から410-240グリッドに位置する。調査区のほぼ中央を北から東に走行する。主軸方位N-40° -Wを示す。長さ11.9m、幅1.1m、深さ30cmを測る。北側、東側はそれぞれの調査区外であるため全容は明確にはできない。南端隅部で検出されたため、全容は明確にはできない。北側で4号溝と重複しこれより旧いが、覆土は4号溝とほぼ同質の土で埋没しているため、時期差はほとんどないものと考えられる。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土から中近世期に帰属するものと考えられる。

10区3号溝

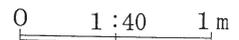
- 1 黒褐色土 微小のA s - B 軽石を含む。小礫を混入する。
- 2 にぶい黄褐色土 2層が混在する。鉄分を斑状に含む。
- 3 黒色土 微小の砂粒を含む。粘質性を伴う。

10区4号溝

- 1 褐灰色土 微小のA s - B 軽石が混在する。全体に鉄分が沈着する。
- 2 暗褐色土 凝灰岩、礫、微小のA s - B 軽石を全体に含む。
- 3 黒褐色土 微小のA s - B 軽石を含む。
- 4 黒色土 礫を少量混入する。締まり弱い。
- 5 褐灰色土 含有物なく、締まり弱い。粘質土。
- 6 黒色土 微小の砂を少量含む。締まり弱い。

10区5号溝

- 1 褐色土 含有物なし。締まりあり。
- 2 褐灰土 下位5cmほどに砂層が堆積する。やや粘質性を伴う。



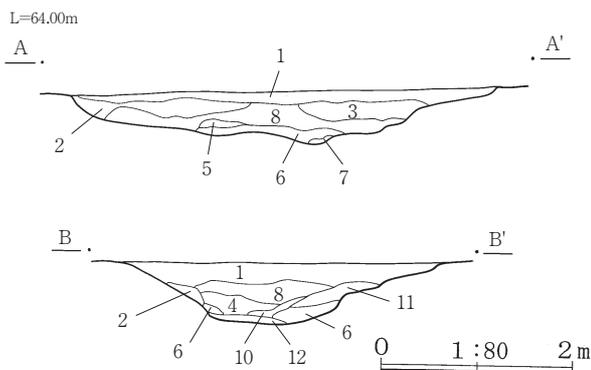
第31図 10区3・4号溝

第8項 流路

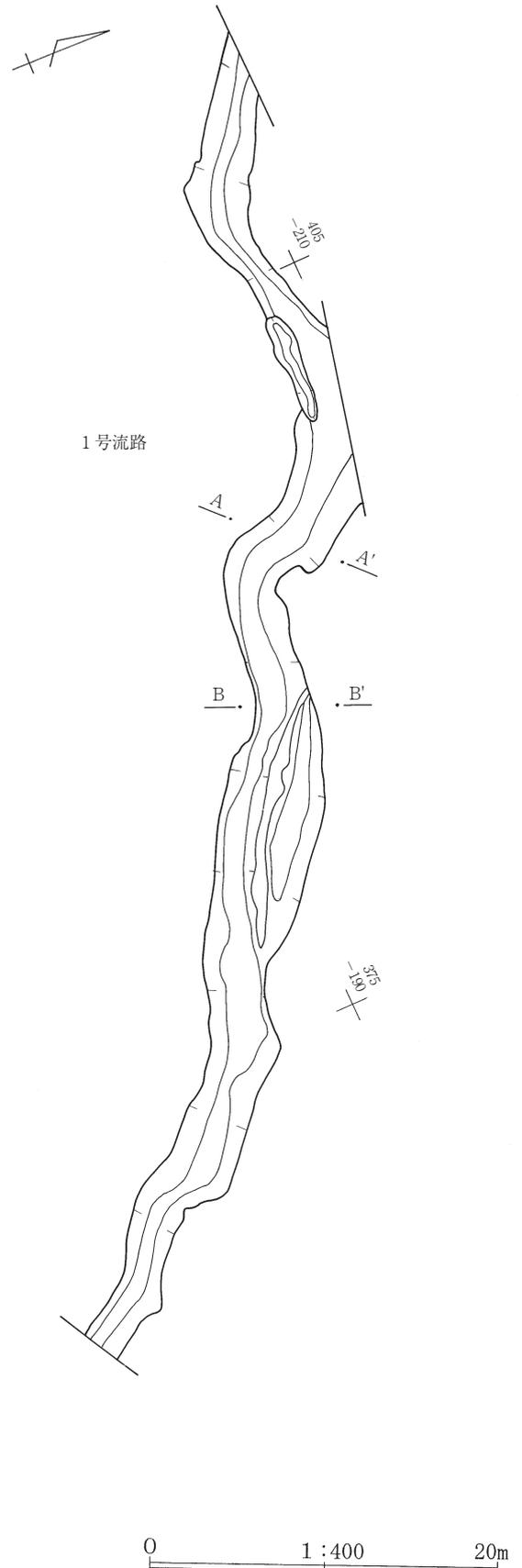
10区の最終面から検出された。他の遺構との重複関係や覆土から考えれば古墳時代以前の所産と考えられるが、本流路はその検出状況からみても、人為的に作られたものとは考えられず、自然的の力によって形成されたものであると思われる。そのため遺構編の最終部に掲載することとした。

10区1号流路（第32図、PL15）

東側調査区北側410-220から370-150グリッドに位置する。主軸方位N-65° -Wを示す。長さ8.1m、幅3.1m、深44cmを測る。調査区を東西に緩やかに蛇行しながら走行する。1号、2号竪穴状遺構、1号ピット列、7号溝と重複し、これらより古い。西側は調査区外に延びるため全容は明確にはできない。覆土は砂質土を主体とする。出土遺物がないため時期は明確にはできないが、覆土やその他の遺構との切り合い等から古墳時代以前のものと考えられる。



- | | |
|------------|-------------------------|
| 1 灰黄褐色土 | 粘性強く、細粒白色砂粒を含む。鉄分が沈着する。 |
| 2 灰黄褐色土 | 1層に似るが白色砂粒含有 |
| 3 にぶい黄褐色土 | 微小の砂粒を主とし小礫を混入する。 |
| 4 褐色土 | 微小の砂質粒を主とし、粘質土塊を含む。 |
| 5 灰黄褐色土 | 微砂粒中に少礫混じる。砂質土主体。 |
| 6 褐色土 | 微砂粒主体で締まり弱い。 |
| 7 黒褐色土 | 微小の砂粒を含む。締まり弱い。 |
| 8 灰黄褐色土 | 黄褐色粘質土塊を少量含む。斑状に鉄分沈着。 |
| 9 にぶい黄褐色土 | 小礫を混入する。砂質土主体。 |
| 10 にぶい黄褐色土 | 含有物なく、締まり弱い。 |
| 11 灰黄褐色土 | 小礫を混入する。締まり弱い。 |
| 12 オリブ褐色土 | 砂質土主体。粒子やや粗く、締まり弱い。 |



第32図 10区 1号流路

第4章 遺構外出土遺物

第1節 遺構外出土遺物の概要

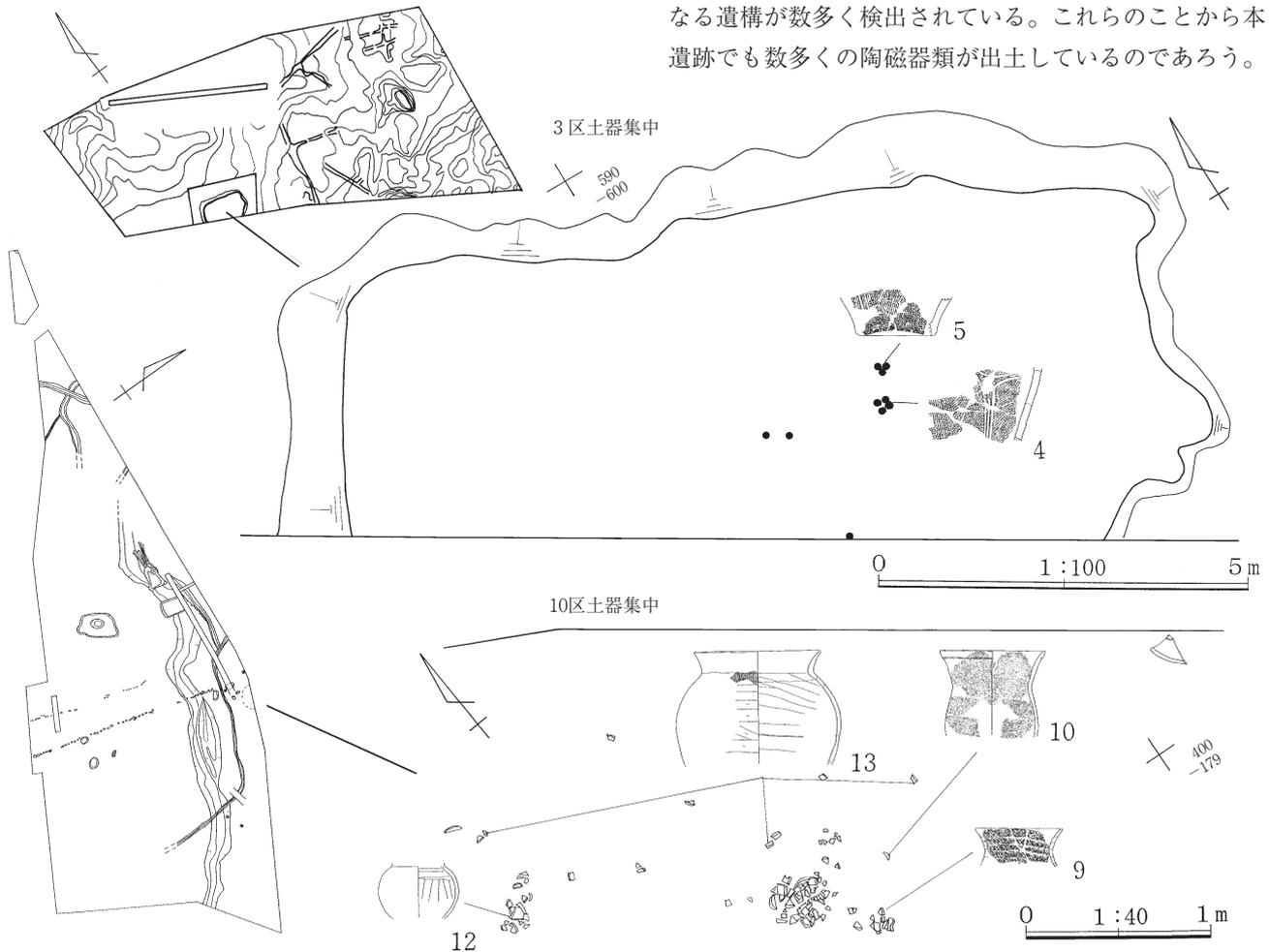
本遺跡からは、縄文時代から中近世に至るまで各種の遺物が出土している。しかし、その多くは遺構に伴わないものや、摩滅が著しく形状を明確にできない小片もある。

時代別には、縄文時代の遺物は土器64点、石器12点である。土器は型式別でみると前期（関山式）2点、中期（加曾利E式）32点、晩期15点、時期不明15点である。石器は石斧が1点、石鏃が2点、チャートやホルンフェルスなど地元石材を中心とした剥片類が9点である。これらの遺物はいずれも遺構に伴ってはいない。但し、本遺跡では遺構として取り扱わなかったが、3区の微高地から縄文土器が集中して出土したため土器集中部として調査を行った。しかし、遺構としての明確な確証が得られなかったため出土土器については遺構外出土遺物とし、下記に3区1号土器集中として出土位置を掲載した。

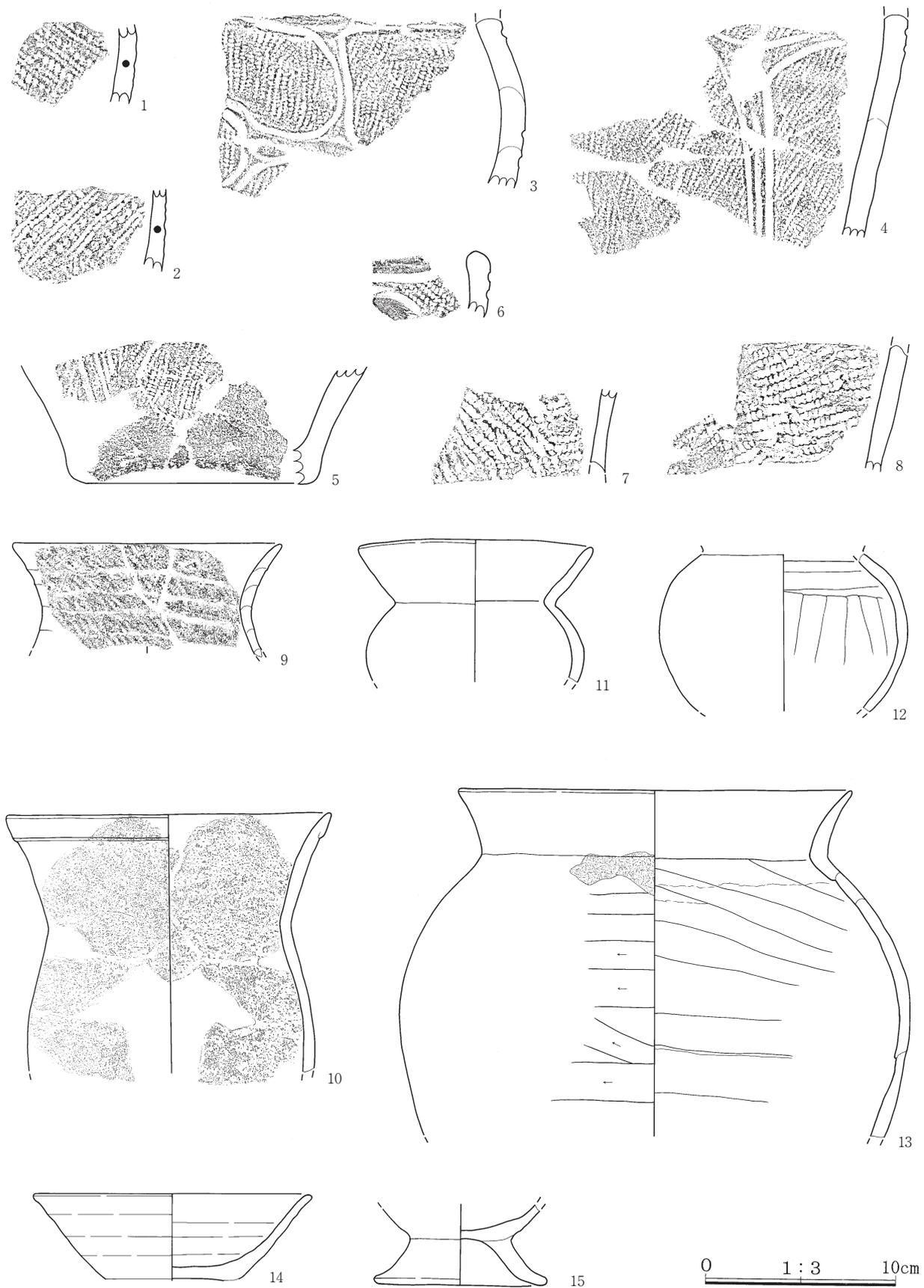
古墳時代や古代の遺物では、円筒型と考えられる埴輪片がほとんどの調査区から出土し、総重量で約4,000g

に上る。調査区内ではこれらの埴輪片に関係する古墳は検出されておらず、隣接する丘陵部の成塚向山古墳群から流失したものと考えられる。しかし、縄文土器同様、摩滅が著しく掲載には至らなかった。また、土師器や須恵器などの遺物は総重量4,450g出土したが、ほとんどが小片である。10区の八王子丘陵の麓部分では、古墳前期土器片が集中して出土しており、土器の出土状況から祭祀場所との可能性も考えられたが、北側が調査区外のため全容は明確にはできていない。したがって祭祀としての確証を得るまでの資料が少ないため、3区の土器集中部同様にここでは遺構外出土遺物とし掲載した。出土状況については、10区土器集中として下記に掲載した。

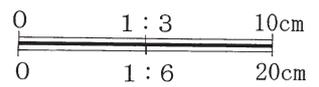
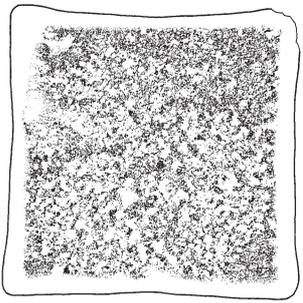
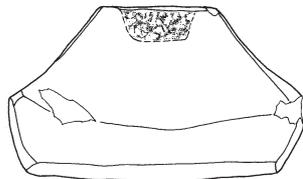
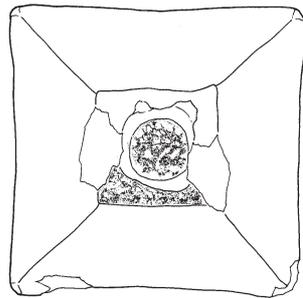
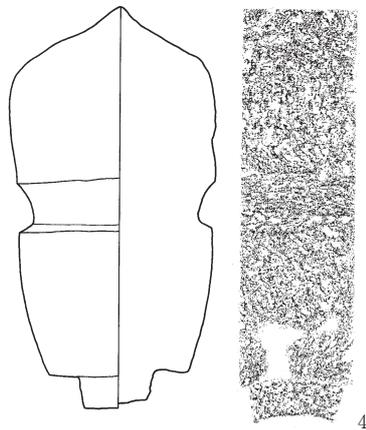
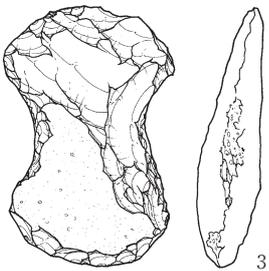
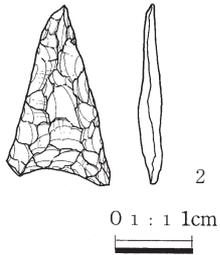
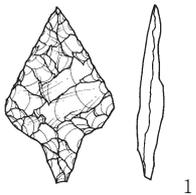
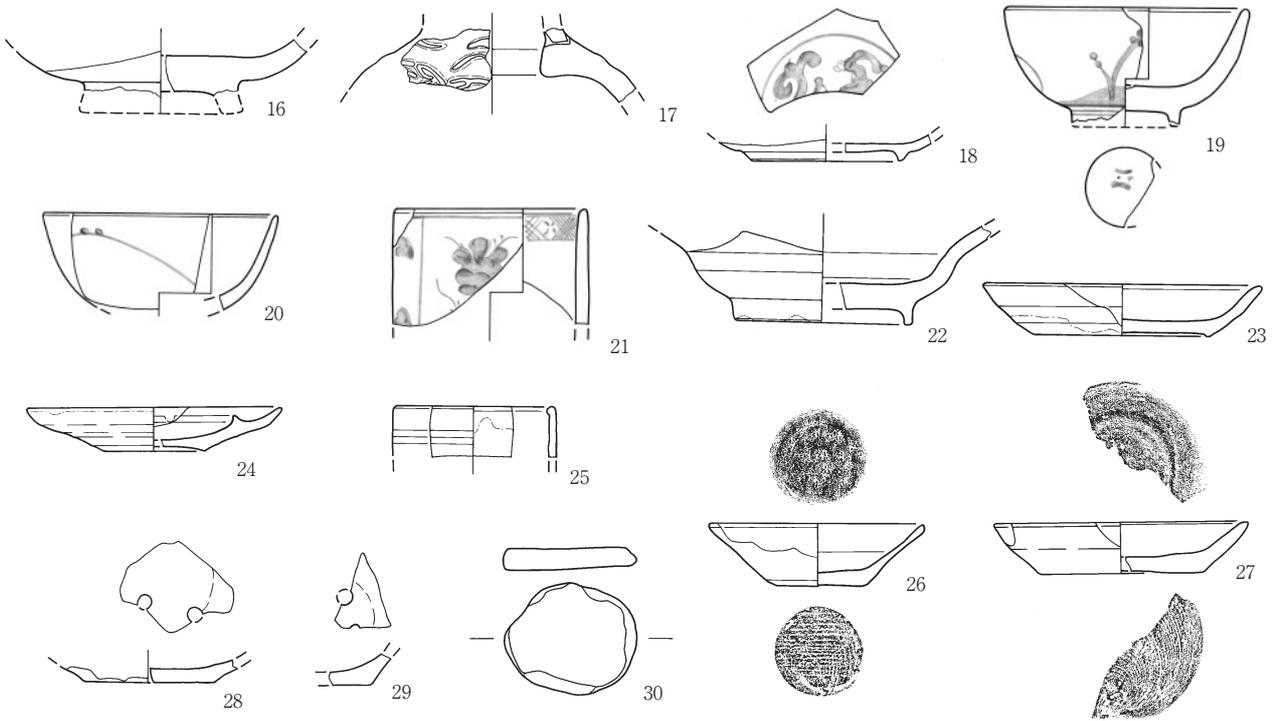
中近世時に帰属する遺物は総重量17,230gと縄文から古代の土器に比べ出土量が多い。本遺跡からは検出されたこの時期の遺構は決して多くないが、井戸や溝等は検出されており、後世の削平などで消滅した遺構もあると思われる。周辺遺跡を見ると、隣接する菅塩遺跡群や大鷲遺跡からは掘立柱建物を中心にこの時期の生活基盤となる遺構が数多く検出されている。これらのことから本遺跡でも数多くの陶磁器類が出土しているのであろう。



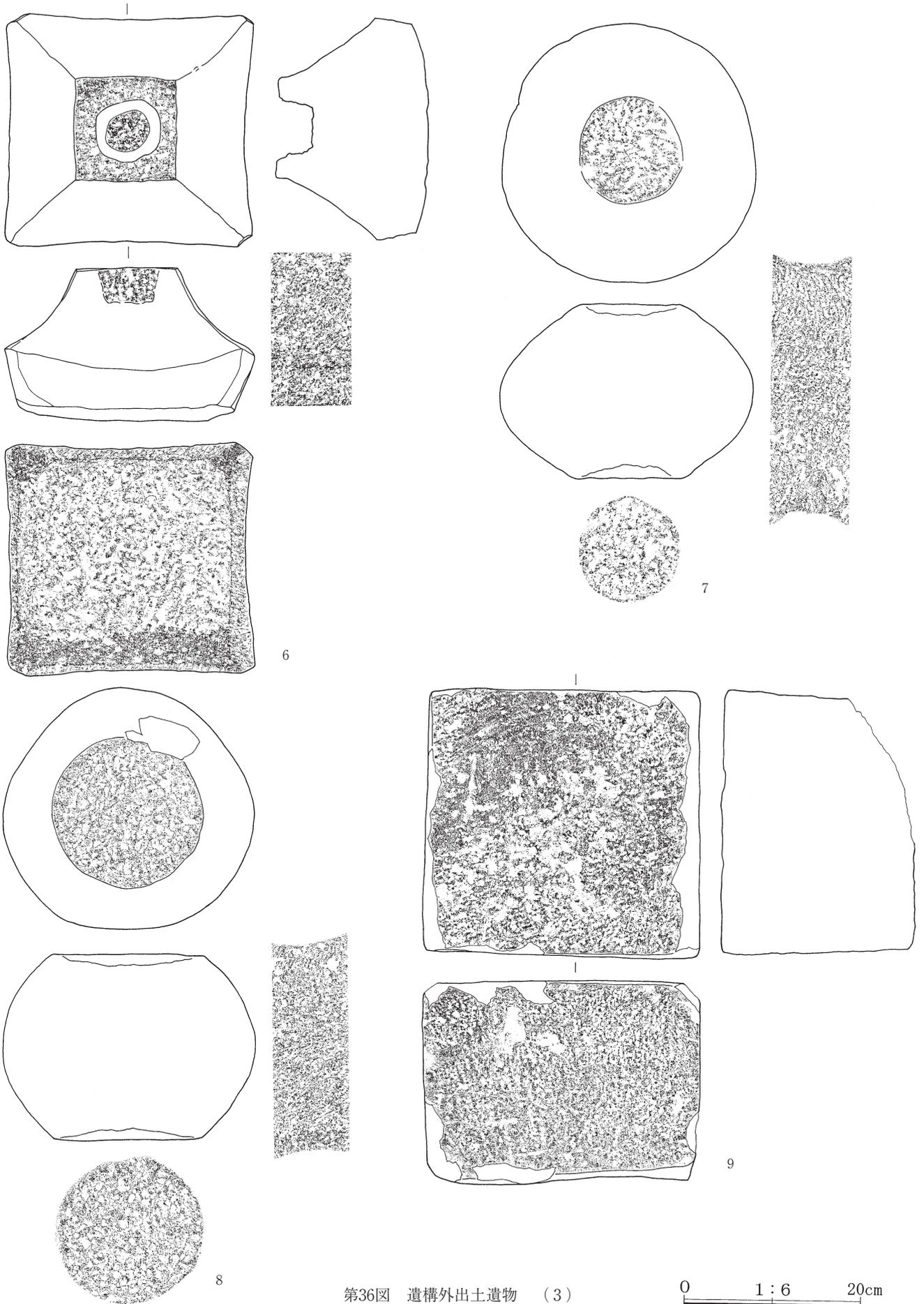
第33図 3区・10区遺物分布図



第34図 遺構外出土遺物 (1)

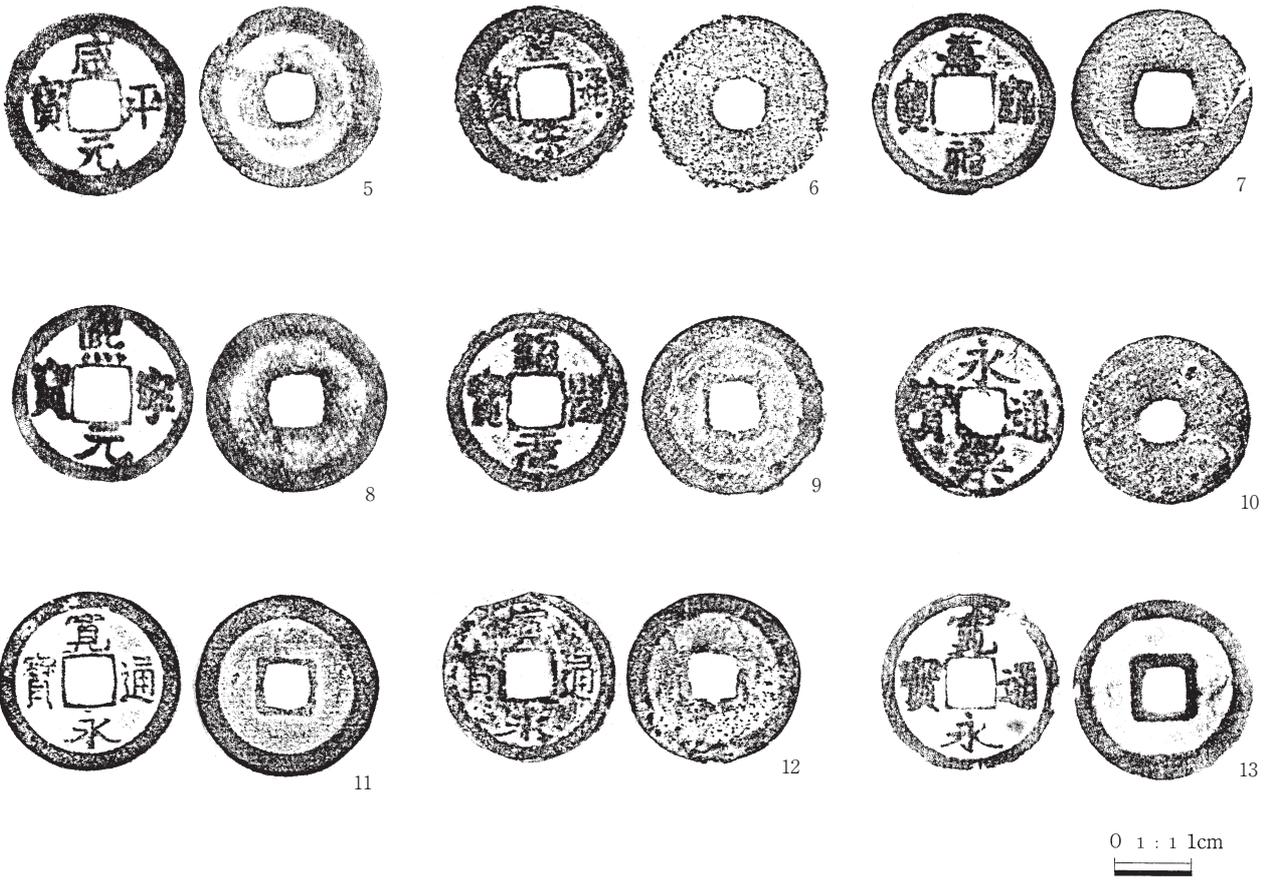
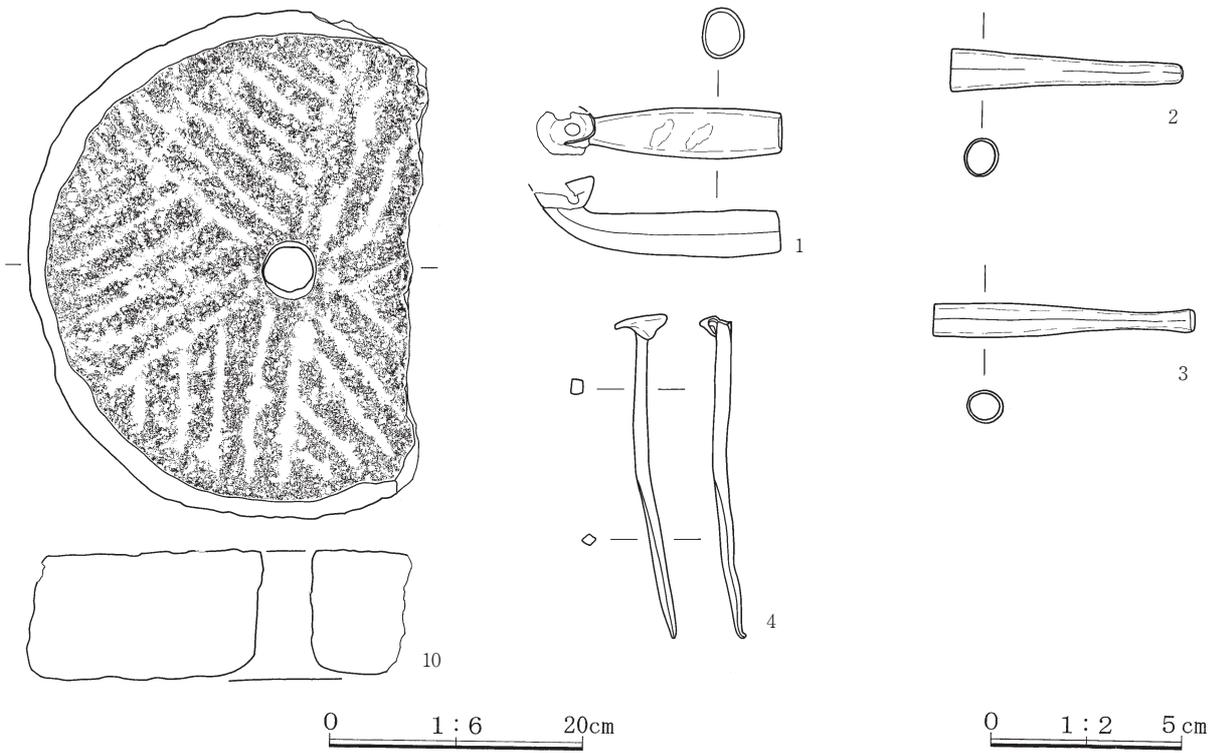


第35図 遺構外出土遺物 (2)



第36図 遺構外出土遺物 (3)

0 1:6 20cm



第37図 遺構外出土遺物 (4)

第9表 遺構外遺物 土器観察表

挿図番号 PL番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
34 図 PL20	1	縄文土器 深鉢	3区 遺物集中部・胴部破片				粗砂、繊維/ふつう/にぶい橙	直前段合熱による羽状構成。	関山式
34 図 PL20	2	縄文土器 深鉢	3区 遺物集中部・胴部破片					No.1 と同一個体。	関山式
34 図 PL20	3	縄文土器 深鉢	3区 遺物集中部・胴部破片				粗砂、黒色粒/ふつう/にぶい赤褐	頸部に向かって緩く内湾する部位。RLを施し、沈線により幾何学モチーフを描く。	加曾利E2式
34 図 PL20	4	縄文土器 深鉢	3区 遺物集中部・胴部破片					No.3 と同一個体。RLを縦位施紋し、沈線を垂下させる。	加曾利E2式
34 図 PL20	5	縄文土器 深鉢	3区 遺物集中部・底部破片					No.3 と同一個体。推定底径 13.0cm。	加曾利E2式
34 図 PL20	6	縄文土器 深鉢	6区 表採・口縁部破片				粗砂、石英/ふつう/淡黄	沈線により楕円状モチーフを描き、RLを充填施紋する。	賀曾利E4式
34 図 PL20	7	縄文土器 深鉢	3区 遺物集中部 胴部破片				粗砂、石英/ふつう/にぶい橙	RLを斜位施紋する。	加曾利E式
34 図 PL20	8	縄文土器 深鉢	3区 遺物集中部 胴部破片					No.7 と同一個体。	加曾利E式
34 図 PL20	9	土師器 甕	10区 土器集中部 口縁部～胴部上位片	14.0			砂粒(チャート細粒多)/良好/橙	4段(残存部)粘土紐積み上げ痕をのこす。横位縄文(PL)を施す。内面横へら磨き。	吉ヶ谷・赤井戸式
34 図 PL20	10	土師器 甕	10区 土器集中部 口縁部～胴部中位片	14.8			細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい褐	器面摩滅のため整形、単位不鮮明。口縁部折り返し、口唇部に波状文が巡る。	樽式
34 図 PL20	11	土師器 罎	10区 土器集中部 口縁部～胴部中位片	12.0			細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、胴部はへら削りか、器面摩滅のため単位不鮮明。	古墳時代
34 図 PL20	12	土師器 小型壺	10区 土器集中部 胴部片	頸8.4		13.0	細砂粒/良好/明黄褐	器面摩滅のため整形不鮮明。内面はへらナデ。	古墳時代
34 図 PL20	13	土師器 甕	10区 土器集中部 口縁部～胴部中位片	20.4		26.8	細砂粒/良好/明赤褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、胴部へら削り。内面胴部はへらナデ。外面頸部下にスス附着。	古墳時代
34 図 PL20	14	須恵器 椀	5区 表採 1/3	14.2	7.0		細砂粒/還元焰/灰	ロク口整形、回転右回りか。高台は貼付であるが剥落、底部は回転へら削り。	平安時代
34 図 PL20	15	土師器 台付甕	7区 表採 脚部			8.7	細砂粒/良好/明赤褐	脚部は貼付。胴部はへら削り、内面はへらナデ。脚部は内外面とも横ナデ。	奈良・平安時代
35 図 PL20	16	龍泉窯系青磁 碗	7区 表採 底部				良好/灰白	残存部無文。高台内無釉。見込み釉の擦れ多い。	12世紀から14世紀
35 図 PL20	17	中国青磁 瓶類	6区 表採 肩部片				良好/灰白	内外面施釉。二重貫入か。肩部と頸部の素地は不連続で、釉により繋がる。外面陽刻による牡丹唐草状の文様。割れ口や釉に駒貝割れ多く、周辺から流されたか二次的な移動によりもたらされた可能性高い。	明代か
35 図 PL20	18	中国磁器 染付皿	7区 表採		(6.0)		やや不良/白	見込み玉取獅子か。高台端部外面篋削り。	15世紀中から16世紀中
35 図 PL20	19	肥前磁器 碗	6区 表採	(9.4)			不良/灰白	貫入入る。外面輪梅樹文。高台内不明銘。波佐見系。	18世紀後半から19世紀前半
35 図 PL20	20	肥前磁器 碗	5区 表採 1/3	(9.0)			灰白	外面雪輪梅樹文。波佐見系。	18世紀中から後半
35 図 PL20	21	肥前磁器 筒形碗	区不明 表採 1/6	(7.3)			灰白	外面花卉文。口縁部内面簡略化した四方櫛。	18世紀中から後半
35 図 PL20	22	瀬戸・美濃陶器 皿	3区 表採 1/2		(7.0)		灰白	内面から高台外面長石釉。貫入入る。内面の素地に布痕残る。体部内湾し、口縁部は開く。	17世紀
35 図 PL20	23	瀬戸・美濃陶器 灯火皿	6区 表採	(10.8)	(6.8)		淡黄	内面から体部外面鉛釉。内面目痕。高台内浅く削る。	17世紀後半から18世紀前半
35 図 PL20	24	製作地不詳陶器 灯火受皿	6区 表採 1/4	(10.0)	(4.0)		灰白	底部外面から体部外面回転篋削り。内面灰釉。信楽系か。	19世紀
35 図 PL20	25	製作地不詳陶器	6区 表採 口縁部片	(6.0)			灰白	銅製品の取鍋として利用されたのか、銅の付着や内面の溶融が認められる。外面無釉か？	中世以降
35 図 PL20	26	在地系土器 皿	9区 表採 底部完形 口縁部一部残	(8.4)	3.5	2.5	灰白	底部外面右回転糸切無調整後に圧痕。底部内面指撫を行なうと考えられるが、摩滅のため不明。	中世

第4章 遺構外出土遺物

35 図 PL20	27	在地系土器 皿	5区 表採 1/6 ~ 1/2	(9.8)	(6.5)	2.0	にぶい黄橙	底部外面左回転糸切無調整。体部 やや内湾する。	江戸時代か
35 図 PL20	28	在地系土器 不明	7区 表採 底部片			(5.0)	鈍橙	轆轤成形土器皿の底部に焼成前の 穿孔を行なう。	中世以降
35 図 PL20	29	在地系土器 不明	7区 表採 底部片				鈍橙	轆轤成形土器皿の底部に焼成前の 穿孔を行なう。底部内面からの穿 孔で貫通しない穴が1箇所認めら れる。	中世以降
35 図 PL20	30	在地系土器 円盤状土製品	5区 表採 完形	5.1	4.4	0.9	黒灰、灰白	江戸時代の焙烙と推定される底部 を打ち欠いて円盤状に成形。	江戸時代か

第10表 遺構外遺物 観察表(石器・石製品)

挿図番号 P L 番号	No.	種 類 種	出土位置 残存率	長・高 (cm)	幅 (cm)	重 (g ,Kg)	成形・整形の特徴	石 材
35 図 PL20	1	石鏃	10区 表採	2.4	1.4	0.9	凸基有茎鏃 完成状態	黒色頁岩
35 図 PL20	2	石鏃	10区 表採	2.3	1.5	0.7	凹基無茎鏃 完成状態?	褐色碧玉
35 図 PL20	3	打製石斧	4区 表土	10.2	6.7	168.4	分銅型 完成状態、刃部磨耗・捲縛痕	ホルンフェルス
35 図 PL20	4	空風輪	10区 表採	31.6	16.4	9.9Kg	空輪は宝珠形。空輪下端に最大厚(14.2cm)を有し、やや偏平。工具痕が全面に残り、空輪下部に右下がり、風輪下部に左下がり、括部に横位工具痕。	粗粒輝石安山岩
35 図 PL20	5	火輪	9区 表採	13.8	23.2	9.7Kg	隅棟袖部は直線的に開く。稜上を研磨するほか、下面を面整形。上面左右の剥離痕は対称的な位置にあり、意図的かもしれない。萩原遺跡に類例あり。	粗粒輝石安山岩
36 図 PL21	6	火輪	9区 表採	17.2	28.2	16.5Kg	隅棟袖部は大きく開き外反。工具痕は裏面に深く、外面は痕跡程度で、面整形は明らか。四隅の袖端部、上面、及び、下面は平滑に面取り整形。	角閃石安山岩
36 図 PL21	7	水輪	10区 表採	19.6	28.4	19.7Kg	最大径は左側が下がり気味。上面観は右側が直線的で、やや歪む。工具痕は上辺付近が右下がり、以下は左下がり。	粗粒輝石安山岩
36 図 PL21	8	水輪	10区 表採	21.0	28.6	22.5Kg	最大径は器体中央。正面側、裏面側の3ヶ所に平坦面を有しており、原石形状を反映。正面上下両端に左下がり、胴部中央付近に横位の工具痕。	角閃石安山岩
36 図 PL21	9	地輪	10区 表採	21.6	31.1	35.6Kg	形状は略均質。正面に縦位工具痕が良く残り、上面中央より奥は研磨されている。	粗粒輝石安山岩
37 図 PL21	10	石臼	10区 表採	10.6	40.0	19.7Kg	6分割した下臼。軸孔より上の分割面には浅い7条の、軸孔下の分割面にはやや深い5条の溝を刻む。欠損面は直線的で軸孔から外れ、意図的破損?	溶結凝灰岩

第11表 遺構外遺物 観察表(鉄製品・古銭)

挿図番号 P L 番号	No.	種 類 種	出土位置 残存率	口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	成形・整形の特徴
37 図 PL21	1	銅製品 煙管雁首	5区 表採 一部欠損	64			火皿1/2以上欠損。上面灰落とし時の敲打による変形が認められる。
37 図 PL21	2	銅製品 煙管吸口	5区 表採 完形	61			吸口部から羅宇挿入部まで均一に広がる。
37 図 PL21	3	銅製品 煙管吸口	5区 表採 完形	68			吸口部付近でボトルネック状に径が細くなる。
37 図 PL21	4	銅製品 釘	5区 表採 完形	81			断面長方形。頭部は薄く延ばした後に折り曲げる。
37 図 PL21	5	銅製品 咸平元寶	10区 表採 完形	24.71	0.97 ~ 1.02	2.45	真書。北宋(998)初鑄。
37 図 PL21	6	銅製品 皇宋通寶	10区 表採 完形	23.82 ~ 23.87	1.11 ~ 1.21	2.64	真書。北宋(1038)初鑄。
37 図 PL21	7	銅製品 嘉祐通寶	4区 表採 完形	24.46 ~ 24.48	0.98 ~ 1.19	2.38	篆書。北宋(1056)初鑄。
37 図 PL21	8	銅製品 熙寧元寶	10区 表採 完形	24.44 ~ 24.55	1.16 ~ 1.18	3.27	真書。北宋(1068)初鑄。
37 図 PL21	9	銅製品 紹聖元寶	3区 表採 完形	24.43 ~ 24.51	1.14 ~ 1.16	2.99	篆書。北宋(1094)初鑄。
37 図 PL21	10	銅製品 永樂通寶	7区 表採 完形	22.61 ~ 22.84	0.96 ~ 1.12	2.08	16世紀後半から17世紀初頭鑄造とされる小型薄手の模鑄銭。
37 図 PL21	11	銅製品 寛永通寶	7区 表採 完形	24.34 ~ 24.36	1.10 ~ 1.17	3.67	新寛永。
37 図 PL21	12	銅製品 寛永通寶	10区 表採 完形	23.13 ~ 23.21	1.21 ~ 1.64	2.78	新寛永。
37 図 PL21	13	銅製品 寛永通寶	10区 表採 完形	24.30 ~ 24.34	1.19 ~ 1.20	2.83	新寛永。

第5章 まとめ

太田市域において、近年まで古代水田の存在が知られていたのは、古氷・矢田地区に所在する二の宮遺跡で発見された条里区画水田跡のみであった。しかし、本遺跡調査の契機となった北関東自動車道建設をはじめ様々な開発に伴う発掘調査が行われ、しだいに水田遺構が明らかにされている。とくに、市域における浅間B軽石(1108年)によって埋没した古代水田跡が多く検出されるようになってきた。その結果、この地域の水田遺構について多くの貴重な資料が提示されるようになり、古代水田遺構の分布や形態がより明確なものとなってきている。

本遺跡の周辺域での水田遺構の調査例としては、菅塩遺跡群や、大鷲遺跡、上強戸遺跡群、古氷条里水田跡などの諸遺跡があり、浅間B軽石で埋没した古代水田跡が見ついている。また、上強戸遺跡群からは古墳時代の水田跡も見ついている。(37図4)ここでは本遺跡とその周辺から検出された水田跡についてについて比較しながら、この地域の水田遺構の様相について述べ、まとめとする。

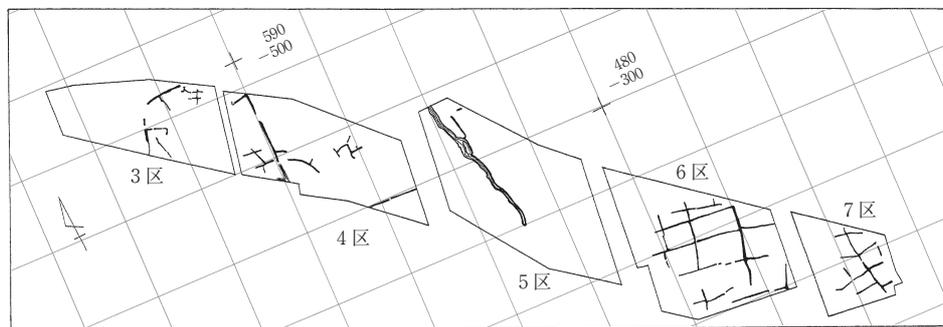
本遺跡の東約2.5kmに位置する古氷条里制水田跡からは、1町(109m)毎に南北軸上に乗る畦や溝が見つかり、水田耕作が条里制のもとに経営されていたことが報告されている。この発見は太田市のトレンチ調査で推定された、金山北東麓と小丸山丘陵との間に広がる条里制水田の存在が確証されたこととなった。

古氷条里制水田跡が立地する金山北東麓は地方官衙(新田郡衙)が置かれた上野国における中枢地域の一つであり、これらと深く関係をもった条里区画を基本とした

水田経営がなされていた可能性が高いと考えられる。したがって、この古氷条里制水田跡から八王子丘陵と金山丘陵の間隙を隔て、西へそれほど離れていない本遺跡から検出された水田跡も、条里制区画に基づいた水田形態である可能性が高いと考えられた。そこで、古氷条里制水田跡報告書で条里制を検証した方法を使用し、主軸方位がN-0° -Wである本遺跡の4区で検出された大畦を基準として検証を試みた。(第36図)結果的には、南北軸上に一致する畦はなく、同様に菅塩遺跡群(37図1)や大鷲遺跡(37図3)などから検出されている畦等も1町としての区画に符合するものは見つかっていない。

本遺跡及び各遺跡の水田抽出図みてもわかるように、南北軸上に乗る4区の大畦と平行する畦は見られず、それぞれ水田区画形態がまばらであることがわかる。また、それぞれ大きさや方向等が大きく異なり、地形に沿った水田区画を行っていることがわかる。これは、少なくとも浅間B軽石降下時には、本遺跡及び周辺遺跡において、中央集権的な律令政治のもとに行われた条里区画を行わず、生産効率を最重要に考えて場所に合った水田経営を行っていたのではないだろうか。

1町区画を示す畦などは洪水の氾濫や後世の攪乱によって消滅した可能性も否めないが、浅間B軽石降下時における当時の水田経営状態は検出面とそれほど大きくは変わってはいないのではないかと。例えば、本遺跡5区の1号溝から考えると、溝は浅間B軽石純層で埋没しており両側には高まりをもった畦が走行しているのである。



第38図 水田概念図

第5章 まとめ

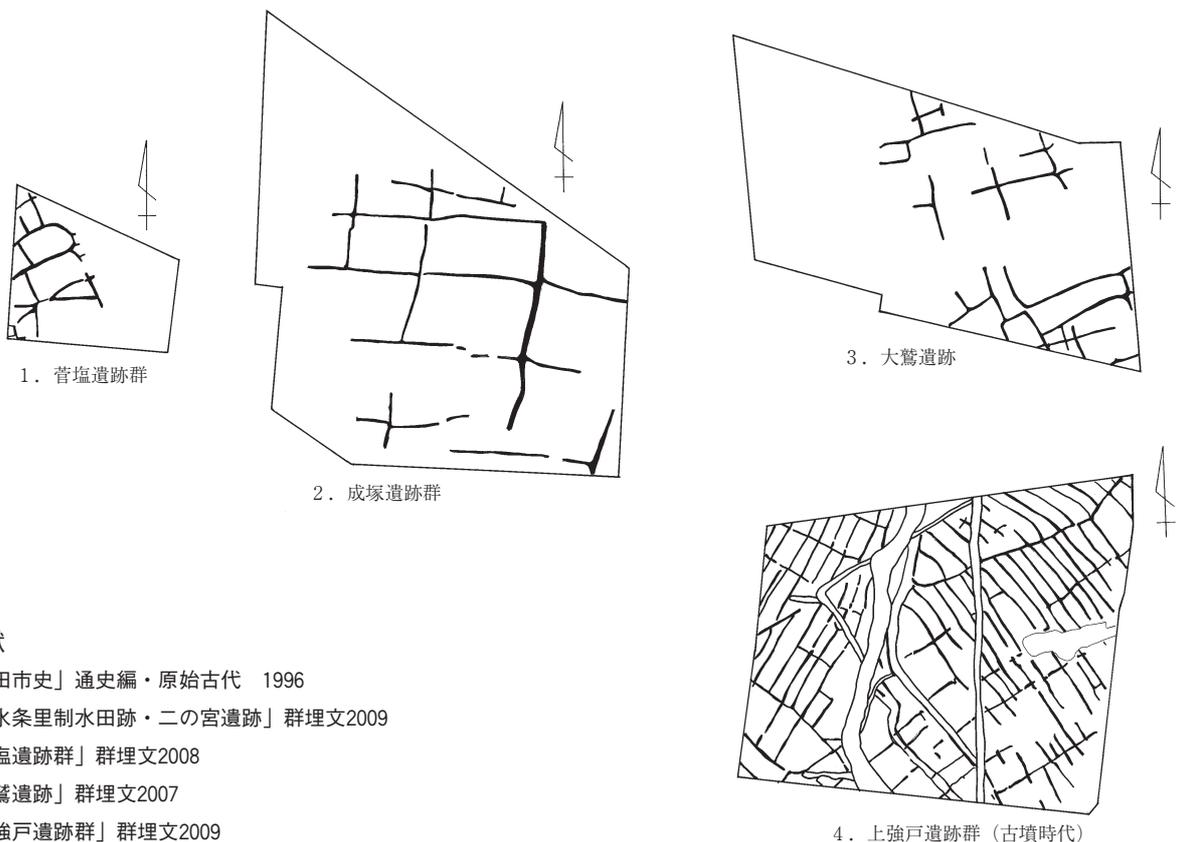
しかし、この周辺には水田区画を示す畦はほとんど見つかっておらず、その痕跡もない。洪水や後世の影響を受けていたならば溝自体も部分的には消滅していてもおかしくはないはずである。浅間A軽石で覆われた遺跡などでは軽石下から、当時の姿で建物や畑がそのままの姿で現れる。このようなことから考えるとB軽石で覆われていた遺構ならば軽石直下が当時の姿なのではないだろうか。

平安時代前半頃には、この地域も条里制により農地が整えられ盛んに農耕が行われたと考えられる。この経営主体と考えられる集落は遺跡周辺で見られず、遺跡東側の金山丘陵北側微高地上に立地する二の宮遺跡や八ヶ入遺跡から平安時代の集落が見つかっており、この集落を形成していった人たちが水田経営の主体と考えられることもできる。しかし、集落の時期は9世紀から10世紀であり、水田埋没時期とは異なるため、これらの集落が水田の経営主体と決めつけることはできない。菅塩遺跡群や大鷲遺跡、上強戸遺跡群からは掘立柱建物が検出されている。時期が明確ではないものが多いが、これらに居

住していた人たちがいる程度の区画において水田経営を行っていた可能性もある。

残存する浅間B軽石下水田状況から考えると、周辺の丘陵部では新しい産業である製鉄業や瓦の生産などがはじまり、それらの影響から古墳時代から継続的に行われてきた水田経営が衰退傾向になっていったのではないだろうか。やがて浅間B軽石降下時の12世紀頃のこの地域の水田経営はそれほど盛んではなく、検出された残存する畦周辺で行われていただけで、水田は全面に展開していなかったのではないだろうか。

しかし、個々の水田の形態は東西に長軸をとる方形を呈しており、大局的には条里制を基本とした水田区画を志向している可能性を否定するものではない。また、浅間B軽石下の畦等の残存状況が良好でない状況について、山田氏は古水条里制水田跡報告書の中で今後、検討の必要があると述べている通り、本遺跡周辺の水田遺構、およびその経営主体を含め、今後の市町村等の発掘成果もあわせ、古代水田遺構について考えていく必要があるのではないだろうか。



参考文献

- 「太田市史」通史編・原始古代 1996
- 「古水条里制水田跡・二の宮遺跡」群埋文2009
- 「菅塩遺跡群」群埋文2008
- 「大鷲遺跡」群埋文2007
- 「上強戸遺跡群」群埋文2009

第39図 周辺遺跡の水田

写 真 图 版



10区 丘陵裾部全景（北側丘陵は向山古墳群）（東から）



10区 丘陵裾部全景（西から）



10区 4号土坑遺物出土状況（西から）



10区 5号土坑全景（北から）



10区 5号土坑セクション（北東から）



10区 6号土坑全景（南東から）



10区 6号土坑セクション（東から）



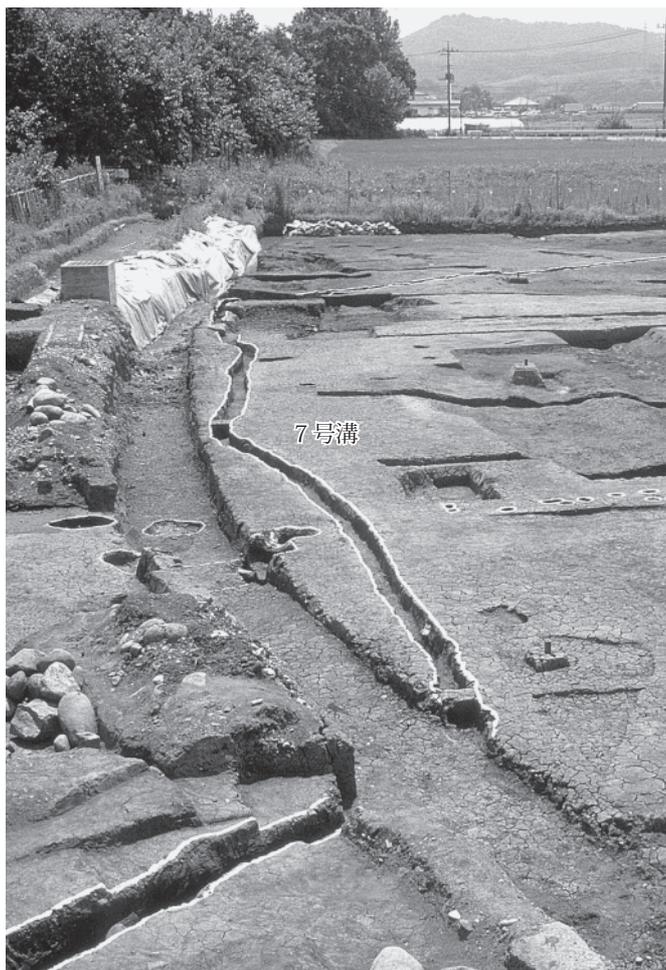
10区 2号溝全景 (東から)



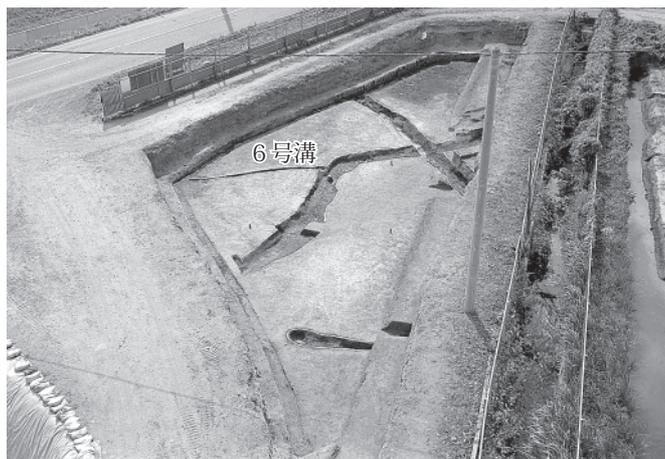
10区 2号溝セクションA-A' (西から)



10区 2号溝遺物出土状況 (北から)



10区 7号溝全景 (北西から)



10区 6号溝全景 (東から)



10区 7号溝セクションA-A' (南から)



3区 As-B下水田全景（東から）



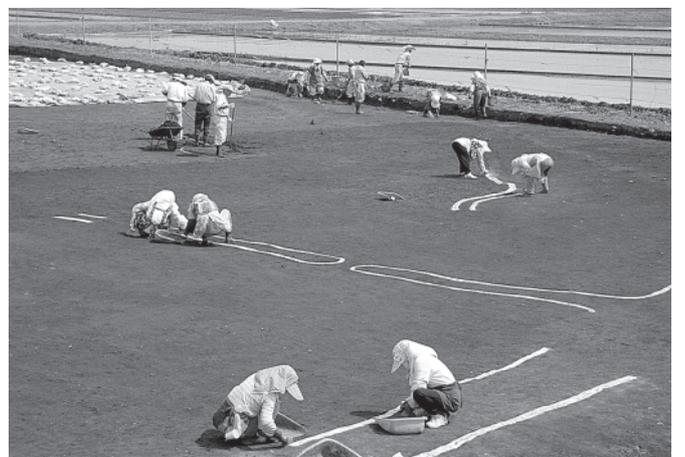
3区 畦・水口近接（北から）



3区 北側畦全景（西から）



3区 西側畦全景（北西から）



3区 作業風景（北西から）



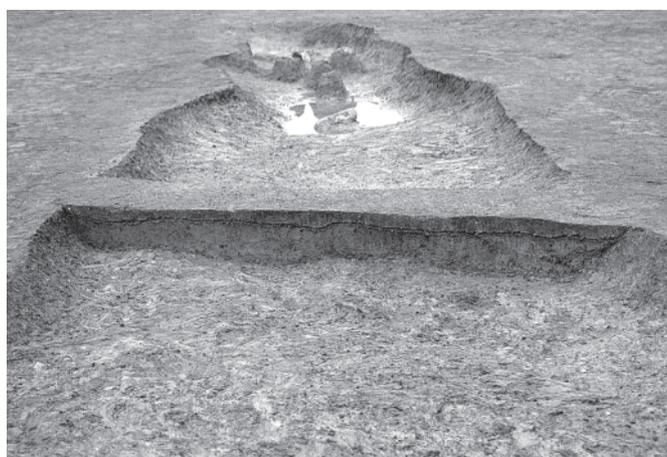
4区 As-B下水田全景（南から）



4区 南側畦近接（南から）



4区 西側大畦近接（南から）



4区 1号溝セクションA-A'（南から）



4区 1号溝全景（南から）



5区 As-B下水田全景（南西から）



5区 1号溝・1号温め状遺構全景（西から）



5区 1号温め状遺構全景（北から）



5区 1号溝縁辺畦全景（南から）



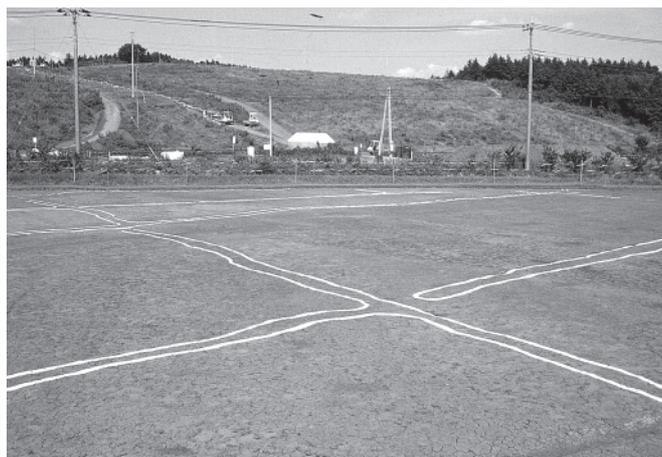
5区 1号温め状遺構セクションA-A'（北から）



6区 As-B下水田全景（東から）



6区 西側畦全景（南から）



6区 北側畦全景（南西から）



6区 東側畦近接（南から）



6区 水口近接（西から）



7区 As-B下水田全景（南から）



7区 As-B下水田全景（東から）



7区 北側畦全景（東から）



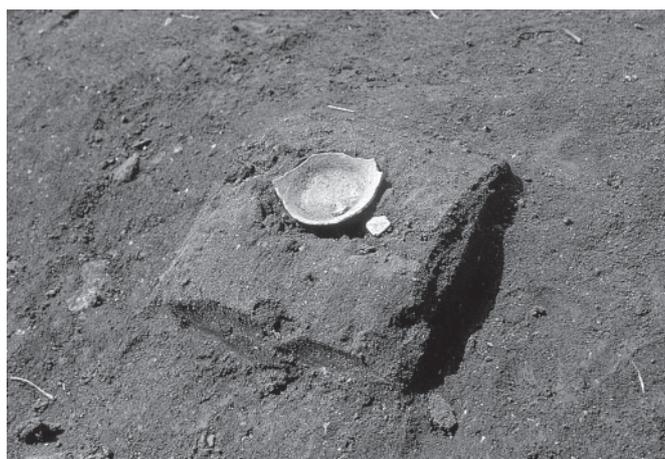
7区 南北に走行する畦近接（南から）



7区 As-B下水田面検出作業（南から）



9区 1・2・4号溝全景（南東から）



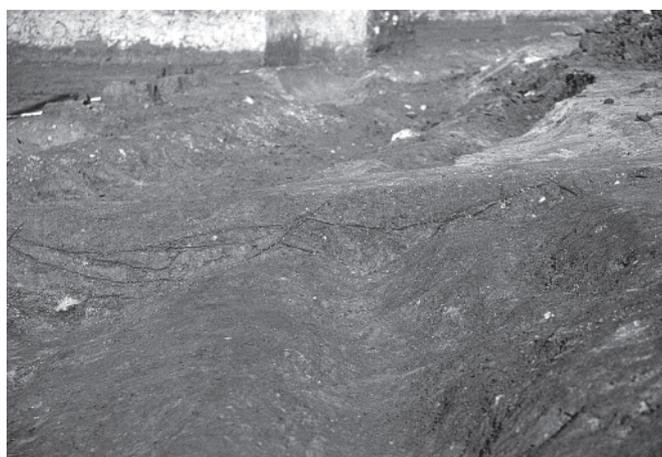
9区 1号溝遺物出土状況（北東から）



9区 1号溝木製品出土状況（北東から）



9区 2号溝遺物出土状況（西から）



9区 1・2号溝セクションA-A'（東から）



10区 1号集石全景（北から）



10区 1号集石セクションA-A'（東から）



10区 1号集石遺物出土状況（南から）



10区 1号集石全景（北から）



10区 1号竪穴状遺構全景（北から）



10区 1号竪穴状遺構セクションA-A'（南から）



10区 1号竪穴状遺構木器出土状況（南から）



10区 1号竪穴状遺構セクションB-B'（西から）



10区 2号竪穴状遺構全景（南から）



10区 2号竪穴状遺構セクションA-A'（西から）



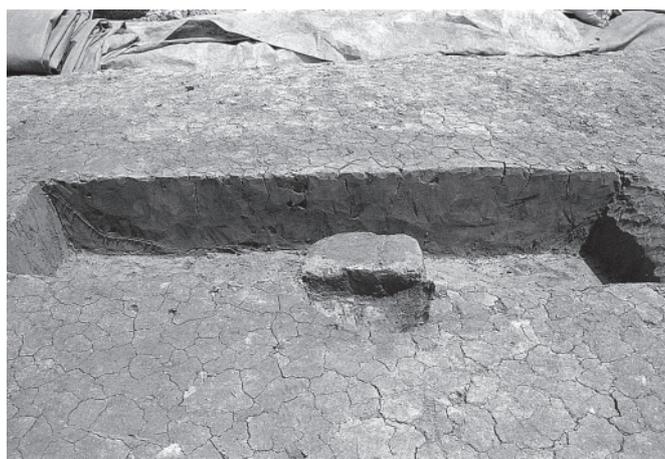
10区 1・2号竪穴状遺構全景（西から）



10区 2号竪穴状遺構1号溝セクションA-A'（西から）



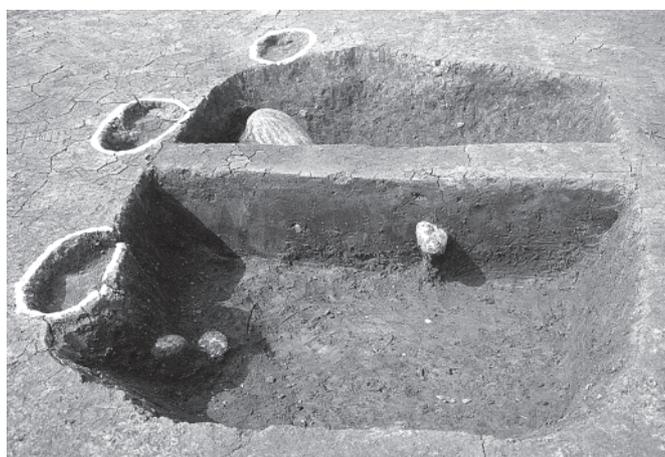
10区 1号土坑全景（南から）



10区 1号土坑セクションA-A'（北から）



10区 2号土坑全景（西から）



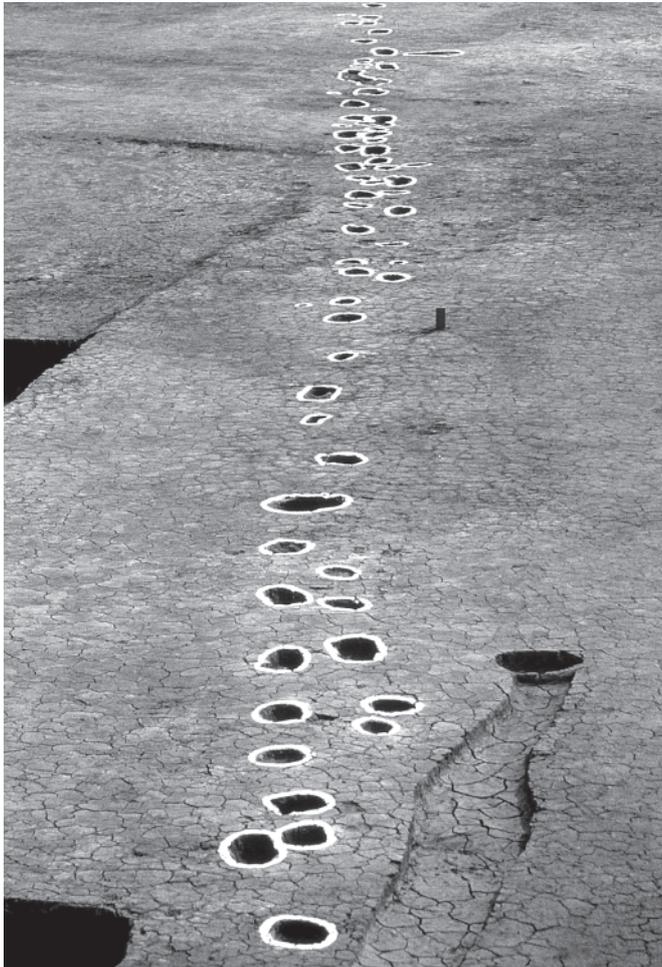
10区 2号土坑セクションA-A'（南から）



10区 1号井戸全景（西から）



10区 1号井戸近接（南から）



10区 1号柵列全景（北東から）



10区 1号杭列全景（北東から）



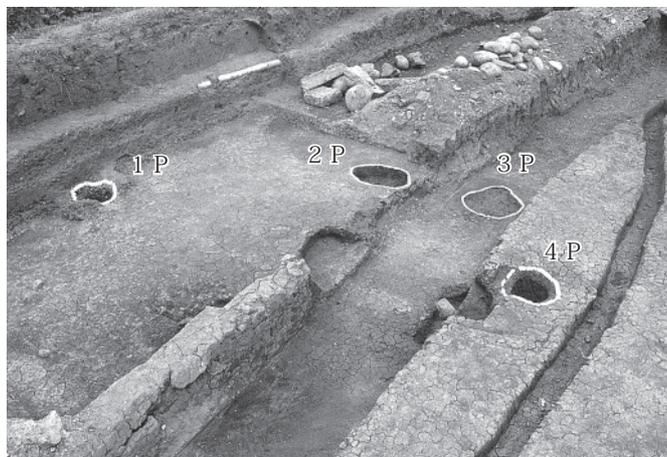
10区 1号杭列全景（南から）



10区 2号杭列全景（東から）



10区 2号杭列埋設状況（南から）



10区 1～4号ピット全景（西から）



10区 1号ピット全景（東から）



10区 5号ピットセクションA-A'（南から）



10区 6号ピットセクションA-A'（南から）



1区 1・2号溝全景（東から）



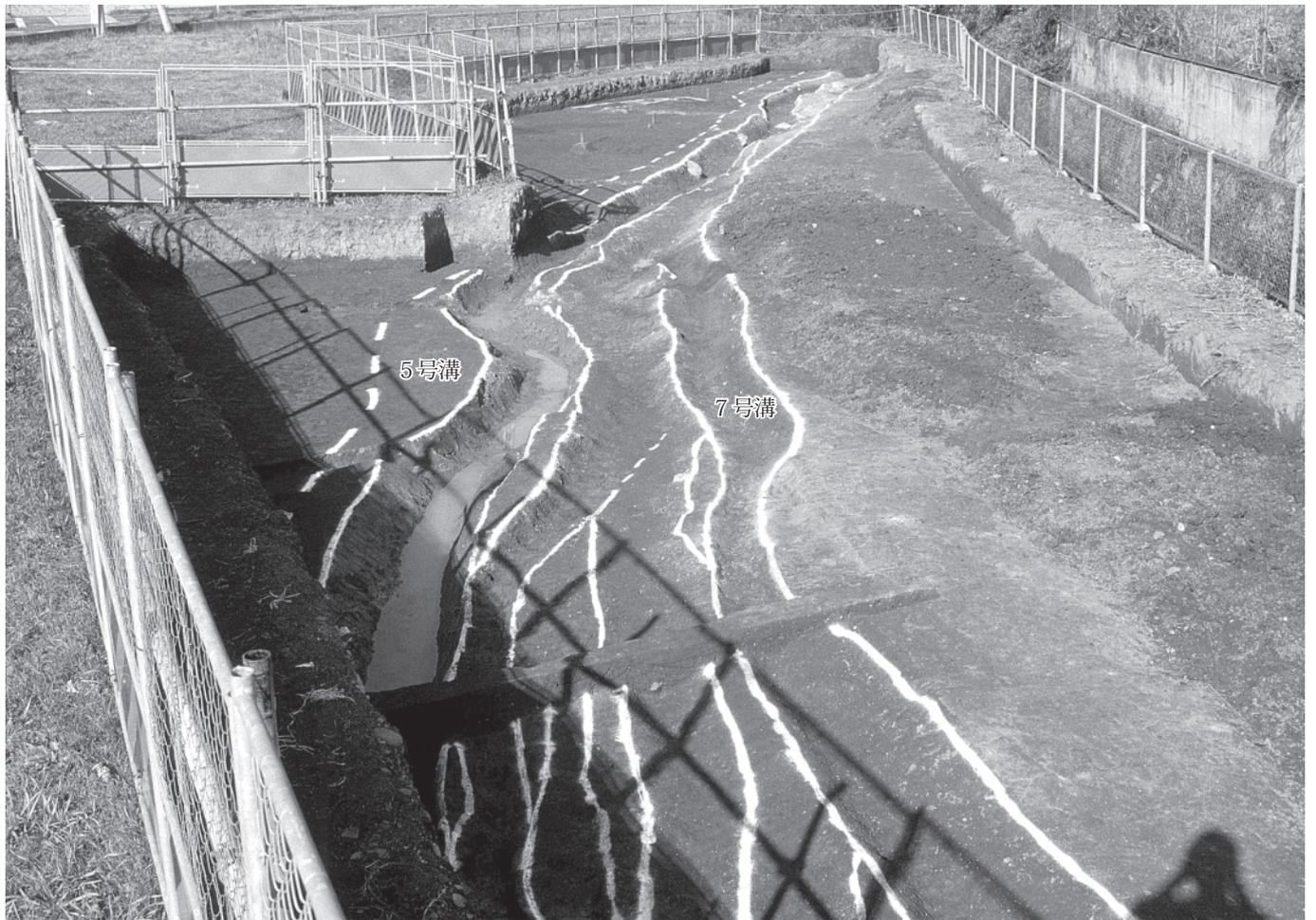
1区 1・2号溝セクションA-A'（西から）



9区 3号溝全景（北から）



9区 3号溝セクションA-A'（西から）



9区 5・7号溝全景（東から）



10区 3・4・5号溝全景（東から）



10区 3号溝全景 (南から)



10区 4号溝全景 (南西から)



10区 5号溝全景 (東から)



10区 1号流路全景 (北西から)



10区 5号溝セクションA-A' (東から)



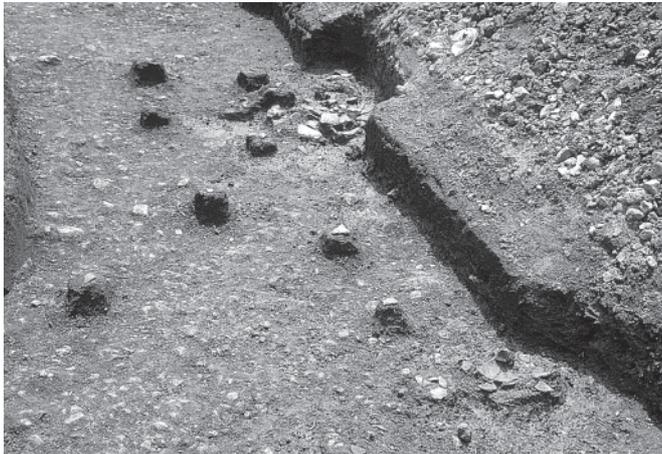
10区 1号流路セクションA-A' (南東から)



3区 土器集中部全景（東から）



3区 土器集中部遺物出土状況（南から）



10区 土器集中部遺物出土状況（西から）



10区 土器集中部遺物出土状況（北から）



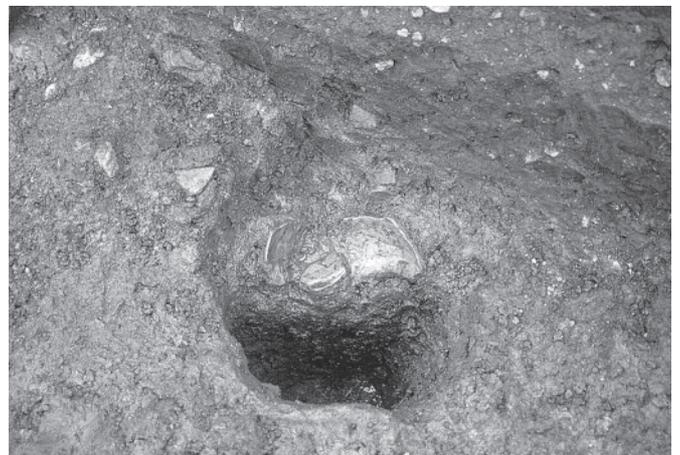
10区 土器集中部遺物出土状況（北から）



10区 土器集中部遺物出土状況（北から）



10区 土器集中部遺物出土状況（西から）



10区 土器集中部遺物出土状況（北から）



遺構外遺物出土状況（西から）



遺構外遺物出土状況（西から）



1区 北壁セクション（南から）



2区 西壁セクション（東から）



3区 北壁セクション（南から）



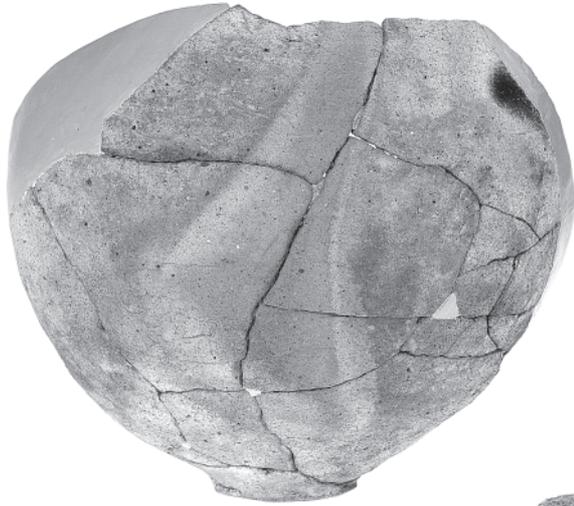
5区 北壁セクション（南から）



6区 東壁セクション（西から）



9区 北壁セクション（南から）



10区4土1



9区2溝1



10区1集石1



10区1井3



10区1集石2



10区2溝1



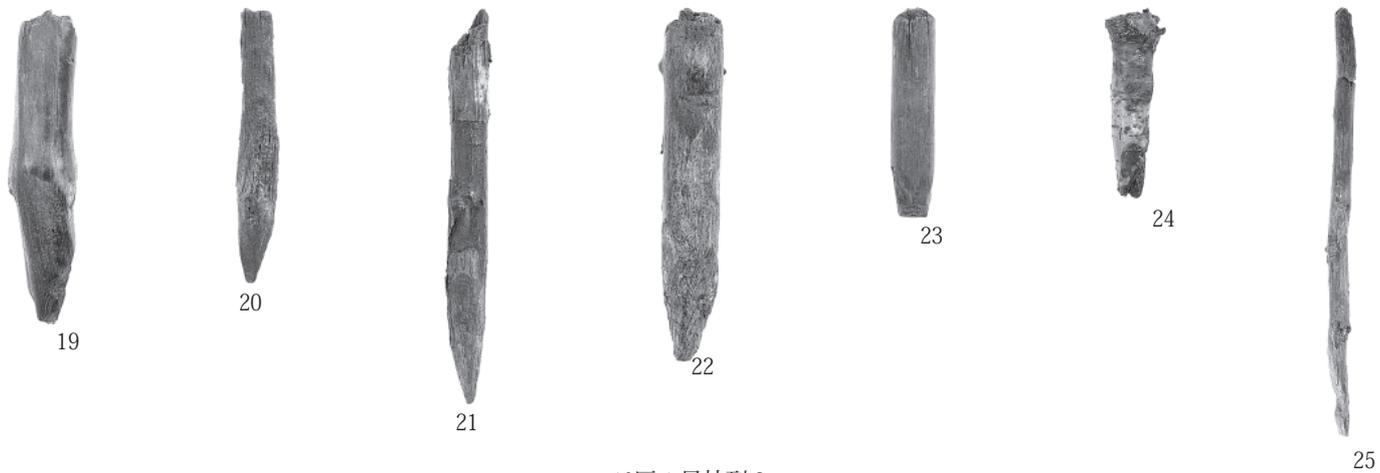
9区1溝1



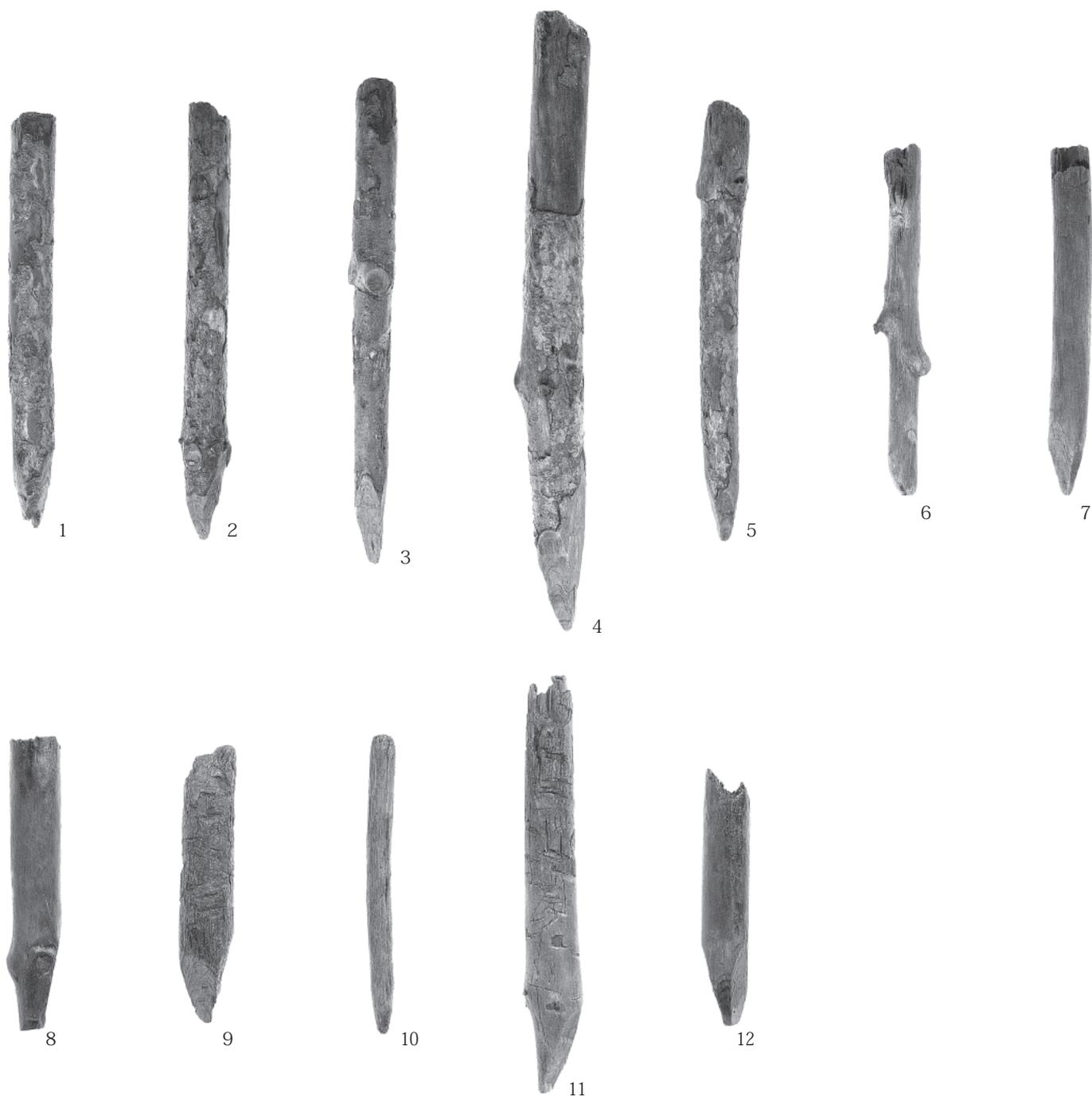
10区1集石3



10区1号杭列1

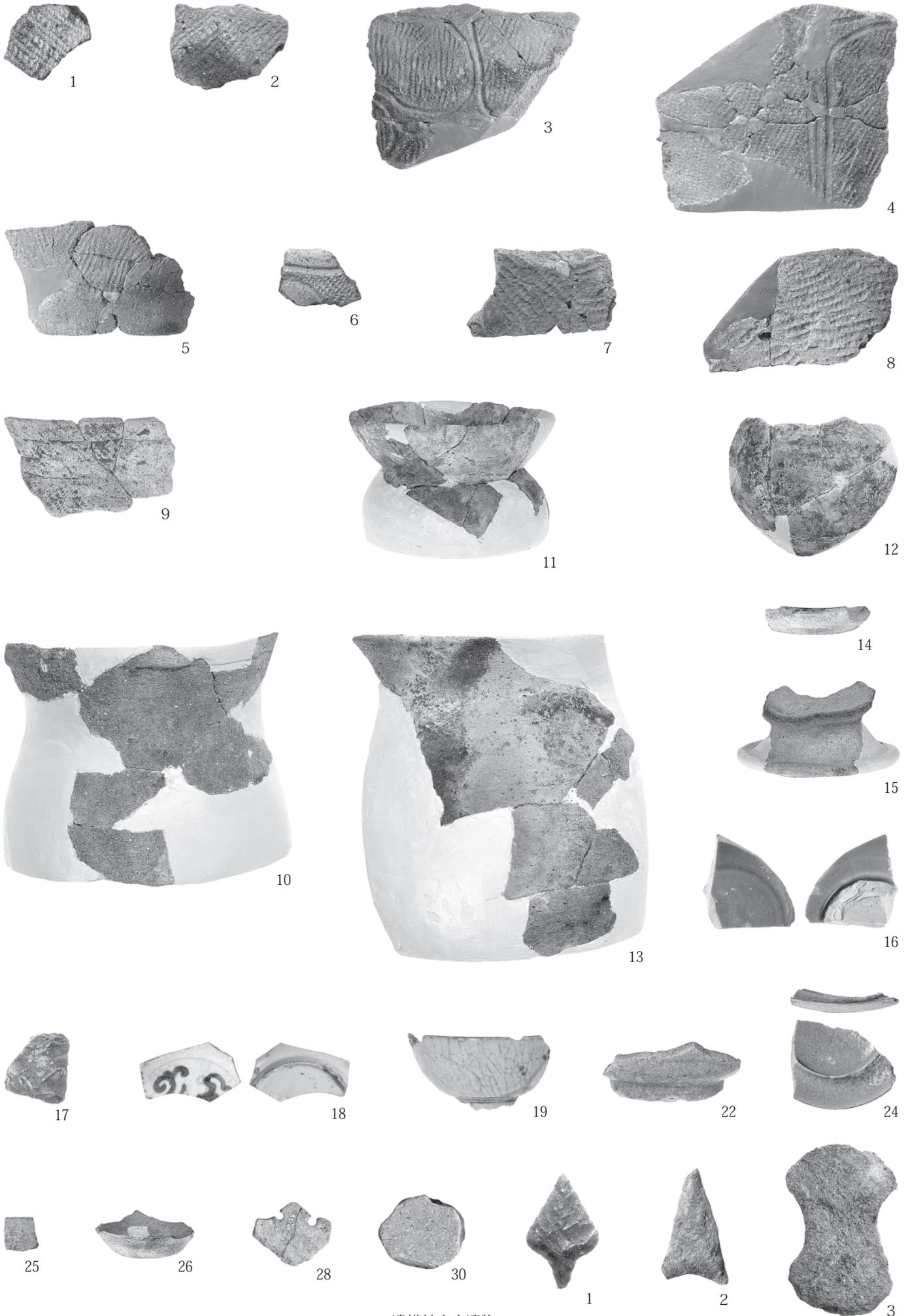


10区1号杭列2



10区2号杭列

PL.20



遺構外出土遺物 1



4



5



6



7



8



9



10



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	なりづかいせきぐん
書名	成塚遺跡群
副書名	北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	501
編著者名	須田 正久
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20100930
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	なりづかいせきぐん
遺跡名	成塚遺跡群
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしなりづかまち
遺跡所在地	群馬県太田市成塚町
市町村コード	10205
遺跡番号	T 0403
北緯（日本測地系）	362010
東経（日本測地系）	1392059
北緯（世界測地系）	362028
東経（世界測地系）	1392040
調査期間	20021201-20021231/20030401-20031231/20040401-20050331
調査面積	38,699
調査原因	高速道路建設（北関東自動車道）
種別	生産跡（水田）
主な時代	縄文 / 古墳 / 平安 / 中近世
遺跡概要	縄文－土器集中1－土器＋石器 / 古墳－土坑3＋溝3＋土器集中1－土器 / 生産－平安－水田＋溝2＋温め状遺構1 / 溝4＋集石1－土器＋灰釉陶器＋板材 / 中近世－竪穴状遺構2＋土坑2＋井戸1＋柵列1＋杭列2＋ピット6＋溝8－土器＋灰釉陶器＋陶磁器＋鉄製品＋古銭＋杭（丸木材）
特記事項	平安時代水田遺構
要約	本報告書は北関東自動車道建設に伴い、平成13年度から発掘調査が行われた成塚遺跡群の報告である。平安時代に降下した浅間B軽石で埋没した水田遺構及びそれに伴う溝や温め状遺構等検出されている。また、八王子丘陵裾部分から検出された土坑や溝からは古墳時代前期の土師器などが出土している。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第501集

成塚遺跡群

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書

平成2010年9月24日 印刷

平成2010年9月30日 発行

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘下箱田町784-2

電話 0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上武印刷株式会社

